576

576

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第9集

深谷町遺跡

川町史　576

1985.3
深谷市教育委員会

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第9集

深谷町遺跡

1985.3
深谷市教育委員会

序

郷土が日毎に発展していくのは誠に喜ばしいことです。現在の発展が、先人の努力が積み重ねられた歴史の上に成り立っていることは言うまでもありません。先人が残した文化財には、様々な形で郷土の歴史が刻まれておりますが、埋蔵文化財も例外ではありません。地中に埋もれているだけに、むしろ発掘調査には意外な発見が多いものです。

深谷郵便局の移転新庁舎建設に伴い、関東郵政局の委託により実施した、深谷町遺跡の発掘調査も思いがけない発見の連続でした。当初全く予想されなかった、縄文時代、古墳時代の貴重な遺物が豊富に埋蔵された低湿地遺跡であることが確認され、大きな成果を挙げることができました。本書はその調査結果をまとめた報告書です。困難な状況の下での調査でしたので、決して充分な内容とは申せませんが、教育、学術の分野や、文化財保護思想の普及啓蒙などに、少しでも御活用いただければ幸甚に存じます。

深谷町遺跡発掘調査の貴重な成果は、関東郵政局の御厚意の賜物です。特に建築部管理課長松本享氏、調整官平岡勇氏には、多大な御尽力をいただきました。誠に感謝に絶えません。

また、調査員を快く御承引いただいた小川望氏と坂本行弘氏、調査に終始御協力くださった池田建設株式会社のみなさま、厳寒のしかも地下水が湧出するという悪条件の下で調査に参加されたみなさま、御教示、御助言を賜わった関係者のみなさまに、心から厚くお礼を申し上げて序といたします。

昭和60年３月

深谷市教育委員会

教育長　鳥　塚　恵和男

例　　言

1．本書は、深谷郵便局建設工事に伴う、埼玉県深谷市深谷町360番地他所在遺跡の発掘調査報告書である。遺跡名は深谷町遺跡とした。

2．発掘調査は、関東郵政局より深谷市教育委員会が委託を受け、昭和57年度から59年度にわたる3ヶ年度事業として実施した。現地発掘調査は昭和57年12月7日から58年1月14日まで行った。

3．調査経費は、発掘調査原因者である関東郵政局が負担した。

4．現地発掘調査中の写真撮影は小川望、坂本行弘、澤出晃越が行い、遺物の写真撮影は澤出晃越が行った。なお、木製杓子の写真撮影は井上肇氏にお願いした。

5．遺構・遺物の実測及び実測図のトレース、拓本等は調査参加者全員で行った。なお、遺構等の垂直図版における実測レベルは標高33.6mであり、遺構の説明における数値は確認面においてのものである。また、挿図中の方位は座標北を示している。

6．縄文時代の赤彩土器及び赤彩漆器の顔料は、宮内庁正倉院事務所成瀬正和氏に分析していただき、玉稿を賜わった。

7．縄文時代の木製杓子の実測及び報文は、筑波大学研究生山田昌久氏にお願いした。

8．主な出土石器の材質は、埼玉県立自然史博物館学芸員本間岳史氏に鑑定していただいた。

9．出土木製品の樹種は、木ノ崎千代子氏に鑑定していただいた。

10．出土した魚骨は、埼玉大学教養部助教授小池裕子氏に鑑定していただいた。

11．上記以外の本書の執筆及び編集は澤出晃越が行った。

12．本書の作成にあたり、下記の方々から御教示・御助言を賜わった。特に埼玉県立博物館学芸員井上肇氏には木製品等についていろいろと御指導をいただいた。

上野佳也、梅沢太久夫、大塚達朗、小俣悟、柿沼幹夫、金子正之、川名広文、笹森健一、寺社下博、谷井彪、利根川章彦、中村倉司、長谷川勇、坂東隆秀、藤本強、三上元一、宮崎朝雄

発掘調査の組織

調査主体者　深谷市教育委員会　教育長　鳥塚恵和男

調　査　員　東京大学大学院人文科学研究科（昭和57年度当時）　小川　望（発掘）
埼玉県立熊谷工業高校講師（昭和57年度当時）　坂本行弘（発掘）
深谷市教育委員会社会教育課主事　澤出晃越（発掘・整理）

調査補助員　玉田浩一、星川勝広、山口徹、清水健治（以上埼玉大学学生）

事　務　局　深谷市教育委員会社会教育課　課長　武井克己
課長補佐兼文化財保護係長
水野四郎（昭和57年度）
島田良一（昭和58年度）
河田記久平（昭和59年度）
主事　大屋貞夫　小林京子

目　　次

序
例言
目次

Ⅰ．発掘調査に至る経過……1

Ⅱ．遺跡の地理的・歴史的環境……2

Ⅲ．調査の概要……6
　1．調査の経過……6
　2．調査結果の概要……8

Ⅳ．縄文時代の遺構と出土遺物……10
　1．縄文時代の遺構……10
　2．縄文時代の出土遺物……17
　　(1)　第1号川跡出土遺物……18
　　(2)　第3号川跡出土遺物……33
　　(3)　第1・3号川跡出土遺物……44
　　(4)　第1号土坑出土遺物……76
　　(5)　調査区南西隅出土遺物……77
　　(6)　第1号溝状遺構流入遺物……79
　　(7)　赤彩土器……84
　　(8)　木製品……86
　　(9)　魚骨……86

Ⅴ．古墳時代の遺構と出土遺物……89
　1．古墳時代の遺構……89
　2．古墳時代の出土遺物……89

Ⅵ．赤彩漆器及び赤彩土器に用いられた
　顔料……97

Ⅶ．結語……98

写真図版

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図（1／40,000）
第２図　調査区周辺地形図（1／10,000）
第３図　調査区位置図（1／500）
第４図　調査区全測図
第５図　縄文時代の遺構
第６図　縄文時代の遺構土層断面(1)
第７図　縄文時代の遺構土層断面(2)
第８図　縄文時代遺構木片等出土状態
第９図　縄文時代遺構種子等出土状態
第10図　第１号川跡遺物出土状態
第11図　第１号川跡出土土器(1)
第12図　第１号川跡出土土器(2)
第13図　第１号川跡出土土器(3)
第14図　第１号川跡出土土器(4)
第15図　第１号川跡出土土器(5)
第16図　第１号川跡出土土器(6)
第17図　第１号川跡出土土器(7)
第18図　第１号川跡出土土器(8)
第19図　第１号川跡出土土器(9)
第20図　第１号川跡出土石器(1)
第21図　第１号川跡出土石器(2)
第22図　第３号川跡遺物出土状態
第23図　第３号川跡出土土器(1)
第24図　第３号川跡出土土器(2)
第25図　第３号川跡出土土器(3)
第26図　第３号川跡出土土器(4)
第27図　第３号川跡出土土器(5)
第28図　第３号川跡出土土器(6)
第29図　第３号川跡出土石器
第30図　第１・３号川跡遺物出土状態
第31図　第１・３号川跡出土土器(1)
第32図　第１・３号川跡出土土器(2)
第33図　第１・３号川跡出土土器(3)
第34図　第１・３号川跡出土土器(4)
第35図　第１・３号川跡出土土器(5)
第36図　第１・３号川跡出土土器(6)
第37図　第１・３号川跡出土土器(7)
第38図　第１・３号川跡出土土器(8)
第39図　第１・３号川跡出土土器(9)
第40図　第１・３号川跡出土土器(10)
第41図　第１・３号川跡出土土器(11)
第42図　第１・３号川跡出土土器(12)
第43図　第１・３号川跡出土土器(13)
第44図　第１・３号川跡出土土器(14)
第45図　第１・３号川跡出土土器(15)
第46図　第１・３号川跡出土土器(16)
第47図　第１・３号川跡出土土器(17)
第48図　第１・３号川跡出土土器(18)
第49図　第１・３号川跡出土土器(19)
第50図　第１・３号川跡出土土器(20)
第51図　第１・３号川跡出土石器(1)
第52図　第１・３号川跡出土石器(2)
第53図　第１・３号川跡出土石器(3)
第54図　第１・３号川跡出土石器(4)
第55図　第１号土坑遺物出土状態及び出土土器
第56図　調査区南西隅出土土器
第57図　第１号溝状遺構流入土器(1)
第58図　第１号溝状遺構流入土器(2)
第59図　第１号溝状遺構流入石器(1)
第60図　第１号溝状遺構流入石器(2)
第61図　赤彩土器
第62図　縄文時代の木製品(1)
第63図　縄文時代の木製品(2)
第64図　古墳時代の遺構
第65図　古墳時代の遺構土層断面
第66図　第１号溝状遺構木片等出土状態
第67図　第１号溝状遺構出土遺物(1)
第68図　第１号溝状遺構出土遺物(2)

表　目　次

表１　縄文時代木片等出土レベル一覧
表２　第１号川跡出土石器一覧
表３　第３号川跡出土石器一覧
表４　第１・３号川跡出土石器一覧
表５　第１号溝状遺構出土石器一覧

写真図版目次

カラー図版　第３号川跡出土木製杓子
　　赤彩土器
図版１　１．調査区全景（北より）
　　２．第１号川跡の発掘調査風景
図版２　３．第１号川跡遺物出土状態(1)
　　４．第１号川跡遺物出土状態(2)
図版３　５．第３号川跡（西から）
　　６．第３号川跡土層断面
図版４　７．第３号川跡遺物出土状態
　　８．第３号川跡木片等出土状態
図版５　９．第３号川跡石鏃出土状態
　　10．第３号川跡木製杓子出土状態
図版６　11．第１・３号川跡の調査風景
　　12．第１・３号川跡赤彩土器出土状態
図版７　13．第１・３号川跡の足場状の遺構
　　14．第１・３号川跡足場状遺構の止め杭
図版８　15．第１・３号川跡石棒出土状態
　　16．第１・３号川跡丸木舟状木製品出土状態
図版９　17．第１号土坑遺物出土状態
　　18．第１号溝状遺構（南西より調査区中央を望む）
図版10　19．第１号溝状遺構土層断面
　　20．第１号溝状遺構木製鋤出土状態
図版11　21．第１号川跡出土土器(1)
図版12　22．第１号川跡出土土器(2)
図版13　23．第１号川跡出土石器
図版14　24．第３号川跡出土土器(1)
図版15　25．第３号川跡出土土器(2)
図版16　26．第３号川跡出土石器
図版17　27．第１・３号川跡出土土器(1)
図版18　28．第１・３号川跡出土土器(2)
図版19　29．第１・３号川跡出土土器(3)
図版20　30．第１・３号川跡出土土器(4)
図版21　31．第１・３号川跡出土土器(5)
図版22　32．第１・３号川跡出土石器(1)
図版23　33．第１・３号川跡出土石器(2)
図版24　34．第１号土坑出土土器
　　35．第１号溝状遺構流入土器
図版25　36．丸木舟状木製品
　　37．縄文時代川跡出土魚骨
図版26　38．縄文時代川跡出土種子
図版27　39．古墳時代木製品(1)
　　古墳時代木製品(2)
図版28　41．古墳時代木製品(3)
　　42．古墳時代出土稲穂

調査参加者　内田晴吉、内田政一、岡田ゆき子、金谷恵美子、河合詔子、久米紀子、小沼和子、斉藤美千代、砂田伊久子、田口美恵、都築百合子、中島由美子、中島芳子、根岸邦子、根岸邑枝、福田豊子、細川ケイ子、真下芳江、水野祥代、村田あや子、本橋玲子、森光代、横村美和子、渡辺哲子、小柳美奈子、篠崎智子、嶋田義雄、鈴木靖夫、田中秀逸、早坂広人、平井巌、猪野好文

Ⅰ．発掘調査に至る経過

埼玉県北部に位置し、利根川を隔てて群馬県と接する深谷市は、近代日本経済界の偉人渋沢栄一の生地として、また、深谷ネギの産地として知られている。古くは康正２年（1456）頃に上杉房憲が築いたといわれる深谷城の城下町として、江戸時代には中山道の宿場町として発展した。現在、人口約88,000人、面積約70 km^2で、農業生産高は県内随一を誇り、近年は工業団地の形成、宅地の増加など、急速に都市化が進行している。

こうした都市化の波に対し、深谷市では様々な事業を推進しているが、市街地整備事業の一環として進められている、国鉄高崎線深谷駅北口の駅前土地区画整理事業もその一つである。この駅前土地区画整理事業に伴い、駅前にあった深谷郵便局が、市役所の北約 100 m、深谷市深谷町 360 番地他８筆の工場跡地に移転し、新庁舎を建設することが計画された。そこで関東郵政局は、まず昭和55年９月16日付けの文書をもって市当局に法律による土地規制関係について照会した。市当局は、埋蔵文化財の有無については確認されていない旨を回答した。

昭和57年度になって深谷郵便局新庁舎の建設が実施されることになり、関東郵政局では埋蔵文化財の取り扱いについて更に慎重を期するために、市教育委員会へ再確認をした。市教育委員会は、建設予定地が埼玉県指定旧跡深谷城跡に隣接しているため、予め試掘調査を行うべきであると回答した。そこで昭和57年４月14日に関東郵政局担当官が市教育委員会を訪れ協議を行った。この結果、既に工事計画が具体的に進行していること、建設予定地は工場跡地であり、埋蔵文化財の存在の可能性も比較的低いと予想されることから、建設前の根切り工事の際に確認調査を行い、埋蔵文化財が発見された場合には直ちに工事を中断して発掘調査を実施することとなった。

昭和57年11月12日～17日に根切り工事と共に確認調査が行われた。根切り工事により現地表面を1.7～1.8ｍほど掘削したが、その結果、工事面の東部に川跡らしい遺構があり、多量の縄文土器片等が包蔵されていることが判明し、当初全く予想できなかった事態となった。市教育委員会は関東郵政局に早急に電話連絡し、急遽発掘調査体制を整えることになった。

11月22日に関東郵政局、工事を担当する池田建設株式会社、市教育委員会で発掘調査を進めるにあたっての具体的な協議を行い、できれば12月中に調査を実施すべきことが確認された。

こうして早急に発掘調査を実施することになったが、市教育委員会担当職員は12月半ばまで他の発掘調査に従事せざるを得ないため、11月29日に東京大学大学院人文科学研究科小川望氏と埼玉県立熊谷工業高校講師坂本行弘氏に調査員を依頼した。

市教育委員会は、11月29日に関東郵政局へ正式に埋蔵文化財発見の連絡通知を提出し、12月１日に埼玉県教育委員会へ深谷市 No.120 遺跡（名称深谷町遺跡）として新遺跡の発見届を提出した。

市教育委員会と関東郵政局は更に協議を重ね、昭和57年12月７日、発掘調査の委託契約を締結するとともに、慌しく調査が開始された。

II．遺跡の地理的・歴史的環境

深谷町遺跡は、埼玉県深谷市深谷町360番地他、国鉄高崎線深谷駅の北約0.8kmにある。妻沼低地の南端で、市街地の北端にあたり、現地表面は標高35.3mで、南約0.8kmで櫛挽台地櫛挽面に接し、東約0.6kmで櫛挽台地寄居面に接する。

深谷市周辺の地形を概観すると、ほぼ東西に走る国鉄高崎線付近を境界線として、南側の櫛挽台地と北側の妻沼低地に二分される。櫛挽台地は、荒川により形成された、寄居付近を扇頂として北東へ広がる洪積扇状台地であり、妻沼低地は、利根川により形成された沖積低地である。

櫛挽台地は乾燥した台地であり、晩冬から初春にかけてはひどい土埃に悩まされることもしばしばである。養蚕が盛んで桑畑が広がっているが、近年は花・植木などの栽培も盛んになりつつある。また、台地北端部は、居住環境の整備等により住宅などが急増している。構造的には、西北側の武蔵野面に比定される櫛挽面（櫛挽段丘）と、東南側の立川面に比定される寄居面（御稜威ヶ原段丘）とで段丘状に形成されている。櫛挽面はほぼ高崎線沿いの崖線で、比高５～10mをもって妻沼低地と接しているが、寄居面は高崎線より北へ1.5～1.8kmほど延びており、比高２～５mをもって妻沼低地と接している。接線付近の標高は、櫛挽面40～50m、寄居面が32～36m、妻沼低地が30～31mである。櫛挽面の西には、岡部町山崎山などの松久丘陵を挟んで立川面に比定される本庄台地が広がっている。寄居面の南側には、荒川を挟んで下末吉面に比定される江南台地が東西に延びている。櫛挽面の北東端近くには、第三紀層から成る残丘である標高98.0mの仙元山があり、熊谷市内の寄居面東端にも同様の残丘、標高77.4mの観音山がある。なお、台地北端の櫛挽面と寄居面の境界付近に、活断層（深谷断層）が確認されている。

妻沼低地は利根川流域に広がる広い低地である。南は熊谷市付近を境として、秩父山塊に連なる台地や丘陵と大宮台地に挟まれた荒川低地に続き、東は行田市付近を境として加須低地に連なる。妻沼低地内は、利根川の流路の変遷や氾濫により自然堤防が発達していたものと思われ、深谷市内には血洗島、矢島、大塚島、内ヶ島などの島地名が多いこともこのことを裏付けている。市内明戸地区では「昔は畑七分に田が三分」と言ったらしいが、現在では耕地整理が進みかなりの部分が水田化されており、旧状を把握することは困難である。しかし、深谷市遺跡詳細分布調査（註１）によれば、寄居面北端部付近から西北へ、主に古墳時代後期以降の遺跡が島地名の土地を包括して連続していることが確認された。このことは、自然堤防の様子をよく表しているものと思われる。また、昨年７月より開始された、国道17号深谷バイパス建設工事に伴う発掘調査（註２）による成果が期待されるところである。なお、妻沼低地の南端、南に櫛挽面、東に寄居面を控える一画に深谷市の市街地があり、周辺では住宅が急増している。

深谷市内では、まだ旧石器時代の遺跡は確認されていないが、縄文時代早期・前期の遺跡は、櫛引台地の北端部に若干数確認されている。昭和53年度の割山遺跡発掘調査（註３）においても、遺構は検出されなかったが、諸磯式土器が出土している。

縄文時代中期になると、前畠遺跡・島之上遺跡・出口遺跡（註４）・小台遺跡（註５）など、遺

1．内ヶ島氏館跡　2．上敷免遺跡　3．皿沼城跡　4．伝幡羅太郎館跡　5．木の本古墳群　6．庁鼻和城跡　7．深谷城跡　**8．深谷町遺跡**　9．大沼弾正忠屋敷跡　10．桜田馬場　11．曲田城跡　12．桜ヶ丘組石遺跡　13．秋元氏館跡　14．小台遺跡　15．割山遺跡　16．鼠裏遺跡　17．萱場松原遺跡　18．前畠遺跡　19．島之上遺跡　20．出口遺跡　21．人見館跡

第1図　遺跡位置図（1／40,000）

跡数は飛躍的に増加する。萱場松原遺跡（註６）でも遺構は確認されなかったが、周辺に集落跡があることが推定されている。これらの遺跡は、中期末から後期初頭にかけてのものが多く、櫛挽面北端、標高70ｍ付近から末端の、上唐沢川、押切川、戸田川、唐沢川などによって南北に開折された谷筋や、寄居面北端部に密集して分布している。こうした状況は、扇状地形にみられるいわゆる扇状湧水に深く関連しているものと理解されている（註７）。

なお、妻沼低地内の微高地上でも、市の西側の伊勢方、谷之に縄文時代中期の遺跡があることが確認され、市の東側の上増田では加曽利ＥⅡ式土器が出土している。また、国道17号線深谷バイパス建設路線の試掘調査においても縄文時代中期～後期の土器片が検出されたらしい（註９）。縄文時代の妻沼低地内における遺跡は、まだ明瞭には確認されておらず、今後の調査に期待されるところが大きい。

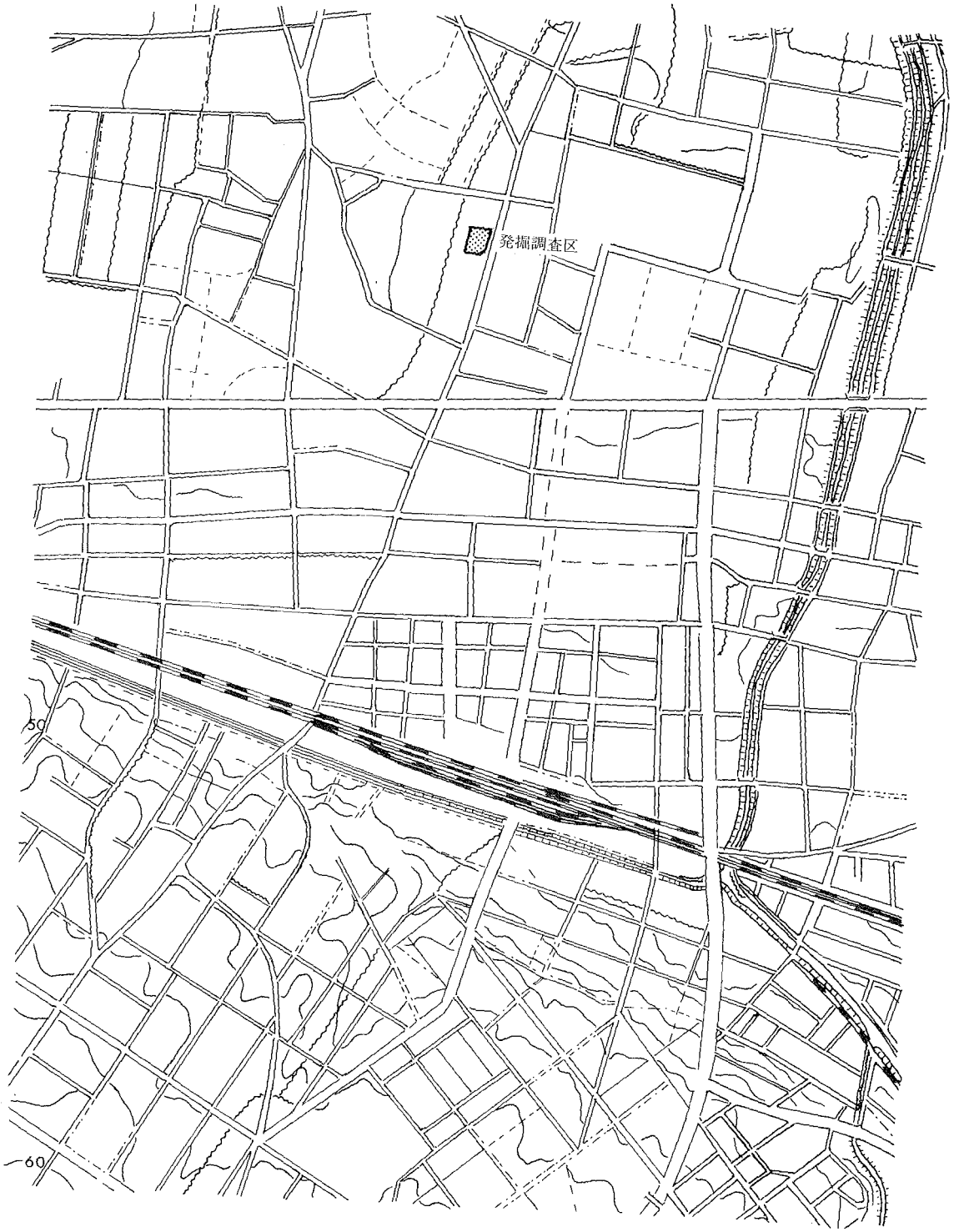
堀之内期になると遺跡数は激減するが、桜ヶ丘組石遺跡など櫛挽台地北端部に若干数確認されている。寄居面北端に接する城下遺跡（註９）では、堀之内期の性格不明の遺構などが調査されている。縄文時代晩期の遺跡は、市内では利根川に近い沼尻で確認されたのみである。

弥生時代になると、岡部町四十坂遺跡（註10）、妻沼町飯塚遺跡（註11）、深谷市上敷免遺跡（註12）、熊谷市池上遺跡（註13）など、低地に臨む台地末端部や低地内微高地上に中期の遺跡が散見される。弥生時代後期から古墳時代後期にかけての遺跡の分布状況はあまり明瞭ではないが、弥生時代中期以来の状況が踏襲されていったものと考えられ、深谷町遺跡の北側に、古墳時代前期～中期頃の遺跡の存在が推定されている。

古墳時代後期には遺跡数が爆発的に増加する。櫛挽面北端の割山埴輪窯跡（註14）や、寄居面北端の木の本古墳群を含む一帯など、台地上の遺跡も決して少なくはないが、妻沼低地の微高地上に数多くの遺跡が分布しているのが目立つ。こうした状況は水稲耕作の発展と密接な関係があるものと考えられ、条里制の時代へ受け継がれていった。

以上のように、深谷市においては、各時代の生産様式を基盤とした居住或いは生業の場の選択の状況が、深谷市の地形が比較的単純なだけに、遺跡の分布状況に明瞭に現れたものといえよう。しかし、深谷町遺跡のような低湿地における縄文時代の遺跡などの把握は全く不充分であり、今後の研究に大きな課題を呈示したものといえる。

註１　昭和56年度・57年度に調査を実施。主体は深谷市教育委員会。
註２　発掘調査の主体は埼玉県埋蔵文化財調査事業団。
註３　今泉泰之・大和修・谷井彪他　「割山遺跡」　昭和56年３月　深谷市割山遺跡発掘調査会
註４　横川好富・小川良祐・柿沼幹夫・笹森健一他　「前畠・島之上・出口・芝山」　昭和52年　埼玉県教育委員会
註５　蛭間真一他　「小台遺跡」　昭和54年３月　深谷市小台遺跡調査団
註６　澤出晃越他　「萱場松原遺跡」　昭和59年３月　深谷市教育委員会
註７　柿沼幹夫　「Ⅱ．立地と環境」（註４所収）
註８　礒崎一氏の御教示による。
註９　澤出晃越他　「城下遺跡」　昭和58年３月　深谷市教育委員会
註10　栗原文蔵　「四十坂遺跡の初期弥生式土器」　上代文化第30輯　昭和35年　国学院大学考古学会
註11　増田逸朗　「飯塚遺跡」　埼玉県土器集成　昭和51年　埼玉考古学会
註12　蛭間真一他　「上敷免遺跡」　昭和53年３月　深谷市教育委員会
註13　中島宏・杉崎茂樹他　「池守・池上」　昭和59年３月　埼玉県教育委員会
註14　註３及び今泉泰之他　「割山遺跡（第３次）」　昭和57年２月　深谷市教育委員会



第２図　調査区周辺地形図（1／10,000）

Ⅲ．調査の概要

１．調査の経過

調査区は、深谷郵便局新庁舎建設工事の根切り工事により、現地表面から1.7～1.8ｍほど掘り下げられていた。根切り工事の際の確認調査により、根切り工事面が遺構確認面として適度であることが確認されていたため、表土の除去などの必要は全くなかった。なお、建設工事を担当した池田建設株式会社の御厚意により、発掘現場事務所などとして工事現場事務所の一部を借用した。

昭和57年12月７日、調査前の状況を写真撮影し、直ちに調査を開始した。当初は第１号川跡しか確認されていなかったが、地盤が軟弱で湧水も激しく、精査は困難であった。そこで第１号川跡の形状を確認するために４本のサブトレンチを設定したが、その結果第１号川跡には予想以上に多くの遺物が包蔵されているものと判断された。なお、排土処理のためにベルトコンベアを用い、湧水対策として排水路を作り、電動ポンプを常時使用して調査区外へ水を処理した。

第１号川跡の東側に第２号川跡が検出され、第１号川跡に合流していることが確認された。また、第１号川跡の北端部を破壊している黒色土部分より、12月９日に土師器の小破片とともに稲の穂の一部が出土し、古墳時代の溝状遺構であることが確認され、第１号溝状遺構と呼称することにした。この遺構は南西へ延びているものと推定されたが、処々で浅い攪乱を受けていることもあり、プランはすぐには確認できなかった。

しだいに遺構の状況がはっきりしてきたため、ベルトを設定して遺構の調査を進めた。遺物は平板測量により出土ポイントをチェックすることとした。中央航業株式会社に委託して基準杭を３本設定し、更に補助杭10本を設定した。

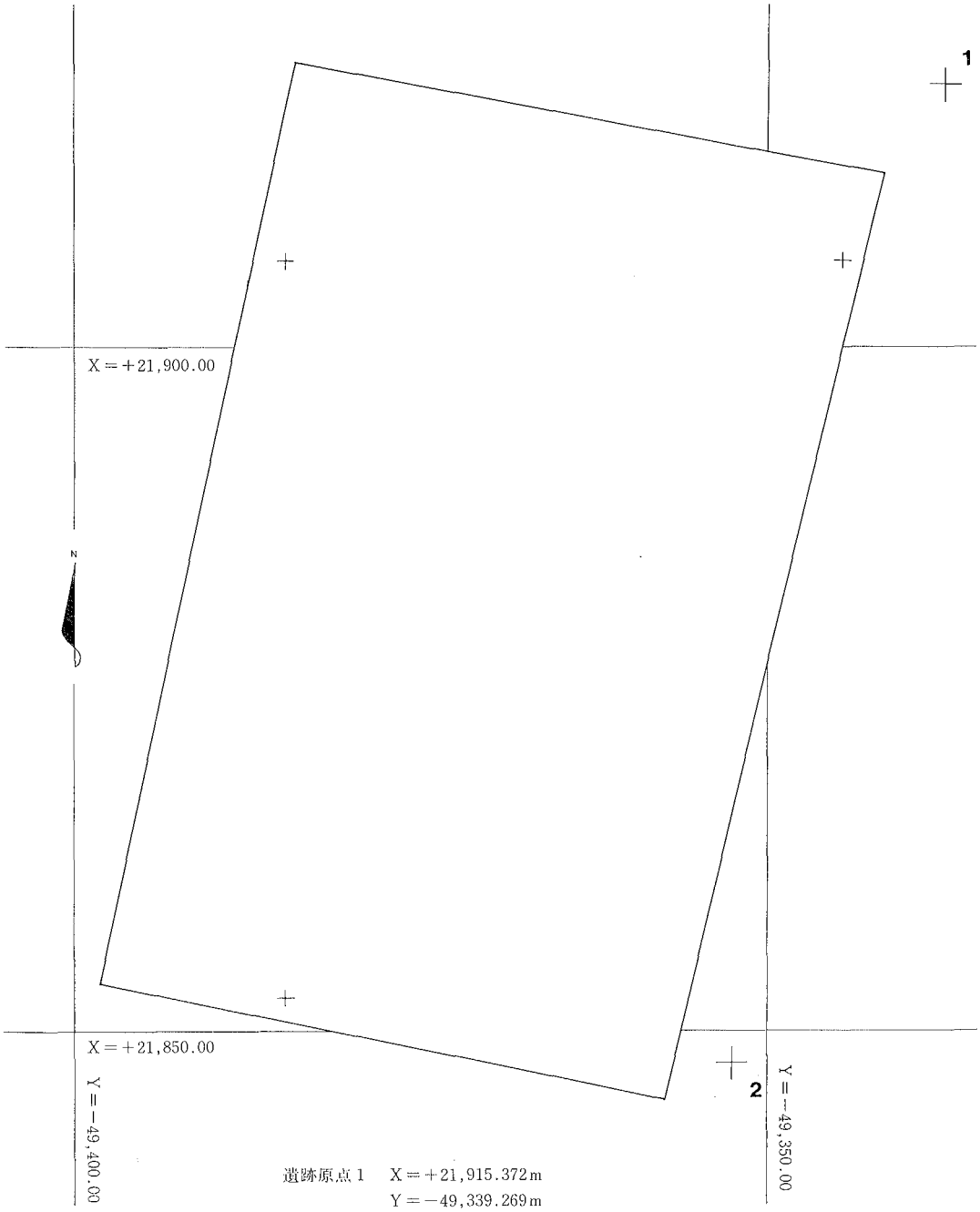
調査を進めるに従い、第１号川跡と第１号溝状遺構には植物遺物が豊富に包蔵されており、他にも遺構があるらしいことがわかってきた。当初は第１号川跡以外にはほとんど遺構はないものと推定されていたため、12月中に調査を終了する予定であったが、期間内に終えるのは難しい状況になってきた。そこで、その旨を関東郵政局へ連絡し、市教育委員会職員に応援を要請した。市教育委員会職員には、多忙な中を12月17日～28日の間、毎日５～10人の応援を得た。

12月22日には第３号川跡が確認され、12月24日にはこの川跡から木製杓子が出土した。このため12月中に調査を終了することが全く不可能となった。市教育委員会は、急遽埼玉県教育局文化財保護課を通じて関東郵政局へ調査期間の延長を要望し、関東郵政局は１月14日までの延長を了承した。

12月29日～１月５日の間は、安全確保のために現場を完全に封鎖するため、調査も中断した。

明けて昭和58年は１月６日より調査を再開した。調査区南西隅からも遺物が出土し、その東側には第１号土坑が検出された。第１号溝状遺構からは木製鋤、木製鋤の把手などが出土した。

第１号川跡と第３号川跡の合流地点は特に遺物の出土量が多く、遺物出土地点の混乱を避けるために第１・３号川跡と呼称することにした。当初は全遺物の出土ポイントをチェックする予定であったが、時間的な制約から断念せざるを得なくなり、第１・３号川跡は一部をサンプル的にチェッ



遺跡原点１　X＝＋21,915.372m
Y＝－49,339.269m
H＝35.884m
遺跡原点２　X＝＋21,848.210m
Y＝－49,352.082m
H＝35.850m

第３図　調査区位置図（1／500）

クすることにした。

１月10日以降は、主に調査に参加した学生たちとともに、工事用の水銀灯や懐中電灯まで使用して夜半まで作業を行う状態となったが、１月14日午後５時30分頃、調査範囲の測量を終え、慌しく現地発掘調査を終了した。

２．調査結果の概要

遺跡は、妻沼低地の南端部、深谷市の市街地北端にある。現地表面の標高は約35.3ｍであるが、表層の0.3～0.4ｍは盛土である。発掘調査の対象となったのは工場跡地の約2,800m^{2}である。当初は縄文時代・古墳時代の遺跡が存在することは予想もできなかったが、遺構の確認面が現地表面の下1.7～1.8ｍ（標高33.5～33.6ｍ）と深かったため、遺構は比較的良好に保存されていた。深谷郵便局新庁舎建設の根切り工事面が、遺構の確認面として最適であったことも幸いであった。なお、工場が建造される前は水田であったらしい。

確認された遺構は、縄文時代の川跡３条と土坑１基、古墳時代の溝状遺構１条と土坑１基である。

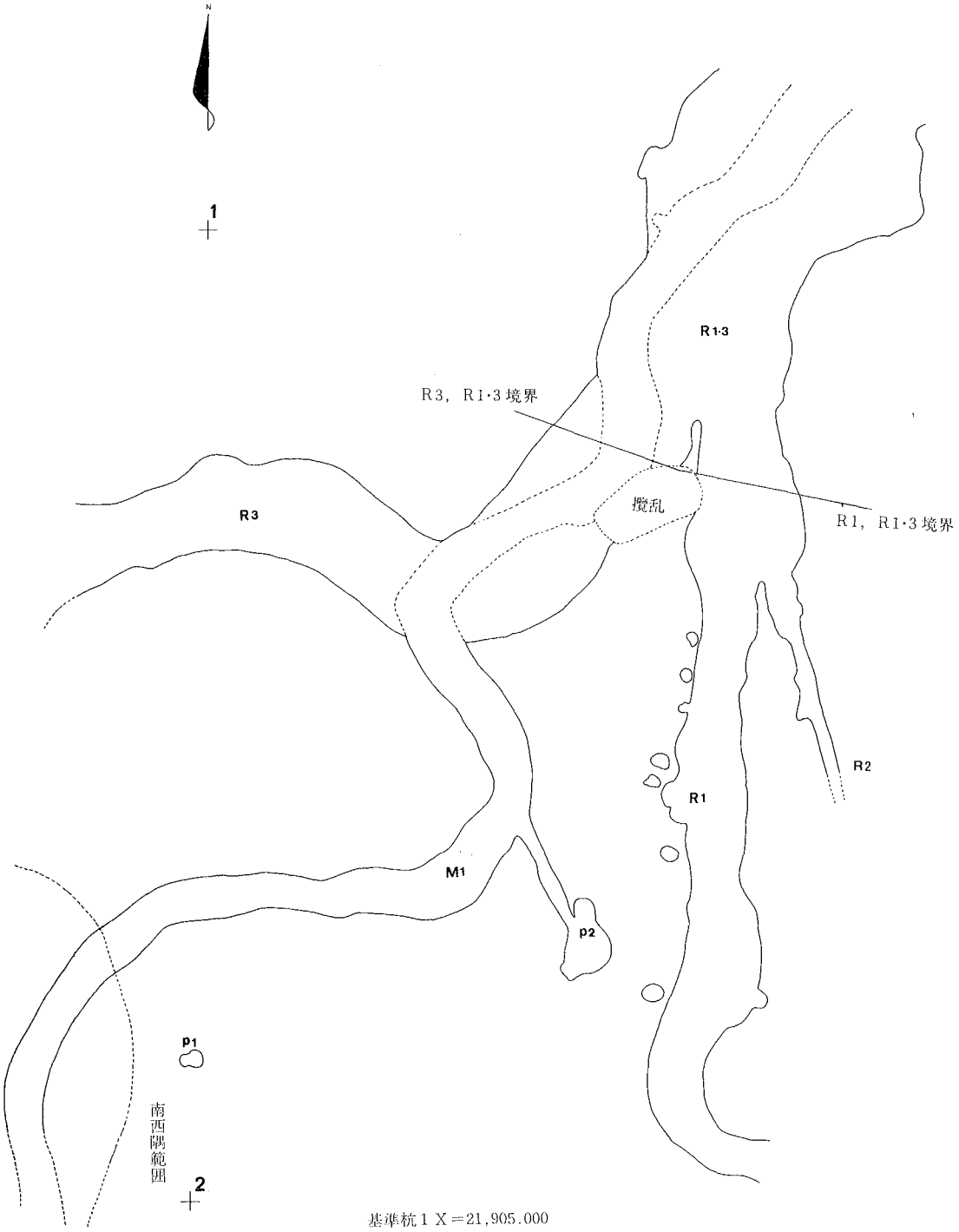
縄文時代の川跡は第１号～第３号川跡と呼称した。最も細い第２号川跡は、人工的な溝の可能性もあり、第１号川跡に合流している。第１号川跡と第３号川跡は調査区北東部で合流しており、遺物の出土地点等の混乱を避けるために第１・３号川跡と呼称した。これらの川跡からは、縄文時代中期末葉加曽利ＥⅢ式～後期前葉堀之内Ⅱ式の土器片や、赤彩土器、石器、木製品を含む木片等、クルミ・トチ等の種子などが多量に出土した。第３号川跡からは木製杓子が出土している。第１・３号川跡は、最も深く遺物の出土量も最も多い。丸木舟状木製品が出土し、クルミなどもまとまって出土した。なお、第１・３号川跡には、長さ約４ｍの丸太を足場状に設置した遺構も検出された。川跡出土遺物の大半は、流入したものか廃棄されたものと考えられる。

縄文時代の土坑は、調査区南西部に位置する小土坑で、第１号土坑とした。無文の浅鉢が出土した。また、第１号土坑の西側（調査区南西隅）は南西へ向ってわずかに傾斜しており、遺物も出土した。第３号川跡の延長である可能性もある。

古墳時代の溝状遺構は第１号溝状遺構と呼称した。調査区南西隅から北東隅へ蛇行しており、調査区中央では東へ大きく湾曲している。木製鋤や木製鋤の把手などの木製品を含む多量の木片等が出土したが、土器の出土量はごくわずかであった。稲の穂の一部も出土しており、水稲工作に関連した水路跡と考えられる。調査区の北東部で第３号川跡と第１・３号川跡を破壊している。

古墳時代の土坑は、第１号溝状遺構と第１号川跡の間に位置し、第２号土坑とした。細い溝状遺構により第１号溝状遺構と繋っており、第１号溝状遺構に付属した遺構と考えられる。

以上のように深谷町遺跡は、他の低湿地遺跡と同様に、赤彩土器、木製品などの貴重な遺物が出土したことが特色となっている。出土遺物の総数は、微小破片まで含むと２万点以上になると推定される。なお、平面測量は全て平板によることとしたため、調査区内には基準杭を設定し、特にグリッド等は設定しなかった。地山は黄白色粘土、その下は青灰色粘土である。



基準杭1 X＝21,905.000
Y＝49,378.000
H＝33.841
基準杭2 X＝21,862.000
Y＝49,378.000
H＝33.781

第4図　調査区全測図

Ⅳ．縄文時代の遺構と出土遺物

１．縄文時代の遺構（第５図）

縄文時代の人工による遺構は、土坑１基と丸太を足場状に設置したもののみであるが、自然の川跡が検出され、遺物が大量に出土した。川跡は３条あり、いずれも遺物がびっしりと堆積していた。川跡という性格のため、確認面が軟弱かつ地下水が湧出してきたこともあって、その範囲を明確化することは困難であり、第５図は多分に模式化していることをお断わりしておきたい。

○第１号川跡

調査区の南東隅でほぼ直角にカーブし、北流し、調査区北東部で第３号川跡と合流している。幅1.6～3.5ｍ、深さ10～40cmほどの浅い川跡である。河床は、やや細く蛇行する様子が見受けられた。この川筋に沿って、径0.5～1.0ｍほどの浅い擂鉢状の窪みが10ヶ所前後あった。

○第２号川跡

第１号川跡の東側を北流し、第１号川跡に合流している。幅0.5～1.5ｍ、深さ10～20cmの小規模なもので、立ち上がりも比較的急傾斜であり、人工的な溝跡とも考えられるが、明確ではない。堆積土中から遺物が多量に出土したことは、他の川跡と同様である。

○第３号川跡

調査区の西側から蛇行して東流し、第１号川跡と合流する。幅3.0～4.5ｍ、深さ25～50cmほどで、最も整った形態を呈している。部分的に河床には浅い窪みが認められる。東半は古墳時代の第１号溝状遺構に切られており、河床の状態等は不明である。

○第１・３号川跡

第１号川跡と第３号川跡は調査区の北東部で合流しており、形態等から第３号川跡が本流とも考えられるが、河床の変化が激しいことや、遺物の出土位置の混乱を避けるために、敢えて第１・３号川跡と呼称することにした。古墳時代の第１号溝状遺構に切られ、覆土の判別が困難であった。

幅は7.0～11.0ｍ、深さはだいたい40～60cmであるが、河床の凹凸が激しく、土坑状に深くなった部分が数ヶ所認められ、最も深い部分で約110cmを測った。土坑状に深くなった部分のうち２ヶ所に60×30cmほどの大石があった。石質はスコリア質の輝石安山岩である。

東端に、長さ4.0ｍ、太さ0.3～0.6ｍほどの丸太が南北に設置されており、その北西際にはこの丸太が崩れるのを防ぐかのように長さ約110cmの杭が打ち込まれていた（第８図）。丸太の両脇はかなり深くなっており、足場として構築された遺構と考えられる。この足場状遺構の東側からは、丸木舟状の木製品が出土している。

以上の川跡からは、土器片、石器などの他、杓子などの木製品を含む木片等、クルミ・トチなどの種子類などが、全般的に多量に出土した。木片等は第３号川跡及び第１・３号川跡から、クルミ・トチなどの種子類は第１・３号川跡から特に多く出土した（第９図）。

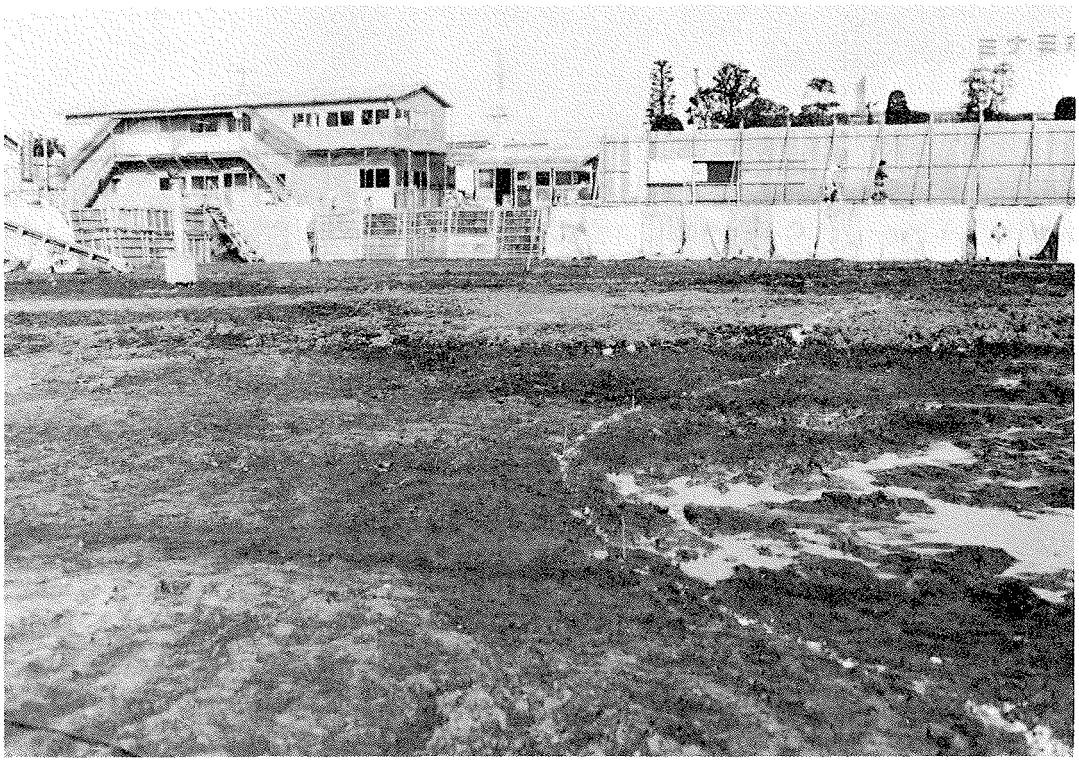
それぞれの川跡は、出土遺物や土層等をみる限りでは、同時期に存在した可能性が高い。

○第１号土坑（第55図）

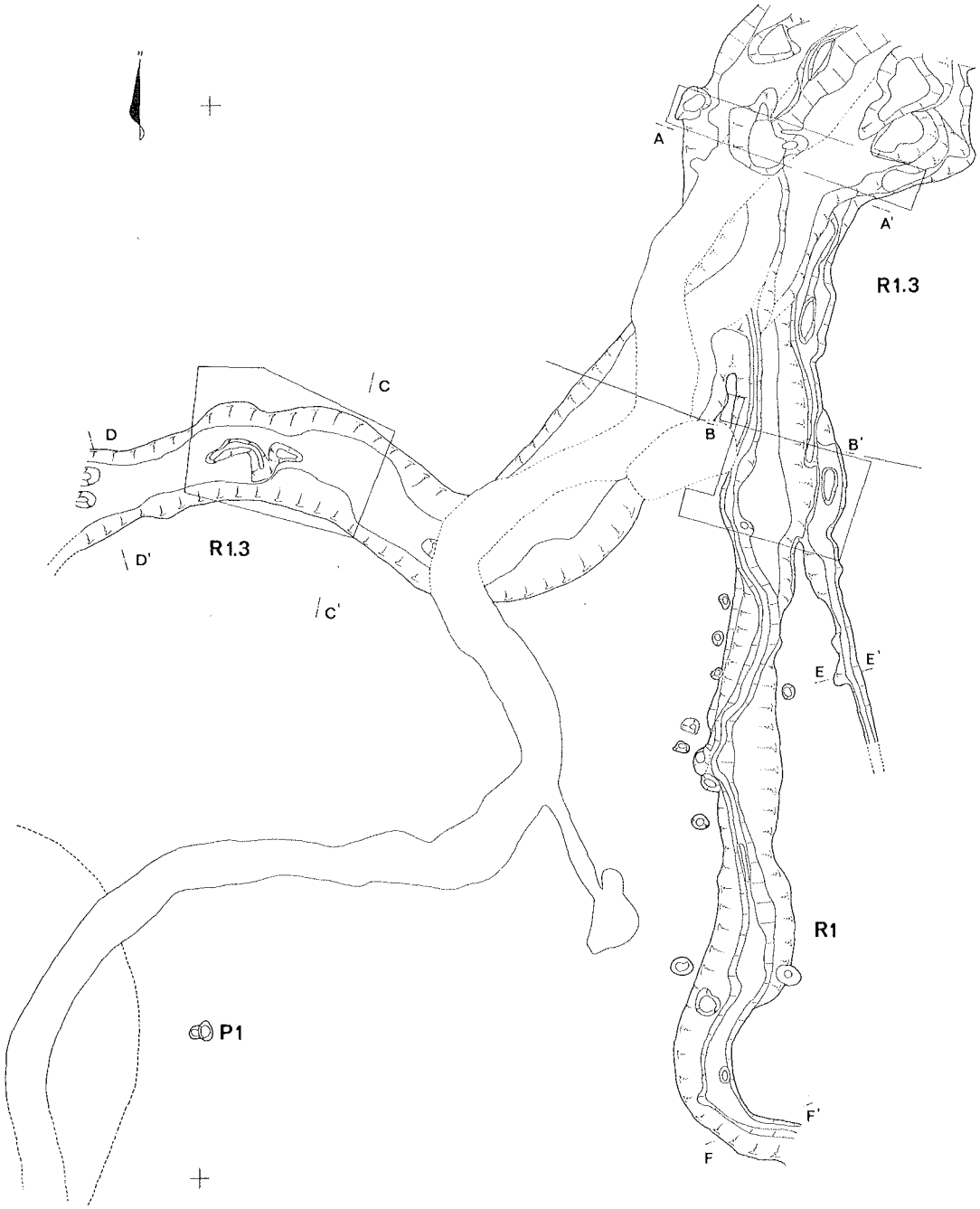
調査区南西部に位置する。平面プランは0.9×0.8ｍの瓢簞形を呈し、深さは20～30cmで浅い段を有する。壁は比較的緩やかに立ち上がる。２個の自然石とともに無文の浅鉢が出土している。

第１号土坑の西側（調査区南西隅）は、南西へ向かってわずかに傾斜しており、土器片、石器等が出土した。第３号川跡の続きとも考えられる。

なお、川跡と切り合っている第１号溝状遺構にも、多量の縄文時代の遺物が流入していた。



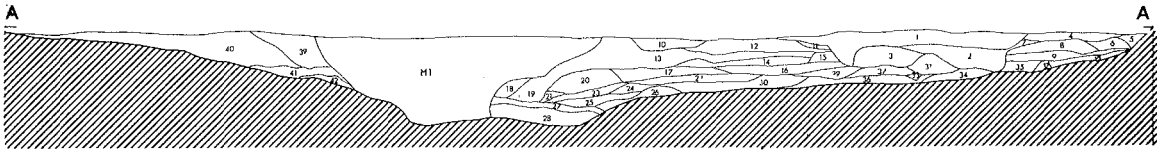
発掘調査前（南より）



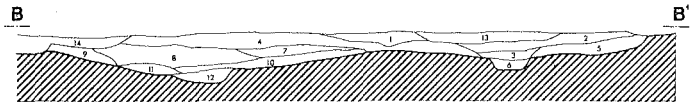
※枠線は、遺物出土状態の実測範囲を示す。

0 10m

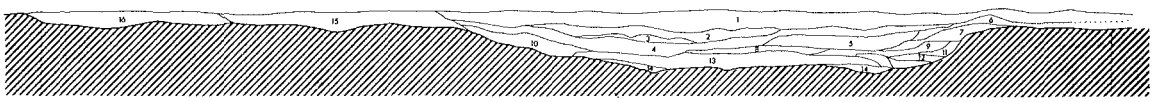
第5図　縄文時代の遺構



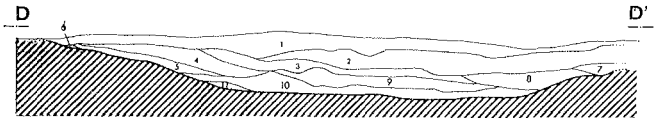
1．黒色土。砂、炭化物を含む。
2．黒灰色土。砂、炭化物、黄褐色土粒子を含む。粘性強い。
3．暗灰色土。砂を多く含む。炭化物を含む。粘性強い。
4．暗褐色土。砂を少量含む。炭化物をわずかに含む。
5．暗褐色土。4より明るい。砂を含む。粘性強い。
6．黒褐色土。黄白色粘土ブロックを含む。粘性強い。
7．暗褐色土層。炭化物をわずかに含む。
8．暗褐色土。砂を多く、炭化物、酸化鉄を多く含んだ粘土ブロックを含む。粘性強い。
9．暗灰色土。砂を多く含む。炭化物を含む。粘性強い。
10．黒色土。4より明るい。
11．黒灰色土。砂を含む。
12．暗灰色土。砂を含む。粘性強い。
13．暗灰色土。12より暗い。砂をわずかに、炭化物を含む。粘性強い。
14．暗灰色土。13より明るい。砂を多量に含む。炭化物を含む。
15．黒灰色砂層。
16．黒灰色土砂、炭化物を多く含む。粘性強い。
17．暗灰色土。砂を多量に含む。粘性強い。
18．黒褐色土。砂を含む。粘性強い。
19．暗褐色土。砂を含む。粘性強い。
20．暗褐色土。19より明るい。粘性強い。
21．暗褐色土。20より明るい。砂を多く含む。粘性強く、しまり悪い。
22．暗灰色土。17より暗い。砂、炭化物を多量に含む。
23．暗灰色土。砂を多量に含む。
24．黒灰色土。砂を多く含む。炭化物を含む。粘性強い。
25．暗灰色砂層。
26．黒灰色土。24より明るい。砂を多く含む。粘性強くしまり悪い。
27．灰色砂層。
28．黒灰色土。26より明るい。砂を多量、炭化物をわずかに含む。粘性強く、しまり悪い。
29．暗灰色土。砂を多く含む。炭化物を含む。
30．暗灰色土。29より暗い。砂を多く含む。
31．暗灰色土。3より明るい。砂を多量に含む。炭化物を含む。
32．黒灰色土。砂を含む。炭化物を含む。
33．暗灰色土。31より暗い。砂を少量含む。粘性強い。
34．暗灰色土。黄白色粘土を多量に含む。粘性強い。
35．黄褐色砂層。黄白色粘土ブロックを含む。酸化鉄を多く含む。
36．暗灰色土。30より明るい。砂を多く含む。酸化鉄を含む。
37．橙色粘土ブロック。砂を多く含む。粘性強い。
38．暗灰色土。砂を多く含む。黄白色粘土粒子含む。
39．黒褐色土。
40．暗褐色土。砂をわずかに含む。炭化物をわずかに含む。
41．黒灰色土。砂をわずかに含む。炭化物をわずかに含む.
42．黒灰色土。41より暗い。砂を含む。



1．黒褐色土。灰色砂粒を多く含む。
2．黒褐色土。炭化物、灰色砂粒を多く含む。
3．黒色土。酸化鉄を多く含む。砂を多く含む。
4．砂層。砂の粒子は粗い。
5．黒褐色土。酸化鉄、砂を多く含む。
6．黒色土。黒灰色粘土を斑状に含む。粘性強く、しまり良い。
7．黒褐色土。13、2より暗い。炭化物微量含む。
8．黒色土。粘性強い。
9．黒褐色土。しまり良い。
10．黒灰褐色砂層。炭化物微量に含む。
11．黒色土。黄灰色粘土、砂を多く含む。ブロックを少量含む。
12．黒色土。土の粒子細かい。8層より明るい。粘性強い。
13．黒褐色土。白色砂粒を微量に含む。2、1に比較し暗い。しまり悪い。
14．撹乱。



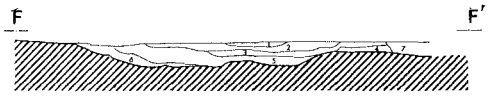
1．暗褐色土、砂をわずかに含む。
2．暗褐色土。1より暗い。砂をわずかに含む。炭化物少量含む。
3．暗褐色土。2より暗い。砂を含む。炭化物少量含む。粘性強い。
4．暗褐色土。砂を少量含む。炭化物を含む。粘性強い。
5．黒褐色土。4より明るい。砂を多く含む。炭化物を含む。
6．黄灰色砂層、しまり良い。
7．黒褐色土。砂、炭化物を含む。
8．黒褐色土。7より暗い。砂を多く含む。炭化物を多く含む。
9．黒色土。14より明るい。砂を少量、炭化物を含む。粘性強く、しまり悪い。
10．暗灰色土。砂、炭化物をわずかに含む。しまり良い。
11．黒灰色土。砂、炭化物を含む。
12．黒灰色土。砂を多く含む。
13．黒褐色土。砂を極多量に含む。炭化物を多量に含む。粘性強い。
14．黒色土。砂をわずかに、炭化物を多く含む。粘性強くしまり悪い。
15．暗褐色土、砂を少量含む。しまり良い。
16．黄褐色土。砂を多量に含む。しまり良い。



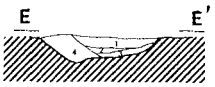
1．黒褐色土。
2．黒褐色砂層。炭化物粒子を含む。
3．黒色土。砂粒子を含む。炭化物粒子を含む。
4．黒褐色土。粘性強い。
5．黒褐色土。粘性強い。
6．暗褐色土。粘性強い。
7．黒褐色砂層。
8．茶褐色砂層。
9．黒褐色砂層。炭化物粒子を少量含む。
10．暗褐色砂層。炭化物粒子を少量含む。
11．黒色土。

0　2m

第6図　縄文時代の遺構土層断面(1)



1．黒色土、砂を含む。
2．黒褐色砂層
3．黒色土、砂を多量に含む。灰色粘土を斑状に含む。粘性強い。
4．暗褐色土。
5．黒色土、砂を多量に含む。粘性強い。
6．黒褐色土、砂を含む。灰色粘土を斑状に含む。粘性強い。
7．撹乱



1．黒褐色土、砂を含む。炭化物を少量含む。粘性強い。
2．黒褐色土、黄褐色粘土を斑状に含む。粘性強い。
3．褐色土、黄褐色粘土を斑状に多量に含む。粘性強い。
4．暗褐色土、砂を多量に含む。酸化鉄を多く含む。

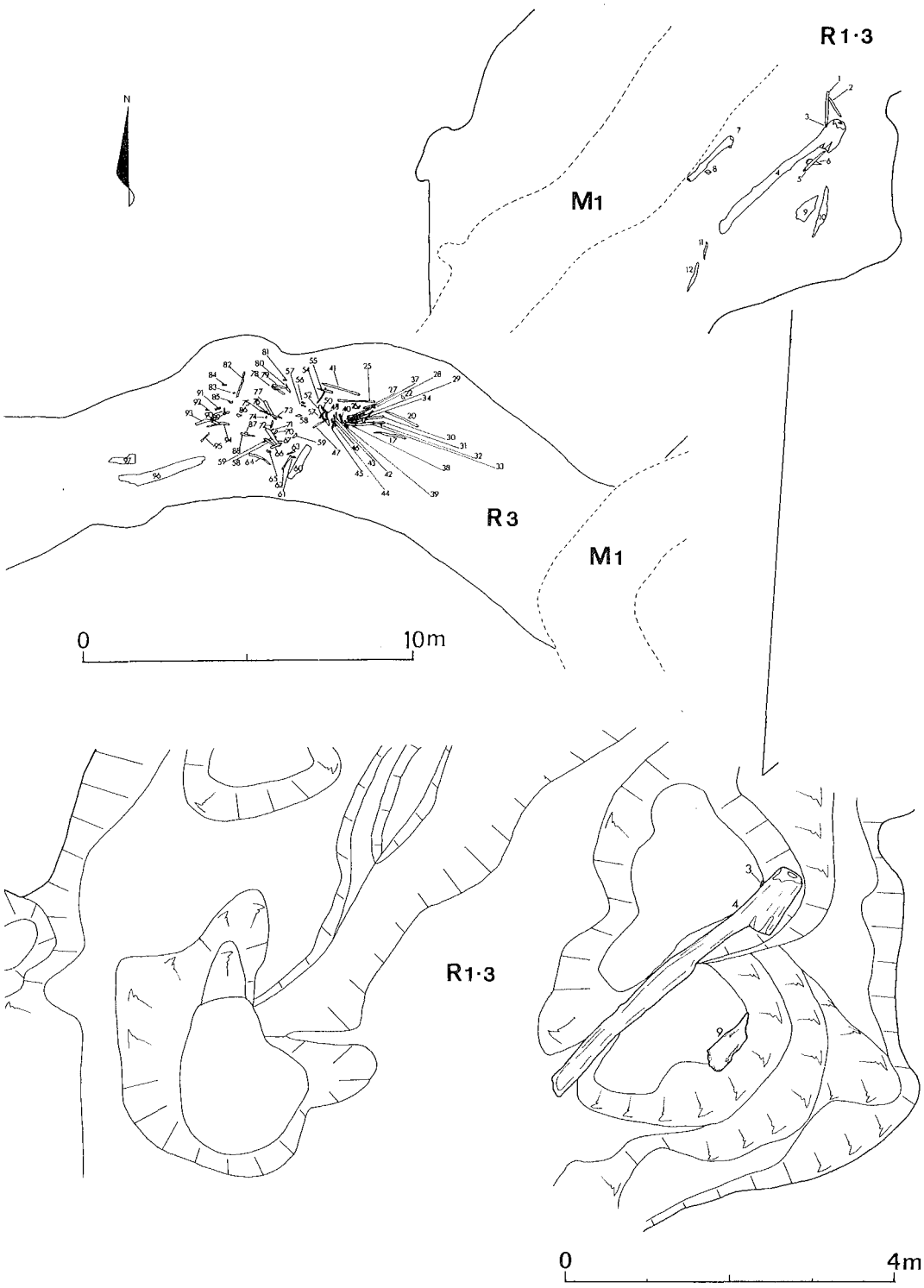
0　　2m

第７図　縄文時代の遺構土層断面(2)

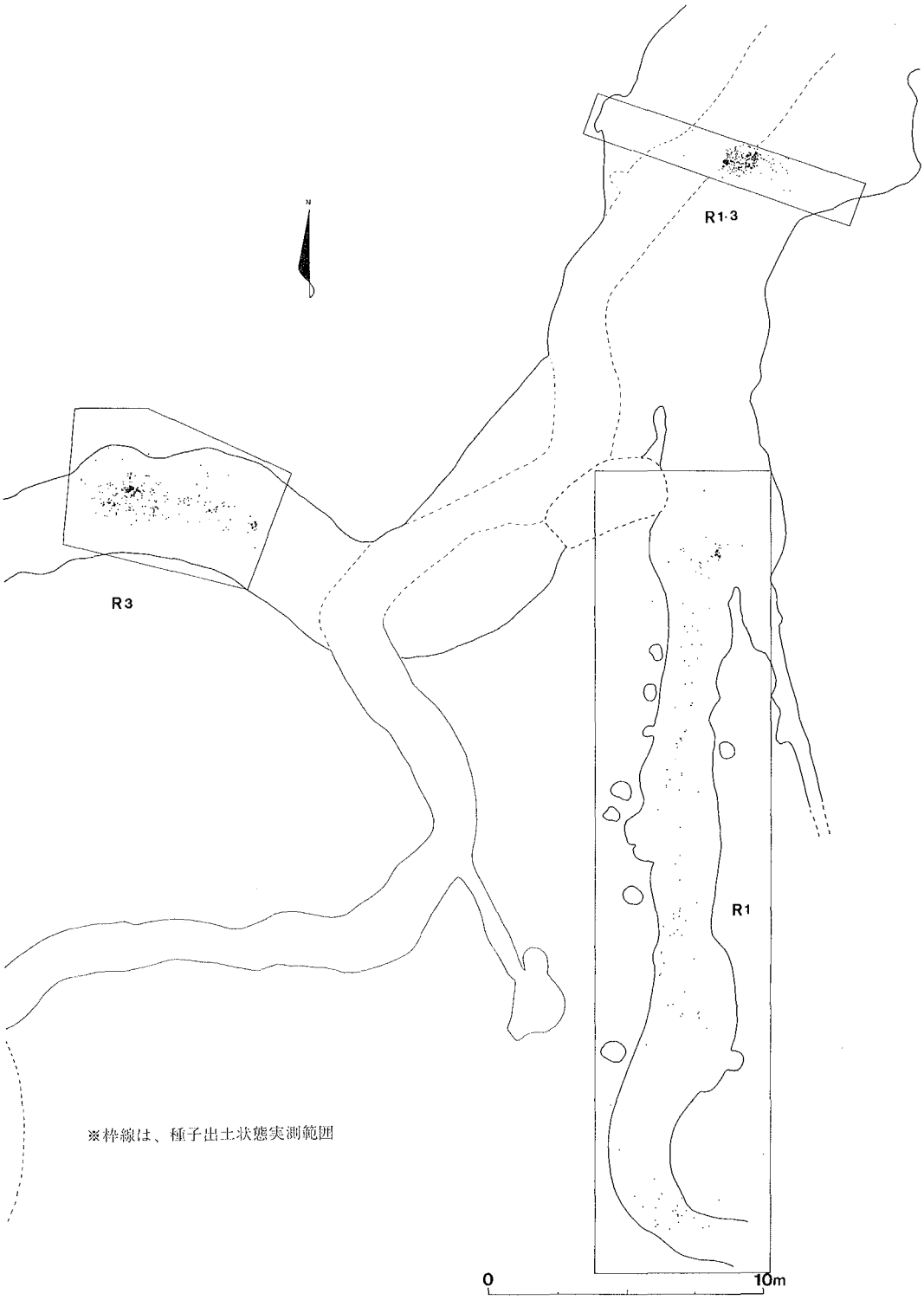
表１　縄文時代の遺構木片等出土レベル一覧

番号	出土レベル	番号	出土レベル	番号	出土レベル	番号	出土レベル
1	288.0	26	314.3～315.4	51	301.8	76	307.1
2	289.4～295.8	27	318.7	52	296.8	77	287.9
3	279.0～308.0	28	318.0	53	301.0	78	298.4
4	292.0～323.5	29	308.0	54	306.3	79	299.1
5	301.0	30	318.0	55	309.1	80	296.5
6	300.2	31	314.6	56	300.5	81	312.9
7	295.0～306.2	32	313.8	57	396.2	82	312.4
8	296.7	33	310.9	58	302.1	83	308.1
9	288.0～301.5	34	316.8	59	308.5	84	305.6
10	296.4～308.3	35	306.7	60	291.5	85	290.6
11	320.6	36	315.5	61	288.0	86	298.3
12	323.5～337.6	37	314.3	62	292.5	87	306.8
13	306.8～306.9	38	300.2	63	305.7	88	304.4
14	307.3～308.3	39	303.5	64	292.0	89	309.5
15	311.8～313.0	40	302.2	65	302.9	90	309.6
16	308.2～309.2	41	310.9	66	293.3	91	309.0
17	318.7	42	303.9	67	311.7	92	306.0
18	324.9	43	301.7	68	299.5	93	293.9
19	318.6	44	302.7	69	291.5	94	294.0
20	313.3	45	297.5	70	300.7	95	302.9
21	311.9	46	302.6	71	307.6	96	312.6
22	317.7	47	298.5	72	301.0	97	311.8～321.5
23	319.7～324.9	48	304.3	73	289.5		
24	315.0	49	300.5	74	290.6		
25	313.7	50	298.7	75	293.5		

※番号は第８図と一致。出土レベルは標高値から30.0ｍを引いた数値（単位cm）。高低差が大きい場合は最も低い値と最も高い値を示す。９は丸木舟状木製品、21は杓子。



第８図　縄文時代遺構木片等出土状態



第 9 図　縄文時代遺構種子等出土状態

2．縄文時代の出土遺物

縄文時代の出土遺物は、土器、石器の他、杓子などの木製品を含む木片等、クルミ、トチなどの種子類や、土器でも赤彩土器などが出土しており、正に多種多様である。その総数は、微小な破片を含むと2万点以上にのぼるものと推定される。ここに紹介したものは、ごく代表的なもののみである。第2号川跡出土遺物は微小破片のみで図示しうるものはなかった。以下、遺構区分により列記したい。なお、出土土器の記述は下記の分類によった。また、赤彩土器と木製品は、別項にまとめて記載した。

Ⅰ類　加曽利E式より以前の土器

Ⅱ類　加曽利E式土器（加曽利EⅢ式・Ⅳ式）

A．縄文のみが施されたもの。口唇部が無文で、口唇部のナデにより無文帯と縄文の境が隆起したものを含む。小破片の場合、B・C・Dの可能性がある。

B．地文に縄文を施し、隆線により文様が描かれたもの。隆線の両脇はナデられて沈線状となる。

C．地文に縄文を施し、隆線と研磨された無文部で文様が構成されたもの。

D．地文に縄文を施し、沈線と研磨された無文部で文様が構成されたもの。

E．両耳壺を一括。

F．浅鉢を一括。

G．その他の土器。

Ⅲ類　称名寺式土器（称名寺Ⅰ式・Ⅱ式）

A．縄文のみが施されたもの。

B．地文は縄文又は無文で、隆線又は沈線により懸垂文やU字状文を構成するもの。

C．沈線のみで文様が施されたもの。平行沈線間に列点が施されたものを含む。

D．磨消縄文等により、懸垂文、J字状文、Y字状文、銛状文などを主体とした文様が描かれたもの。

E．浅鉢を一括。

F．その他の土器。無文のものを含む。

Ⅳ類　堀之内式土器（堀之内Ⅰ式・Ⅱ式）

A．縄文のみのもの。

B．地文に縄文を施し、その上に沈線で文様が描かれたもの。

C．沈線のみで文様が描かれたもの。横位構成の幾可学的文様が描かれたものは含まない。

D．磨消縄文等により、横位構成の幾可学的文様が描かれたもの。沈線のみのものを含む。

E．胴部の文様が不明な口縁部で刻みのある隆帯が巡るもの。8字状の貼付があるものを含む。

F．注口土器を一括する。

G．浅鉢を一括する。

H．その他の土器。無文のものを含む。

Ⅴ類　型式判定の困難な条線文土器を一括する。

Ⅵ類　底部を一括する。

Ⅶ類　その他の土器。堀之内式土器より後の土器、土製品等を含む。

出土土器はほとんど小破片であり、残存した部分だけで分類したものである。そのため各分類において実際には別の分類にすべきものを含んでいる可能性があることは否定できない。

(1)　第１号川跡出土遺物

ア．出土土器（第11図～第19図）

○Ⅰ(1)

前期関山式土器である。胎土に繊維を含む。表面はやや磨滅しているが、ＬＲ単節とＲＬ単節と思われる縄文の横転により菱形状の羽状縄文が施され、上位に沈線による波状文が描かれている。

○Ⅱ－Ａ（２～９）

４～９は口縁部が無文になっている。９は波状口縁で頂部が厚くなる。縄文は２・３・５・８がＬＲ単節、他はＲＬ単節である。４～７の縄文は隆起直下で一段横転しその下は縦転。９は２段以上横転している。４は浅鉢の可能性もあろう。

○Ⅱ－Ｂ（11～22）

11～15は、口縁部が無文のもの（12・13）と沈線が施されたもの（11・14）があるが、同様の円又は渦巻状の文様が描かれたものであろう。11～15の縄文はＲＬ単節。

16～22は、１条の横位の隆線により口唇部の無文帯と縄文が区画されたものである。隆線から縄文が施されたもの（16～19）と、隆線直下が沈線状になるもの（20～22）がある。16は隆線の一部が大きく突起しており、17は外面に著しく炭化物が付着している。縄文は、18～21がＬＲ単節、その他はＲＬ単節で、17・18は隆線直下を横転している。

○Ⅱ－Ｃ（23～53）

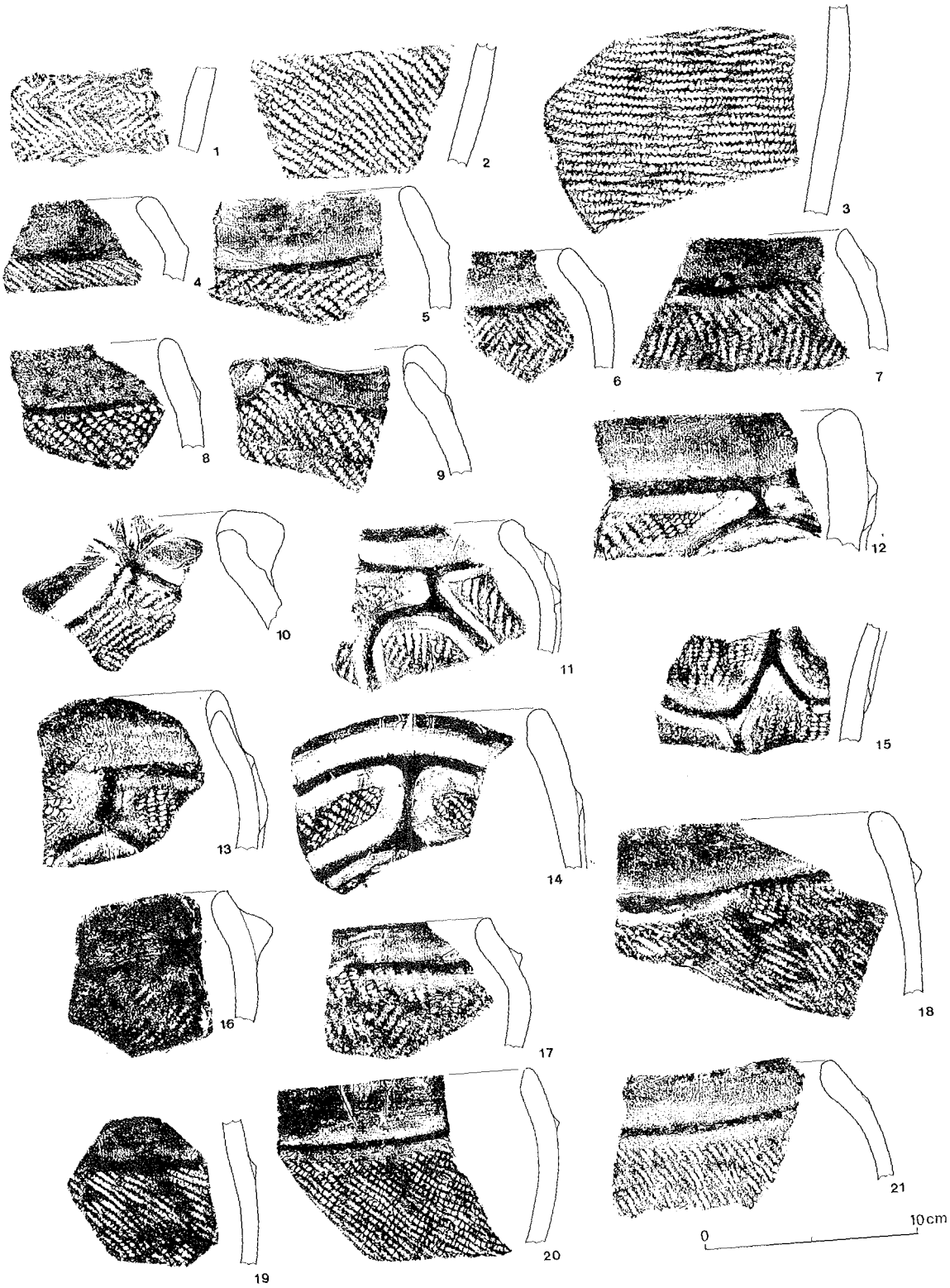
23～36は隆線と研磨された無文部が垂下するものである。34はやや異質で、無文部の研磨により縄文と無文部の境が隆起したもので、隆起上まで縄文が施されている。33は隆線により円形状の文様が描かれていた可能性がある。23・24は口唇直下が沈線状となっており、24は波状口縁であろう。縄文は23～30・34がＲＬ単節で、その他はＬＲ単節。

37～53は、隆線と研磨された無文部により、円形状又は過巻状の文様が描かれたものや、Ｕ字状の懸垂文が描かれたものなどである。39はⅡ－Ｂ、37・40は隆線が直線的に垂下するものである可能性がある。また、44は曲線を描く隆線は低く、内側の沈線は明瞭でⅡ－Ｄとすべきかもしれない。47は波状口縁で把手を有していたものと思われ、48も緩い波状口縁で、口唇直下は内外面とも頂部で沈線状となる。縄文は、38～43・48～51・53はＲＬ単節、その他はＬＲ単節で、回転方向はやや乱れたものが多い。39はやや固くなった器面に横転させたものであろう。

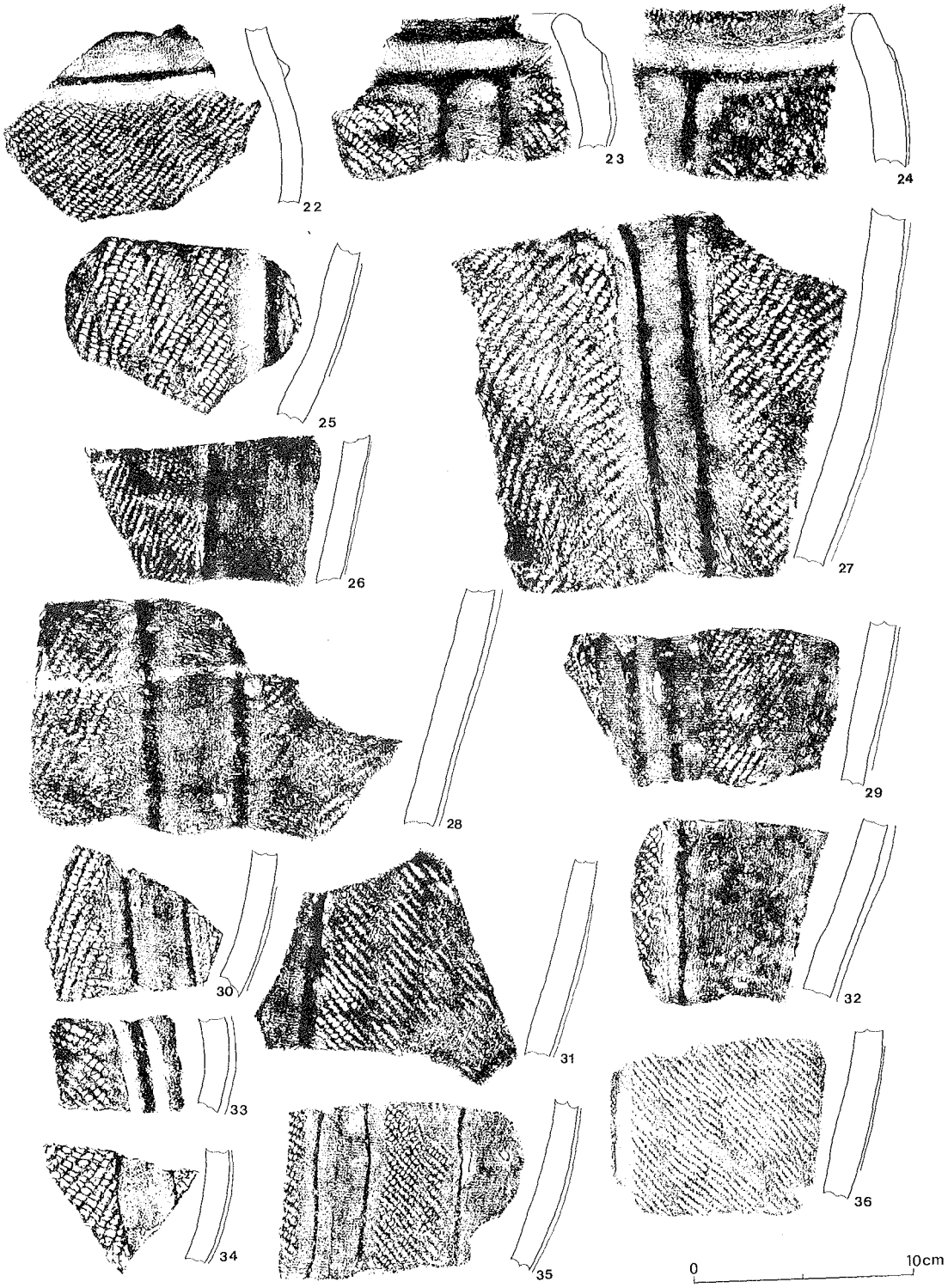
○Ⅱ－Ｄ（54～85）

54～58は横位の沈線で口唇部の無文帯と縄文が区画されるものである。Ⅱ－Ａとすべきものがあ

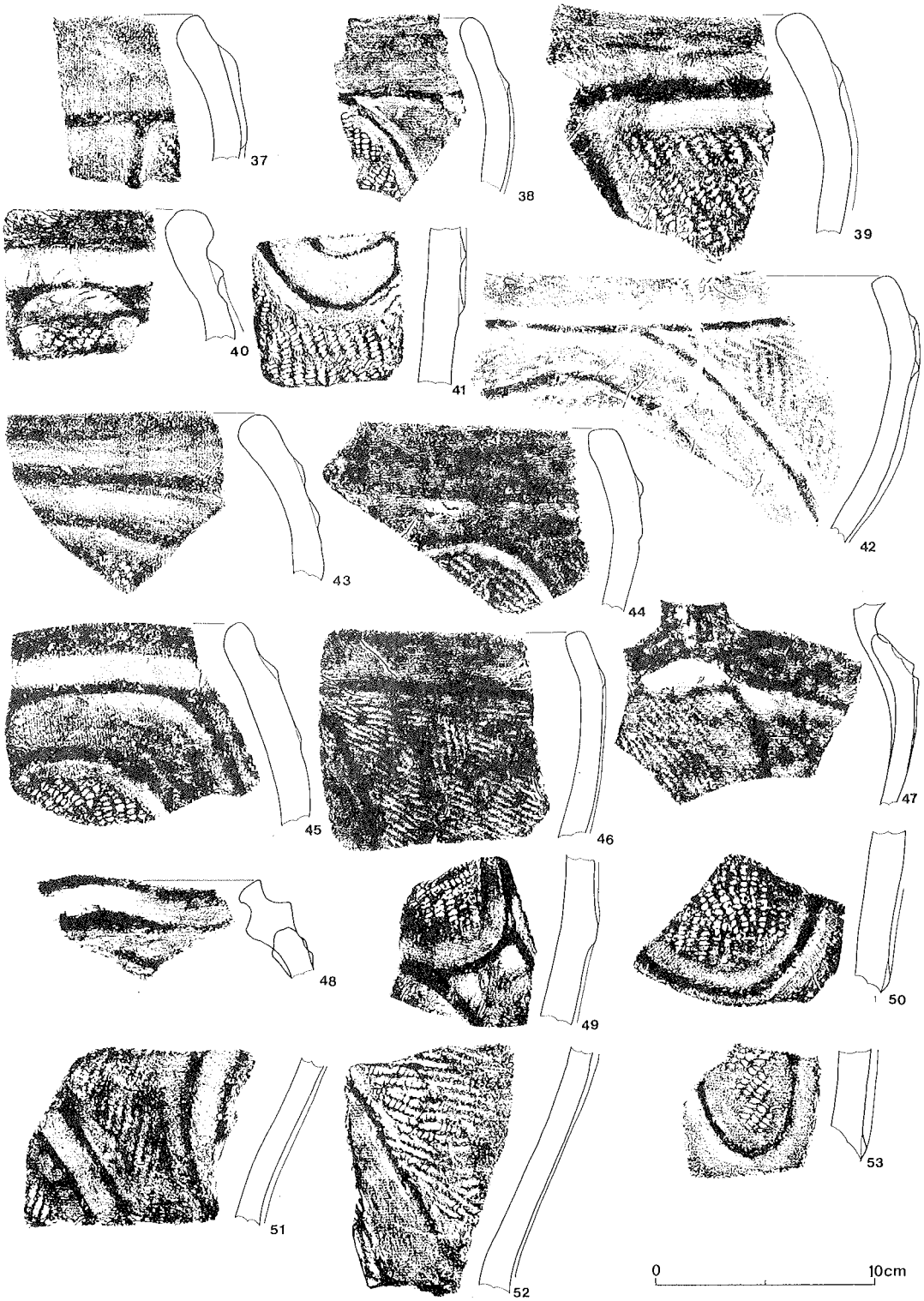
第10図　第１号川跡遺物出土状態



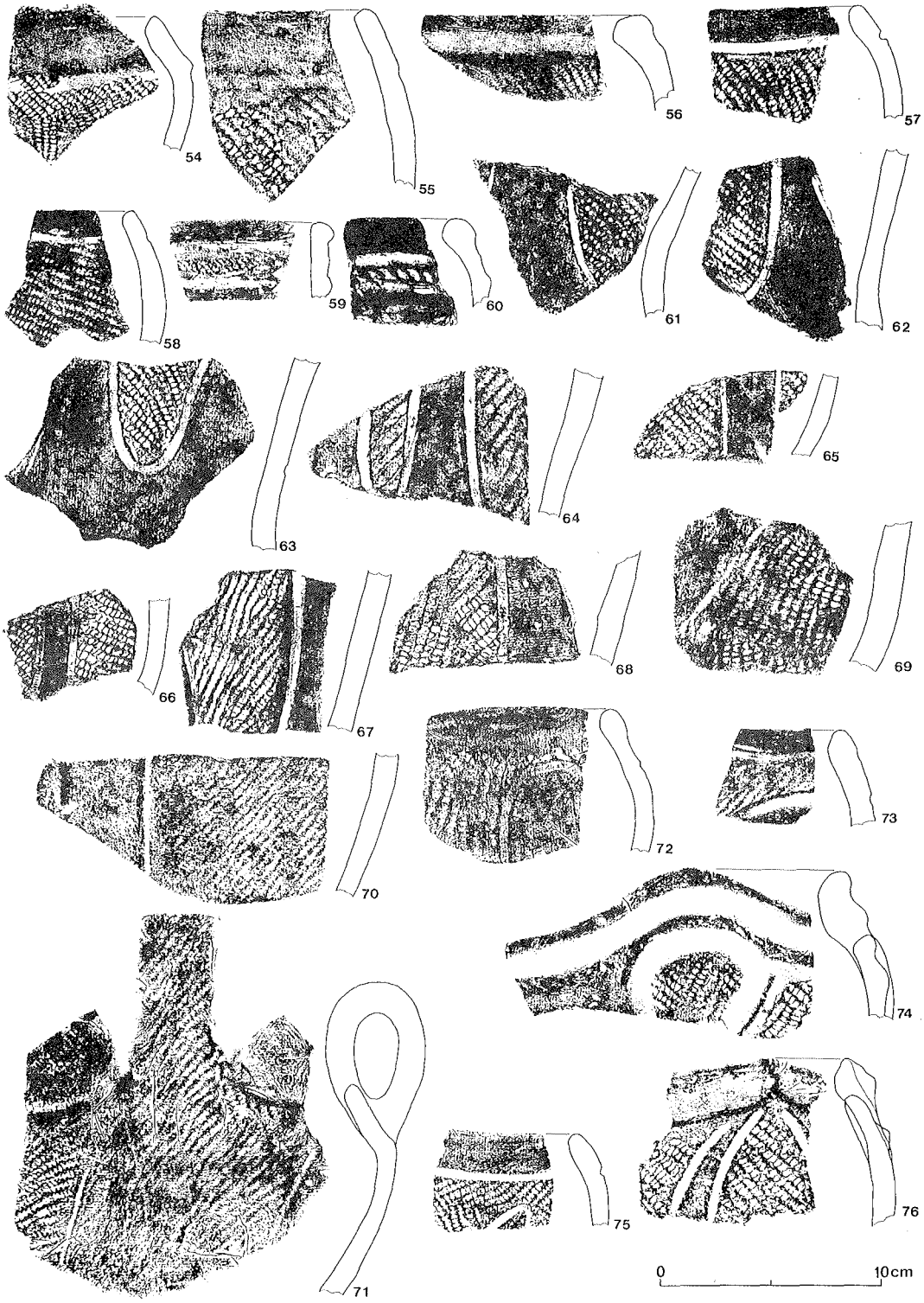
第11図　第１号川跡出土土器(1)



第12図　第１号川跡出土土器(2)



第13図　第１号川跡出土土器(3)



第14図　第１号川跡出土土器(4)

る可能性もある。明確に沈線となっているもの（57・58）と、浅い沈線状になっているもの（54～56）がある。54は沈線を描いた後に縄文を施したことが明瞭である。縄文は54・56・57がＲＬ単節、その他はＬＲ単節である。

59・60は口縁部の横位の平行沈線間に縄文が施されたもので、60は円形状の文様が描かれたものかもしれない。縄文はともにＲＬ単節の横転。

61～72は、沈線が直線的に垂下したり、U字状文・Ω状文・W字状文・H字状文・深い波状文などを描いたもの。縄文は、64・67～72がＲＬ単節で、その他はＬＲ単節である。72は無文の口唇部と文様帯は、沈線などでは区画されておらず、縄文は最上位で横転されている。71は波状口縁で把手を有する。

73～83は、沈線と無文部により円形状・渦巻状などの文様が描かれるものである。82はU字状の懸垂文、83は深い波状文が描かれるものかもしれない。74・76～79は波状口縁で、76～79は頂部が肥厚している。縄文は、74・77・83がＲＬ単節で、その他がＬＲ単節。73は表面の磨滅により判別し難いがＬＲ単節の横転と思われる。口縁部の縄文が横転されるものは73～75・77・78・81。76は外面に顕著に炭化物が付着している。

84・85は口唇部に列点が施されるものである。84の列点は連続的で、85は間を置いた列点の下に沈線が施される。縄文はともにＲＬ単節だが、84は口縁部に二段以上縄文を横転させた後、胴部に縦転したものと思われ、外面には顕著に炭化物が付着している。

○Ⅱ－Ｅ（86～93）

89・93は一般的に両耳壺といわれるものとは異なった形態を呈するものかもしれない。86・88・90～92は口縁部の無文帯と文様帯が隆線又は隆起により区画される。87・89・93は把手の外面にまで縄文が施され、92は条線文が施されている。93は沈線と無文部により円形状の文様が描かれたものかもしれない。縄文は、87・88・93がＲＬ単節、86・89がＬＲ単節。

○Ⅲ－Ａ（94）

口縁部の無文帯が沈線により区画される。器形は口縁部が緩く開くものと思われる。縄文はＬＲ単節で回転方向はやや乱れており、外面には炭化物が顕著に付着している。

○Ⅲ－Ｂ（95～97）

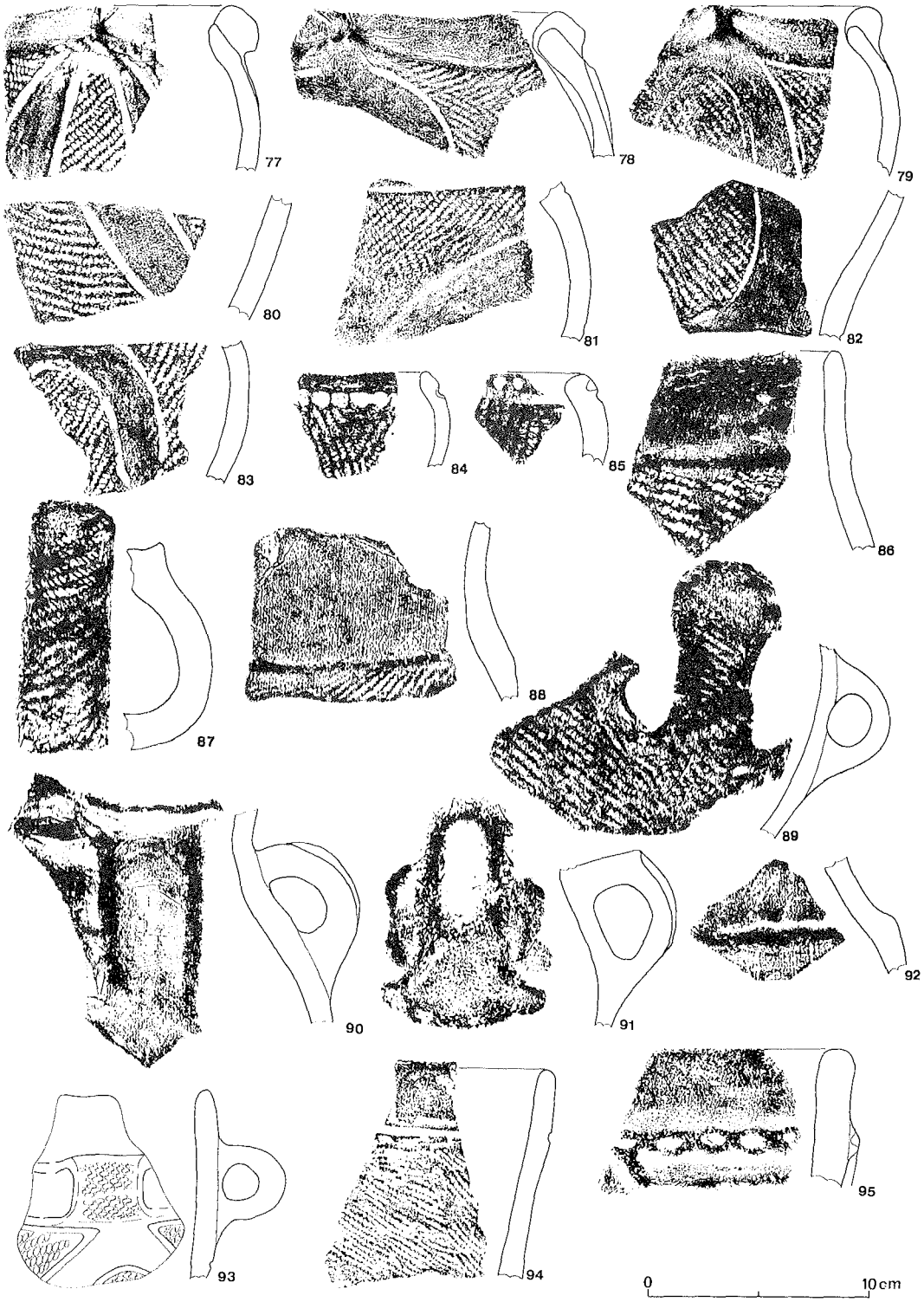
95・96は、列点が施されて鎖状となった隆線が横位に巡り、そこから隆線が垂下する。97は隆起に沿って列点が施される。

○Ⅲ－Ｃ（98・99）

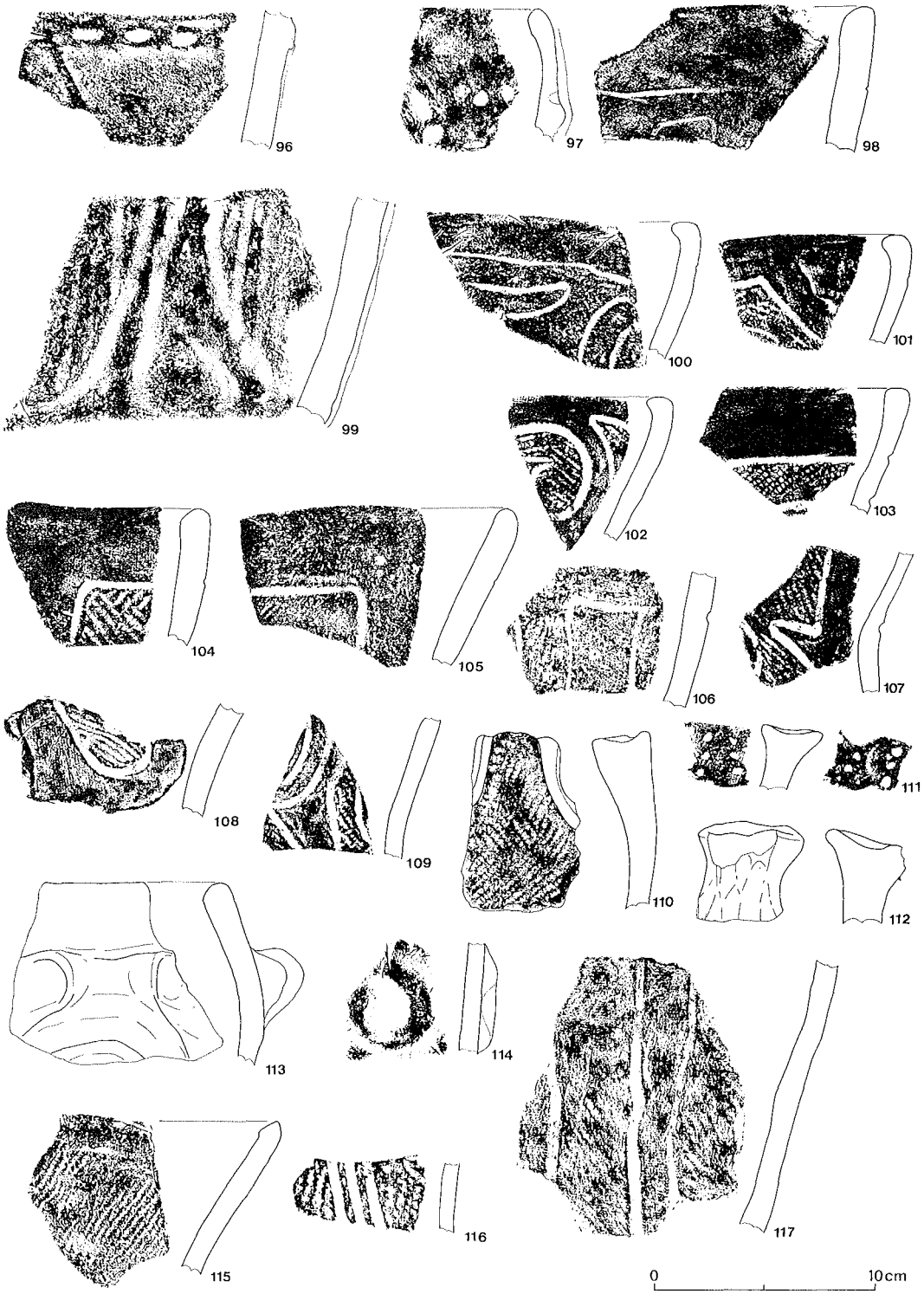
98は平行沈線が垂下するか入り組んだ文様が描かれるものであろう。縄文が施されていたかもしれないが磨滅により不明。99は沈線によるU字状の懸垂文の中に浅い沈線が充填されたものと思われ、U字状の沈線沿いは隆起している。

○Ⅲ－Ｄ（100～109）

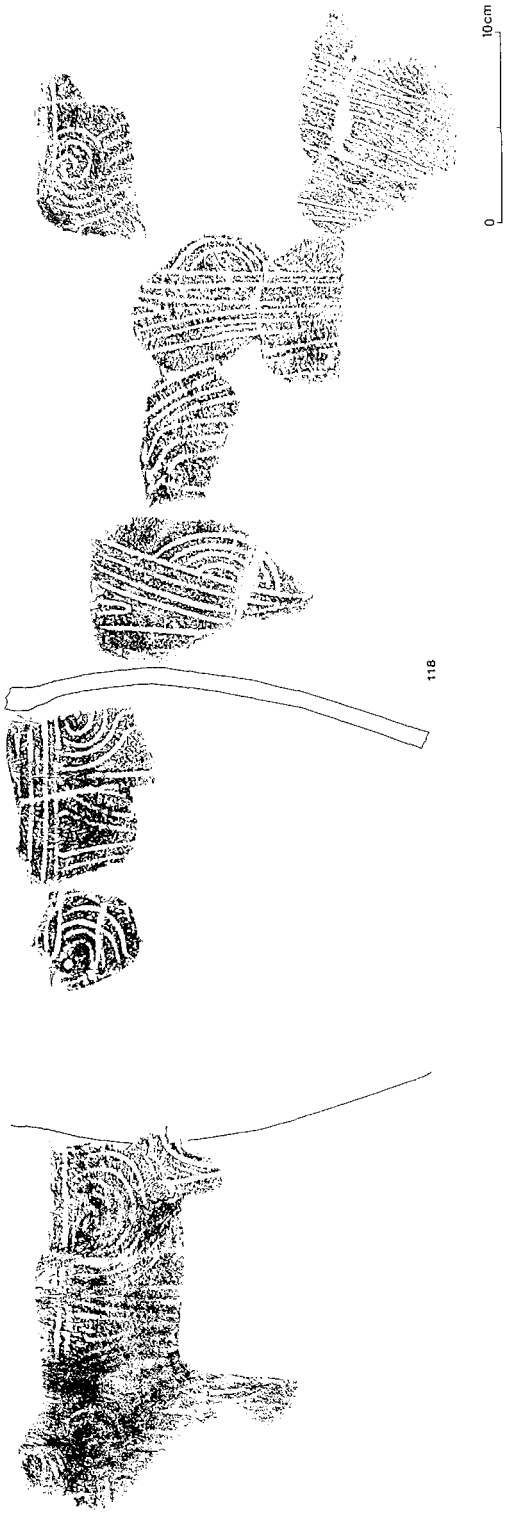
100～102は口唇部が内側へ屈曲している。108は沈線と磨消縄文によりＪ字状の文様が、107はいわゆる銛状文が描かれたものである。縄文は、106のみＲＬ単節でその他はＬＲ単節と思われるが、100・101・105は磨滅のため不明瞭である。



第15図　第１号川跡出土土器(5)



第16図　第１号川跡出土土器(6)



第17図　第１号川跡出土土器(7)

○Ⅲ－F（110～114）

110～112は口縁部の突起である。いずれも頂部が窪んでいる。110の外面は縁辺に沈線が施され、ＲＬ単節の縄文が施されている。111は内外面とも縦位の列点が施されている。

113は口縁部の比較的幅の広い突起で、両端が隆起している。その下に微隆線が曲線的に描かれる。

114は隆線により円又は渦巻状の文様が描かれる。

○Ⅳ－A（115）

口唇部内面が沈線状にナデられ、口唇は比較的鋭い。口唇部外面はナデられているが、その下にはＬＲ単節の縄文が横転されている。

○Ⅳ－B（116～122）

118・119～122は、口縁部のややくびれた部分に巡る横位の沈線の下に、同心円状又は渦巻状の沈線と縦位の数条の沈線が描かれたものである。118は、中心に刺突を有する同心円状の文様と渦巻状の文様が、交互に４回ずつ繰り返されたものであろう。120は口縁部に両端に刺突を有する縦位の棒状の貼付けが施されており、121は両端がやや大きい円形となり同心円の中心となっているが、同様のものかもしれない。

縄文はだいたい磨滅により明瞭ではないが、116はＬＲ単節、117～119・122もＬＲ単節と思われる。

○Ⅳ－C（123～129）

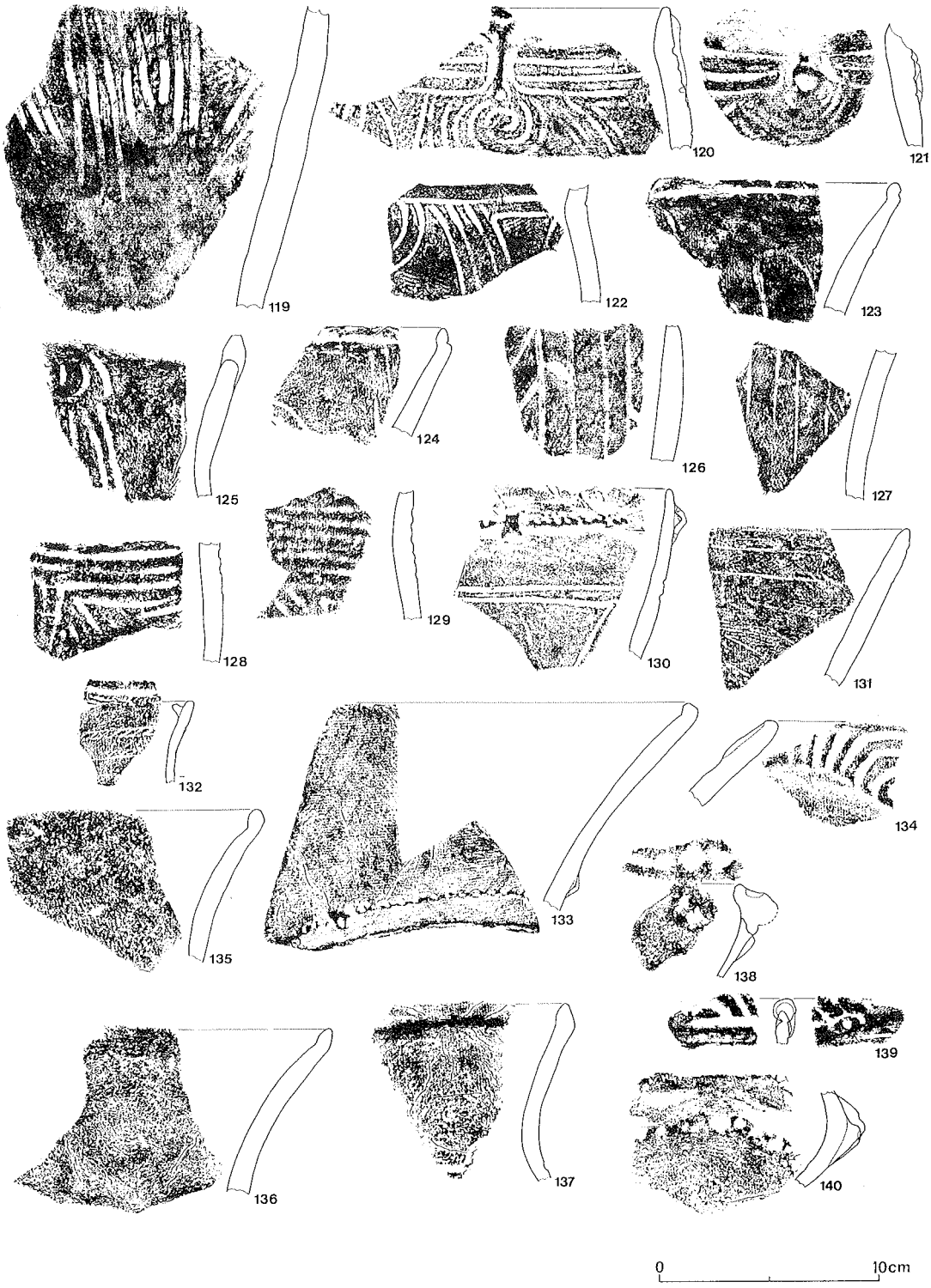
123・124は、屈曲した口唇部の外面に沈線が巡り、口縁部以下に簡単な文様が描かれたものである。

125は波状口縁で、頂部外面に同心円状の文様が描かれ、そこから数条の沈線が垂下している。

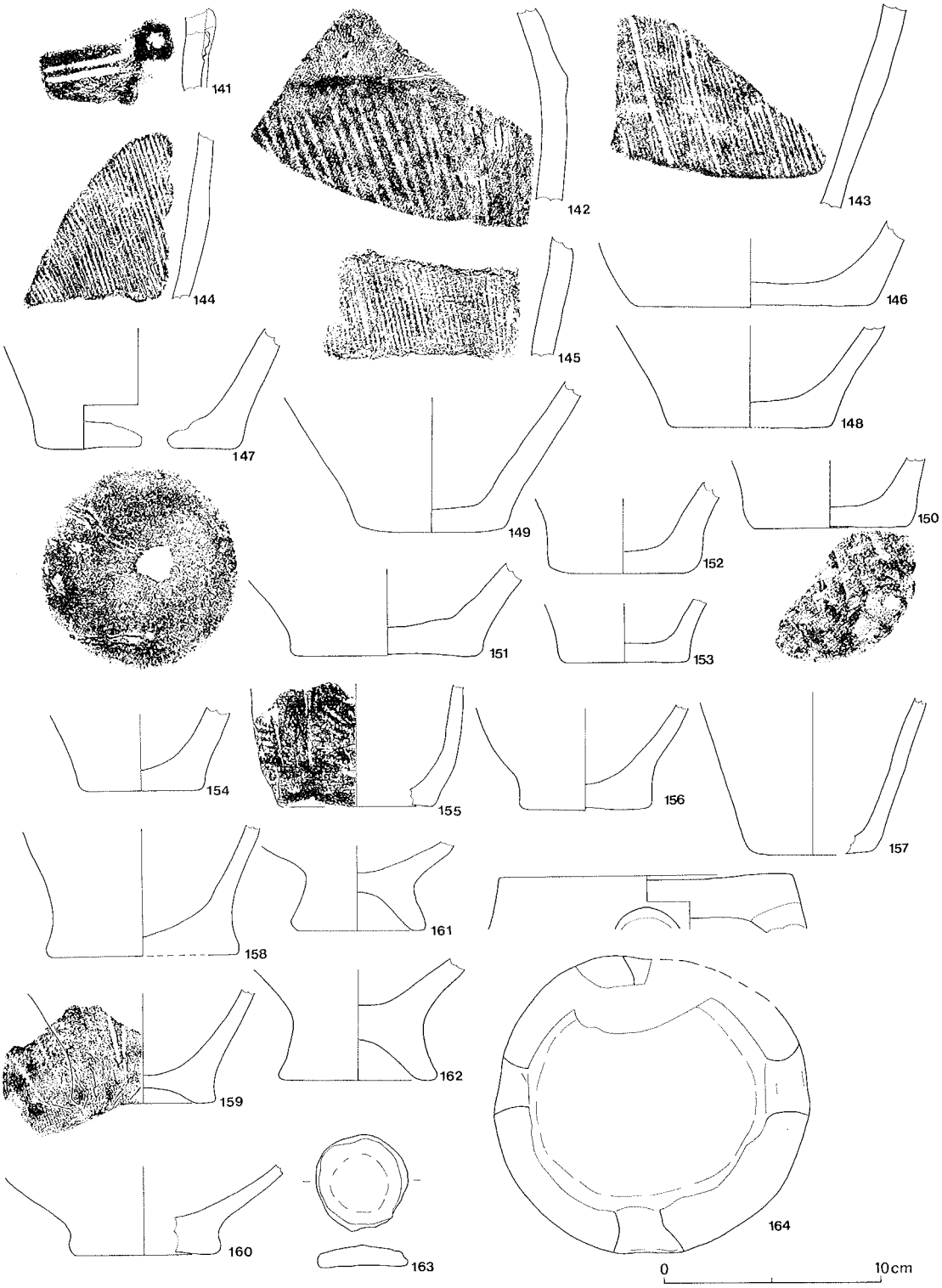
128・129は密集した沈線が描かれているが、焼成色調等から同一個体の可能性がある。

○Ⅳ－D（130～133）

130・133は８字状の貼付文が施された刻みのある隆線が巡る。130は間隔の狭い平行沈線のみで文様が描かれている。133は口唇部が屈曲し、隆線の下に沈線が巡っているのが確認できる。浅鉢の可能性



第18図　第１号川跡出土土器(8)



第19図　第１号川跡出土土器(9)

もあろう。

131は磨消縄文により幾可学的文様が描かれたもので、縄文はＬＲ単節である。

132はやや異質な形態を呈する小型のもので、口唇部内面に受け状の横位の貼付を施しその上に沈線が巡り、口唇には刻みが施されている。

○Ⅳ－Ｅ（134）

肥厚した口縁部内面に沈線で文様が描かれている。

○Ⅳ－Ｆ（135～141）

135～137は無文の口縁部であるが、137はくびれた部分に沈線が巡っているのが確認できる。138は波状口縁の頂部で、頂部上面とその両脇の３ヶ所に竹管状工具による刺突が施され、そこから沈線が巡っている。139は口唇に施された装飾で、粘土紐をラセン状に捻ったものである。140は浅鉢状の形態を呈し、屈曲部外面の波状を呈する隆線上に刻み（刺突）が施されている。141は小破片のため明瞭ではないが、121に類似したものであろう。

○Ⅴ（142～145）

142は横位の隆起の下に太く粗い条線文が施されている。143は１本だけ太い条線が繰り返されており、幅３cm程度の櫛状工具が使用されたものと思われる。

○Ⅵ（146～162）

147は底部に穿孔が施されており、150には網代痕が認められる。155の縄文はＬＲ単節である。159は上げ底になっており、外面に縦位の沈線が認められる。161・162は高台状となっている。

○Ⅶ（163・164）

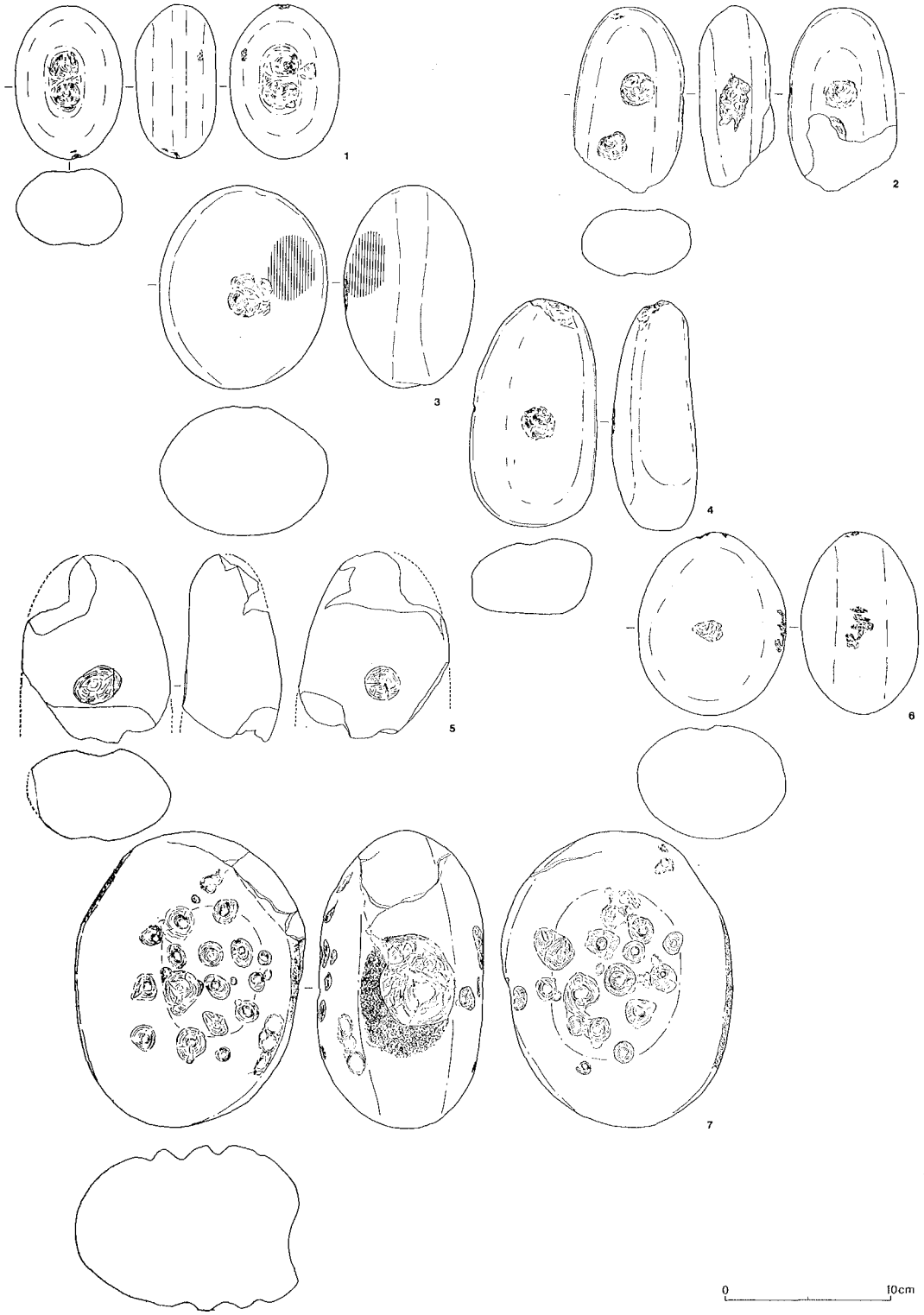
163は若干湾曲した小さい底部で、周縁が削られており、いわゆる土製円板の可能性がある。

164は器台で、縦長の透かしが４ヶ所施されたものであろう。

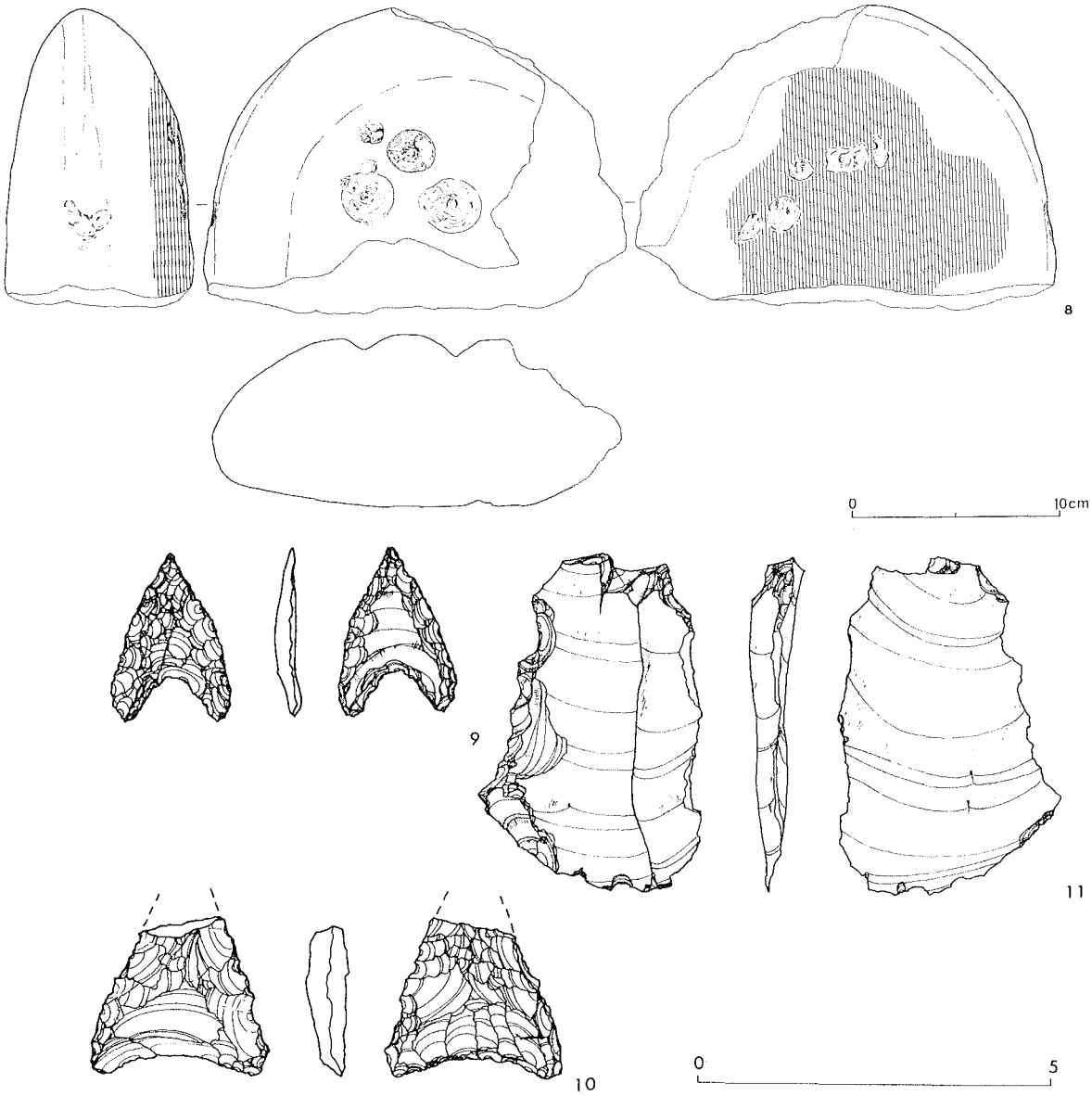
イ．出土石器（第20図・第21図）

表２　第１号川跡出土石器一覧

番号	器種	形態	長さcm	幅 cm	厚さcm	重さg	石質	備考
1	磨石	表裏凹有	9.3	6.5	4.9	403	輝石安山岩	凹みは２つ連続
2	磨石	表裏凹有	(11.2)	6.5	4.2	(322)	輝石安山岩	約1／3欠損
3	磨石	表凹有	12.4	10.0	7.9	1272	輝石安山岩	表の磨痕明瞭
4	磨石	表凹有	13.9	7.7	5.1	755	輝石安山岩	図の頂部に敲打痕有
5	磨石	表凹有	11.4	9.3	4.7	657	砂岩	
6	磨石	表裏凹有	(11.2)	(8.9)	(7.0)	(852)	角閃石安山岩	欠損
7	凹石	蜂の巣状	18.0	13.7	10.0	3390	角閃石安山岩	裏面平坦、側面抉れ敲打痕有
8	凹石		(14.9)	(20.2)	(9.0)	(3130)	角閃石安山岩	裏面平坦で磨痕明瞭



第20図　第１号川跡出土石器(1)



第21図　第１号川跡出土石器(2)

（P30より）

番号	器種	形態	長さcm	幅 cm	厚さcm	重さg	石質	備考
9	石鏃	凹基無茎	2.4	1.7	0.3	1.1	チャート	基部の抉入は深い
10	石鏃	凹基無茎	(2.3)	2.5	0.6	(3.2)	チャート	基部の抉入は浅い
11	剥片		4.8	3.2	0.7	8.3	黒耀石	二次調整が認められる

（　）内は欠損による残存値

３の表面と８の裏面は特によく磨られている。11の背面右側縁は発掘時における損傷である。

(2) 第３号川跡出土遺物

ア．出土土器（第23図～第28図）

○Ｉ（１）

前期関山式土器である。胎土に繊維を含む。第11図１に類似し、ＬＲ単節の縄文の上に竹管状工具による波状文が施されている。

○II－A（２～６）

６は波状口縁で頂部が肥厚している。縄文は、２・３・６がＲＬ単節、４・５はＬＲ単節で、４は上位で横転、３も上位で部分的に横転、６は口縁部で２段以上横転している。

○II－B（７～24）

７は口縁部に隆線が巡り、その下に隆線で円形状又は渦巻状の文様が描かれたものと思われる。９も同様であろう。10～12は隆線により口唇部と無文帯と縄文が区画されたもの。10・11は隆線まで縄文が施されているが、12は隆線の下がナデられている。縄文は、11のみがＬＲ単節でその他はＲＬ単節である。10～12は隆線直下は横転されている。

○II－C（13～24）

13～16は隆線と研磨された無文部が垂下するもの。14は曲線的な文様が描かれたものかもしれない。16の内面には炭化物が顕著に付着している。縄文は、13・16がＲＬ単節、14・15がＬＲ単節で、14は横転されている。

17～24は、微隆線と研磨された無文部により、円形状、渦巻状などの曲線的な文様が描かれたものである。18はII－Ｂであるかもしれない。19は、口縁部が緩い波状を呈し、口縁部に巡る２条の微隆線により文様部分が区画され、２条の微隆線により渦巻状の文様が描かれている。21・22も波状口縁である。20は平縁で、口縁部の無文帯と文様部分が１条の微隆線により区画され、長円形状の文様が描かれている。17・21の外面には炭化物が顕著に付着している。縄文は、13～22がＲＬ単節、23がＬＲ単節で、17・19～22は口縁部で横転されている。24は表面が磨滅しており、判別し難いがＬＲ単節と思われる。

○II－D（25～44）

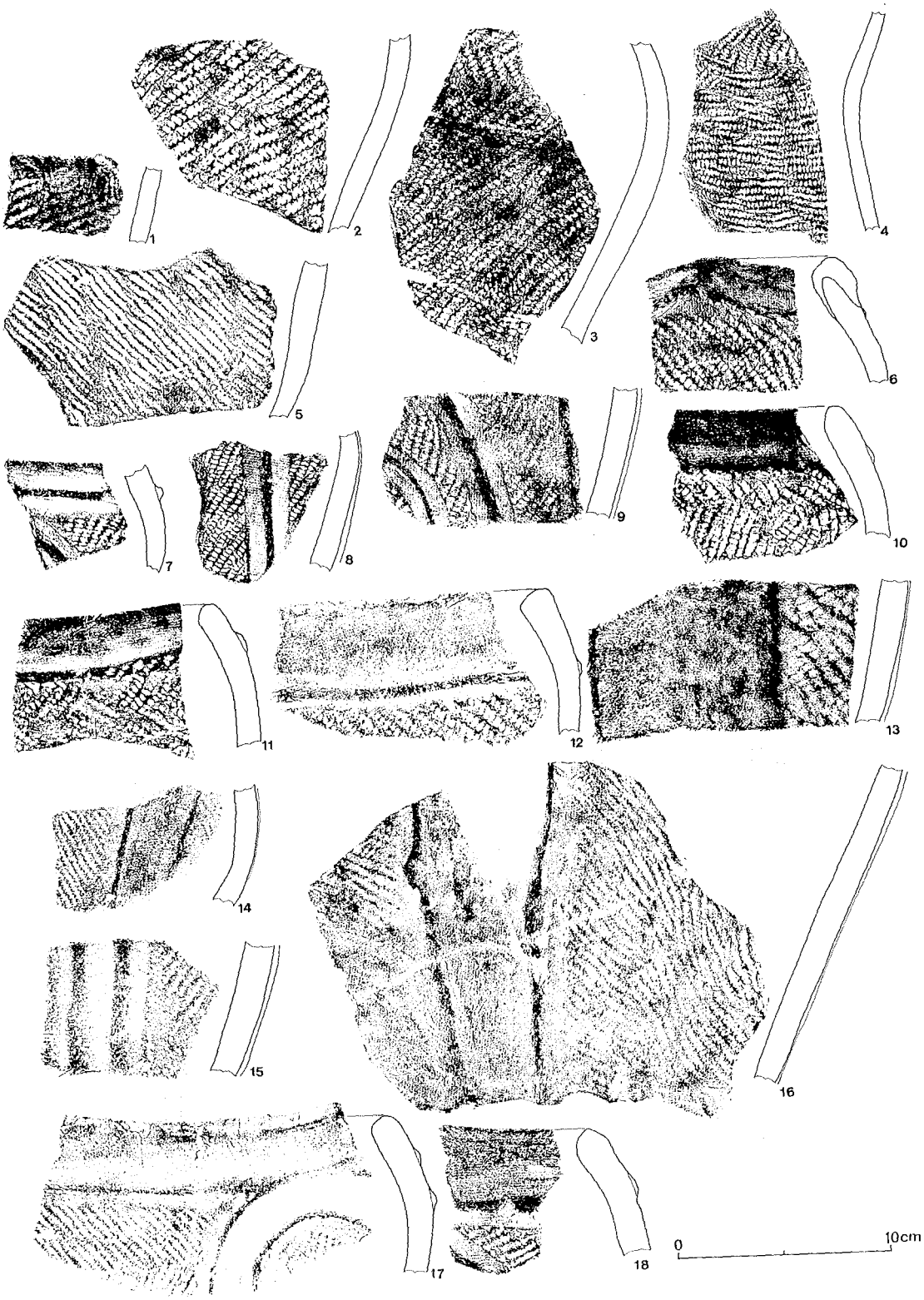
25～28は、口縁部の無文帯と縄文が横位の沈線により区画されたものである。27は口縁部が強くナデられている。28は把手がついており、把手の下部表面は剥落している。縄文はみなＲＬ単節で、25～27は最上位が横転されている。

29～31は、沈線と研磨された無文部が直線的に垂下するものである。縄文は、29がＲＬ単節、30・31がＬＲ単節である。

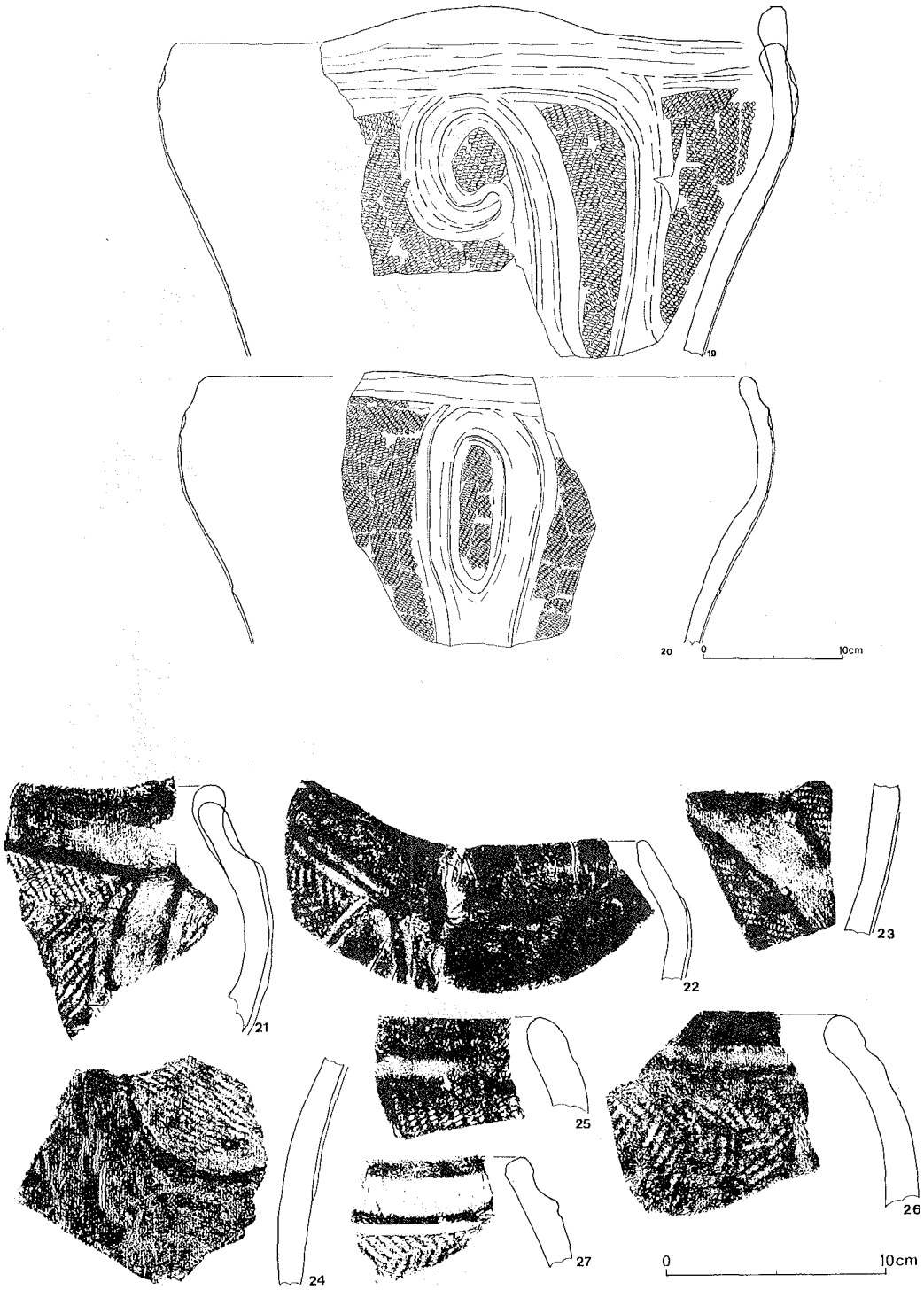
32～43は、沈線と研磨された無文部により、懸垂文、深い波状文、W字状文などが描かれるものである。36～38・40は波状口縁で、36・37・40は頂部が肥厚している。43は口縁部が内側に肥厚している。縄文は、33・36・37・40・41・43がＲＬ単節、その他はＬＲ単節で、口縁部付近で横転しているものは37～41・43である。41・43は外面に炭化物が付着している。

44は波状口縁の頂部が外傾したもので、口縁部は内側に肥厚している。沈線により外面に渦巻状の文様が描かれている。縄文はＲＬ単節、外面に炭化物が付着している。

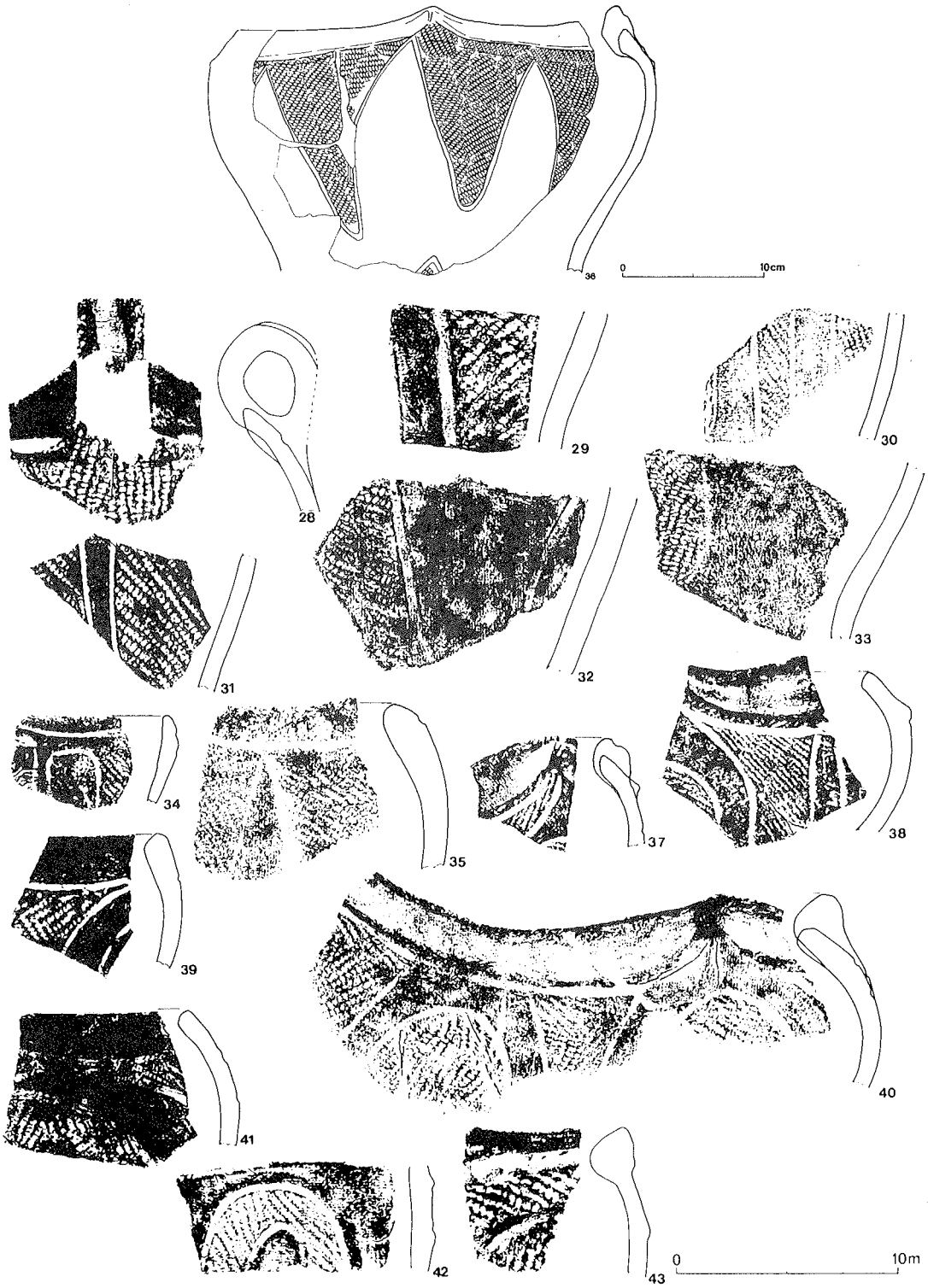
第22図　第３号川跡遺物出土状態



第23図　第３号川跡出土土器(1)



第24図　第３号川跡出土土器(2)



第25図　第３号川跡出土土器(3)

○Ⅱ－E（45～50）

45は隆線により文様が区画されており、上位のおそらく長円形に区画された文様内に縄文が充塡されている。下位は条線が施されている。49は上位が縄文で下位が条線であることは45に似るが、文様区画は沈線によっている。また、把手の外面は、中央が縦位に隆線状に作り出されている。50は小型のものである。縄文は45・48がＬＲ単節、他はＲＬ単節である。

○Ⅱ－F（61）

口縁部と胴部がわずかな隆起により画され、口縁部は無文で内側に若干肥厚している。胴部には縄文が施されている。

○Ⅱ－G（51～55）

条線文土器で、加曽利Ｅ式土器と思われるものである。52は口縁部が波状の沈線で区画され、さらに隆線による区画内に沈線が充塡されている。胴部は沈線が垂下していたものであろう。51は平行沈線が蛇行して垂下している。53は沈線により円形状の文様が描かれていたと思われ、沈線間は磨消されている。55は平行沈線による区画内の、上位にＲＬ単節の縄文が、下位に条線が施されたものである。

○Ⅲ－A（56）

比較的細かいＲＬ単節の縄文が、やや不規則に転がされている。加曽利ＥⅣ式の可能性もある。

○Ⅲ－C（57）

波状口縁で、頂部は右を向き刺突が施されている。口縁部は内側に屈曲している。

○Ⅲ－D（58～60）

58は波状口縁で、厚くなった頂部に刺突が施され、片側の口唇部には沈線が施されている。60は胴部が張り、口縁部が直立する器形を呈する。口縁部は無文で、胴部には沈線と研磨された無文部により渦巻状の文様が描かれている。口縁部と胴部は隆線により画され、隆線渦巻文上で突起している。隆線上には縄文が横転されている。縄文は、59はＬＲ単節、60はＲＬ単節で、58は不明。

○Ⅲ－F（62）

口縁部の把手である。外面に施された隆線状の６字状文の表面は平坦である。

○Ⅳ－B（63～65）

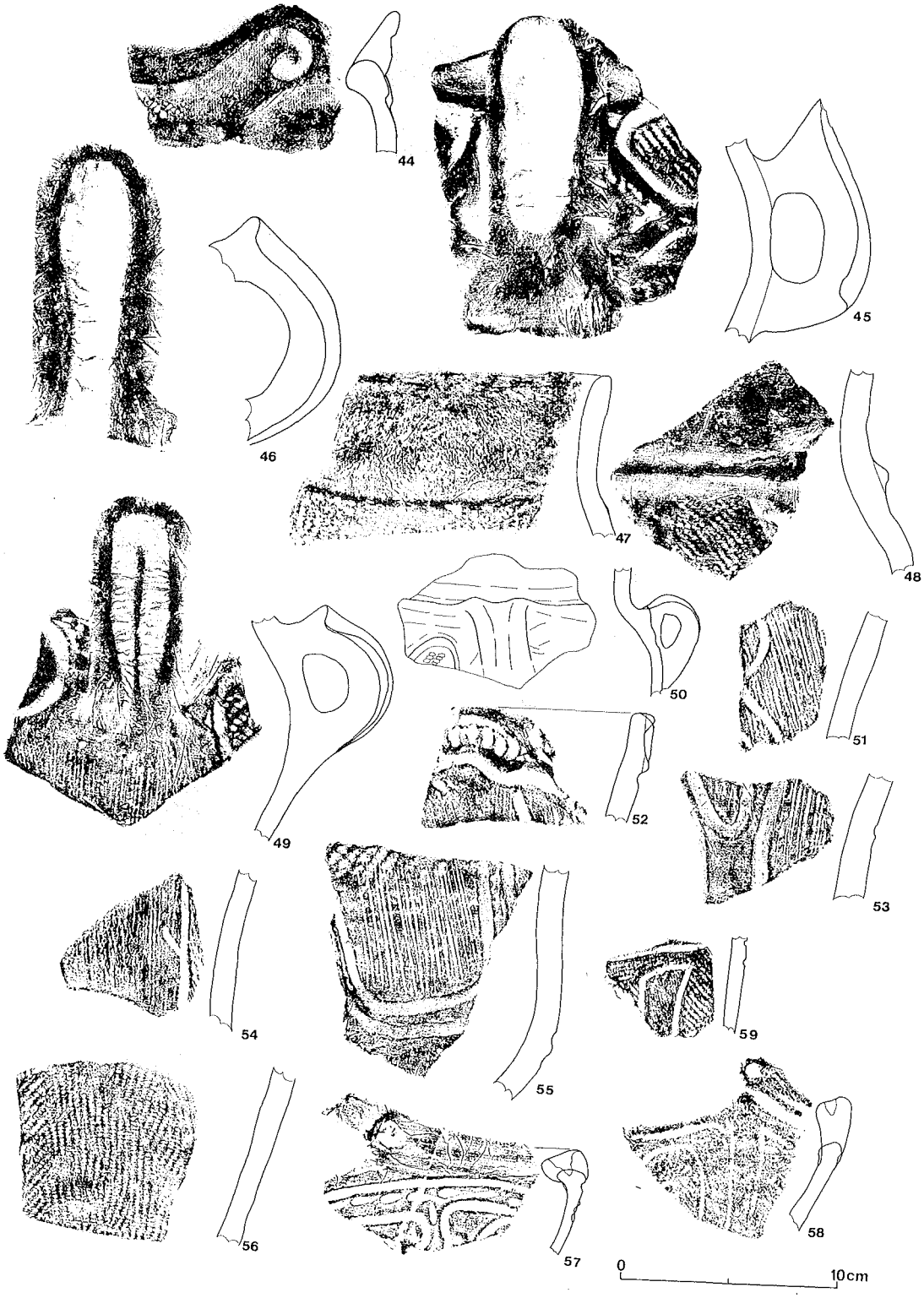
63・64は蛇行する沈線が垂下している。65は、頸部に刻みを施した隆線が巡り、口縁部は無文、胴部には縦位の集合沈線が施されたものであろう。縄文は、63がＬＲ単節、他は不明である。

○Ⅳ－C（66～72）

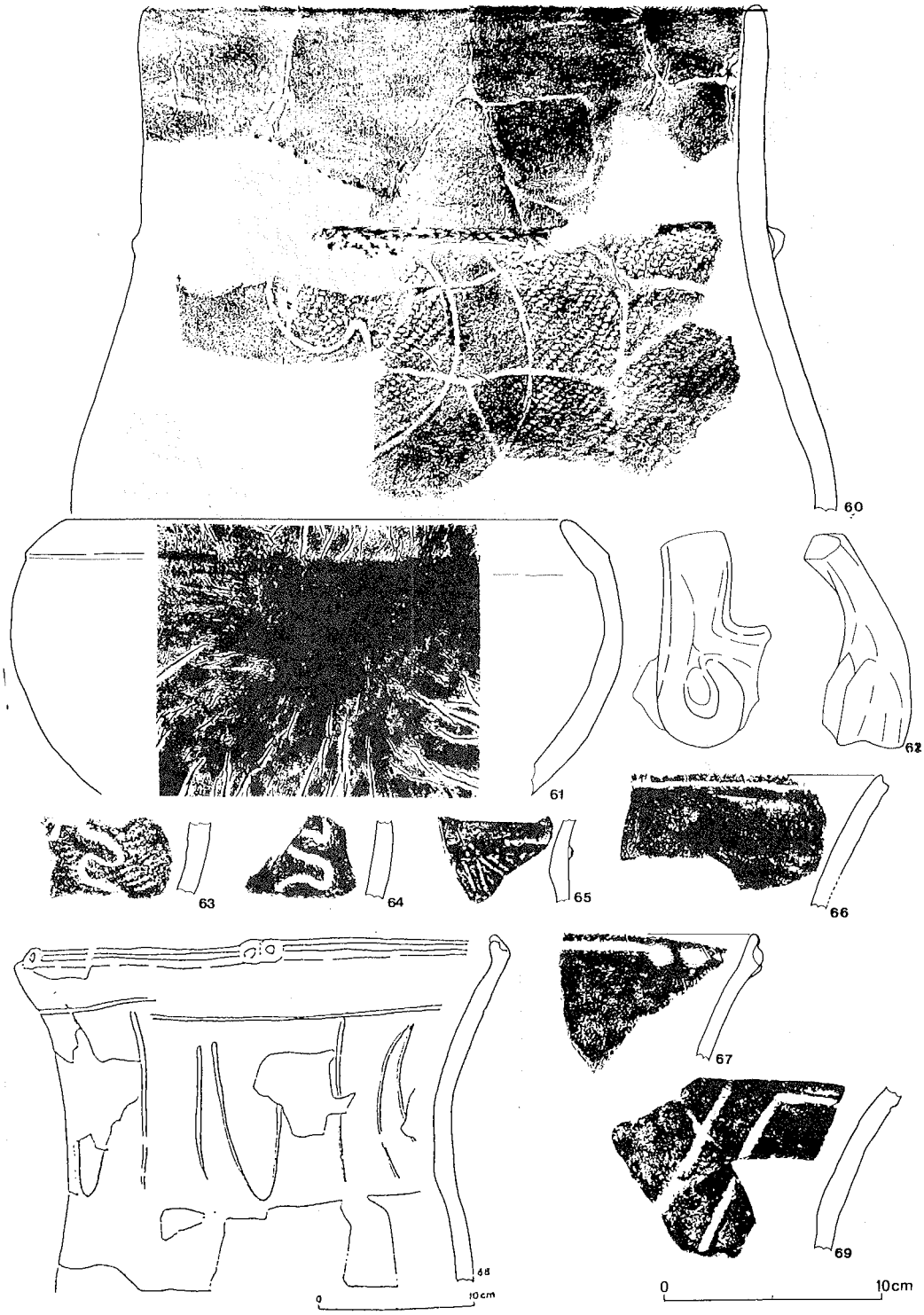
66～71は、胴部上半に沈線による簡単な文様が描かれたものである。66・67は口唇部外面に沈線が巡り、67は更に横に並ぶ２つの刺突が施されている。68は内側に屈曲した口唇部外面に沈線が巡り、更に横８字状の貼付が施されている。１条の沈線により口縁部と胴部を画し、口縁部は無文で、胴部上位には垂下する平行沈線とＵ字状の沈線が交互に繰り返されている。横８字状の貼付は５単位、胴部の文様は６単位である。

72は平行沈線により渦巻状の文様が描かれている。

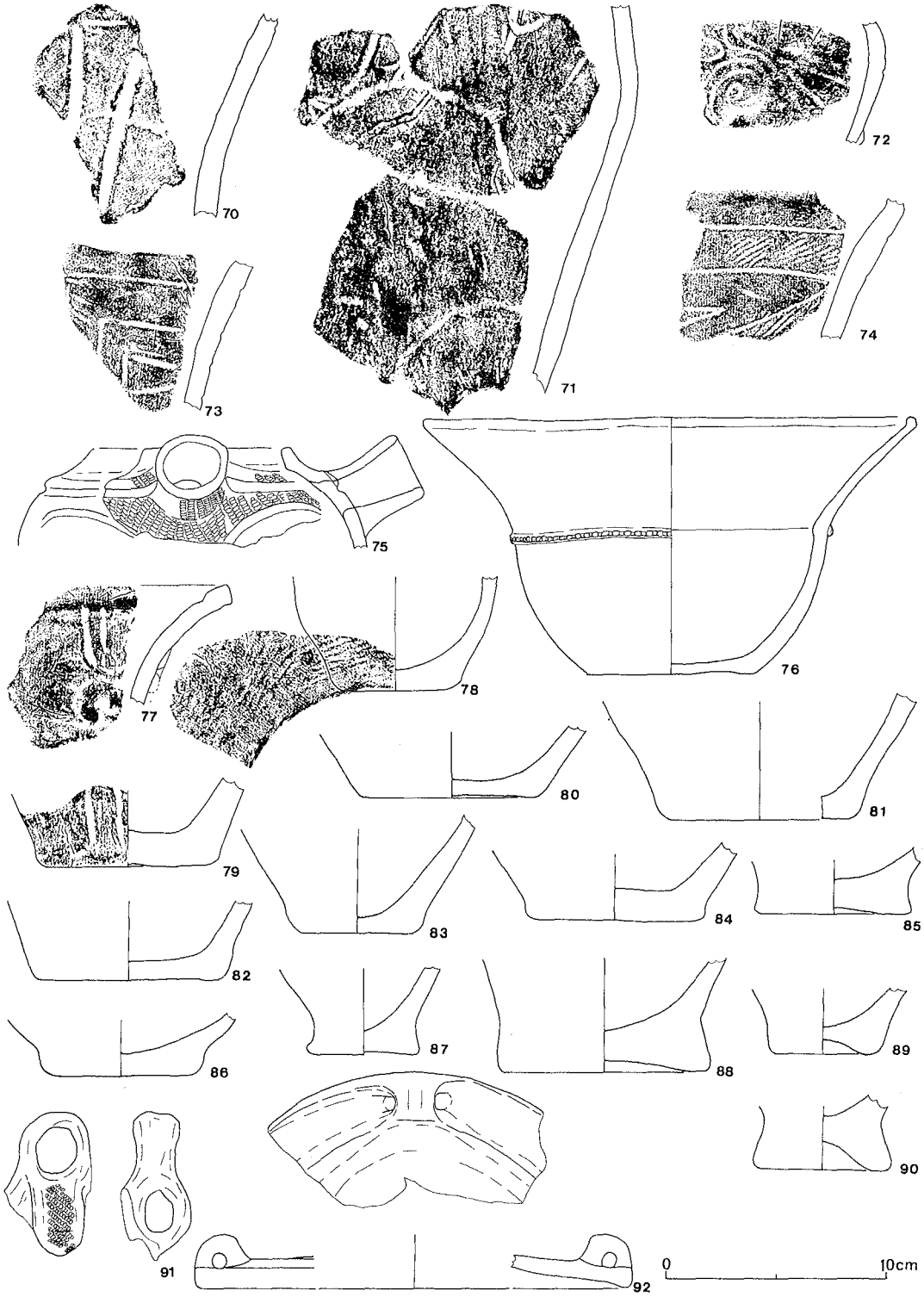
○Ⅳ－D（73・74）



第26図　第３号川跡出土土器(4)



第27図　第３号川跡出土土器(5)



第28図　第３号川跡出土土器(6)

地文は、73が無文、74はＬＲ単節の縄文。74は、口唇部が内側に屈曲していたようである。

○Ⅳ－Ｅ（77）

外反する口縁部である。口唇部内面直下に浅い沈線が巡る。口唇部外面は平坦で、その下にＵ字状の平行沈線が描かれ、中央に刺突を施したボタン状の貼付がある。

○Ⅳ－Ｆ（75）

口縁部内彎し、口唇部は内側に稜をなしてわずかに直立する。口縁部無文帯と胴部文様帯は注口に続く隆線により画され、胴部の文様は沈線と磨消縄文により構成されている。注口はわずかに開く。縄文はＬＲ単節である。

○Ⅳ－Ｇ（76）

口唇部は内側に屈曲し、頸部に刻みのある隆線が巡る。内外面ともよく研磨され、黒色を呈する。

○Ⅵ（78～90）

78はＬＲ単節の縄文が、79は垂下する平行沈線が施されている。ともに加曽利Ｅ式であろう。78は内面に特に顕著に炭化物が付着している。85・88・89はわずかに上げ底状となっており、90は高台状になっている。

○Ⅶ（91・92）

91は鎖状の把手である。縄文はＲＬ単節。

92は蓋であろう。端部と内側の微隆線の間に橋状の耳が貼り付けられている。

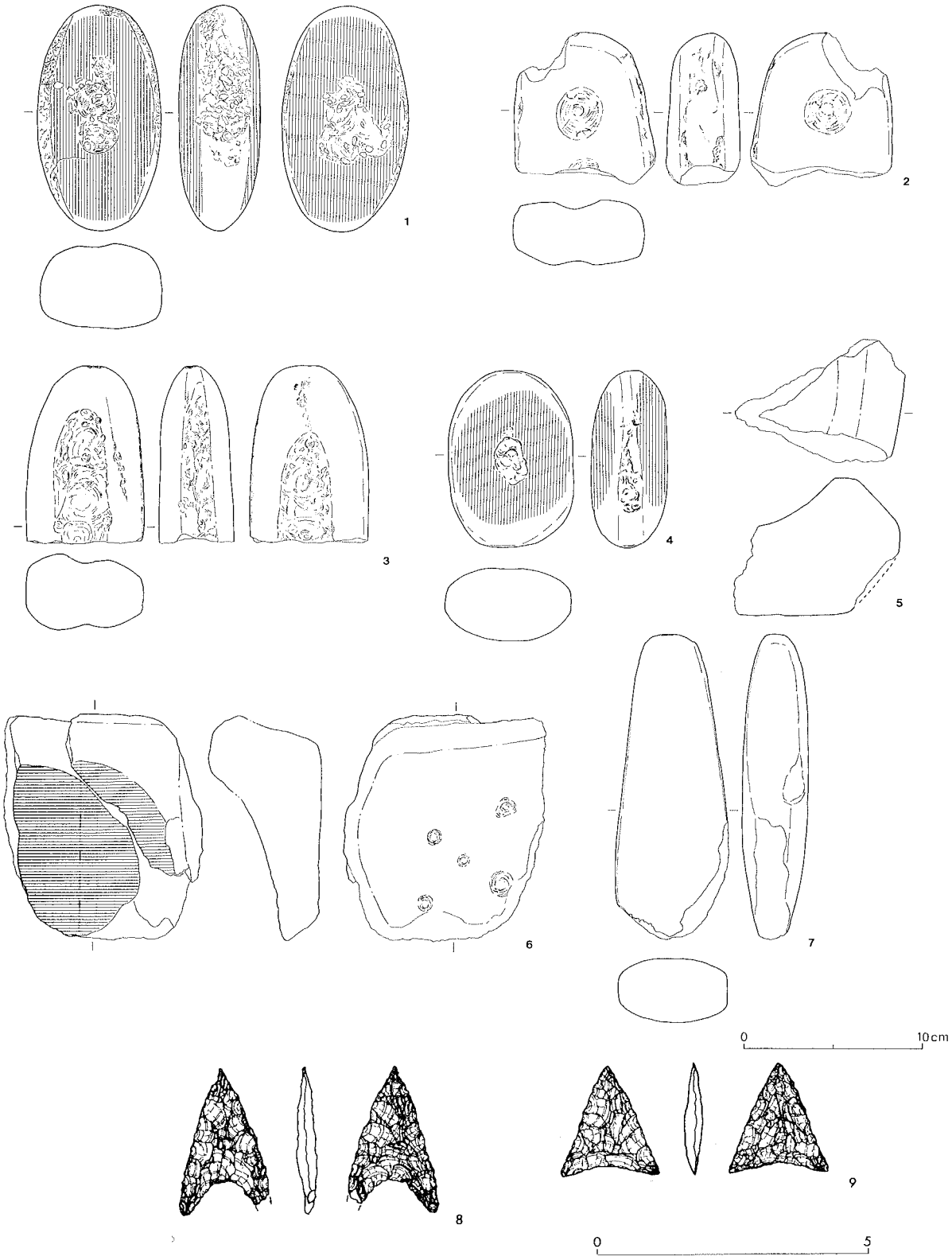
イ．出土石器（第29図）

表３　第３号川跡出土石器一覧

番号	器種	形態	長さcm	幅 cm	厚さcm	重さg	石質	備考
1	磨石	表凹有	12.7	7.0	4.7	600	輝石安山岩	凹みは２つ連続、裏・側面に敲打痕有
2	磨石	表裏凹有	(8.4)	(7.9)	(4.1)	(343)	輝石安山岩	約１／２欠損
3	磨石	表裏凹有	(10.1)	6.6	4.2	(332)	輝石安山岩（スコリア質）	凹みは長円形で中央が深い。側面敲打痕有
4	磨石	表凹有	10.0	7.0	4.2	475	輝石安山岩	側面敲打痕有
5	石皿	円形？	—	—	(7.8)	(392)	輝石安山岩	周縁・底面平坦
6	石皿	方形？	(11.2)	(12.8)	(6.3)	(1121)	緑泥片岩	側・裏面平坦、裏面に数個の凹み有
7	磨製石斧	定角式	(17.3)	(6.4)	(3.6)	(680)	輝緑凝灰岩	刃部欠損、側面平坦
8	石鏃	凹基無茎	2.8	(1.7)	0.4	(1.3)	レッドチャート	基部抉入やや深い
9	石鏃	凹基無茎	2.1	1.9	0.3	0.8	砂質頁岩	基部抉入浅い

（　）内は欠損による残存値

１・４の表面及び６の内面は特によく磨られており、１は光沢を帯びている。



第29図　第３号川跡出土石器

(3) 第１・３号川跡出土遺物

ア．出土土器（第31図～第50図）

○Ⅰ（１）

中期勝坂式土器の口縁部である。隆線による区画内に竹管状工具による文様が充塡されている。

○Ⅱ－Ａ（２～12）

２は口縁部まで縄文が施されており、５～８・10～12は口縁部に無文帯が巡る。９～12は橋状の把手がある。縄文は、３・６～９・12がＲＬ単節、他はＬＲ単節である。口縁部で縄文が横転されているものは、２～４・６・９である。５・６の外面及び８の内面に炭化物が顕著に付着。

○Ⅱ－Ｂ（13～31）

１～22は、口縁部が無文のもの（13・14・19～21）、口縁部が沈線状（15）又は沈線が施されたもの（22）などがあるが、隆線により円又は渦巻状の文様が描かれたものである。13は波状口縁。縄文は、20のみＬＲ単節で他はＲＬ単節。13・15・20・22は口縁部付近で横転している。

23～25は１条の隆線が垂下するものである。縄文は23・25がＲＬ単節、24はＬＲ単節。23は外面に炭化物が顕著に付着。

26～31は、口縁部が無文で、隆線が巡り、その下に縄文が施されたものである。29・30は隆線上にも縄文が転がされている。縄文は、26～29がＬＲ単節、30・31はＲＬ単節で、口縁部付近で横転されているものは29～31。26は外面の縄文の部分に炭化物が付着している。

○Ⅱ－Ｃ（32～74）

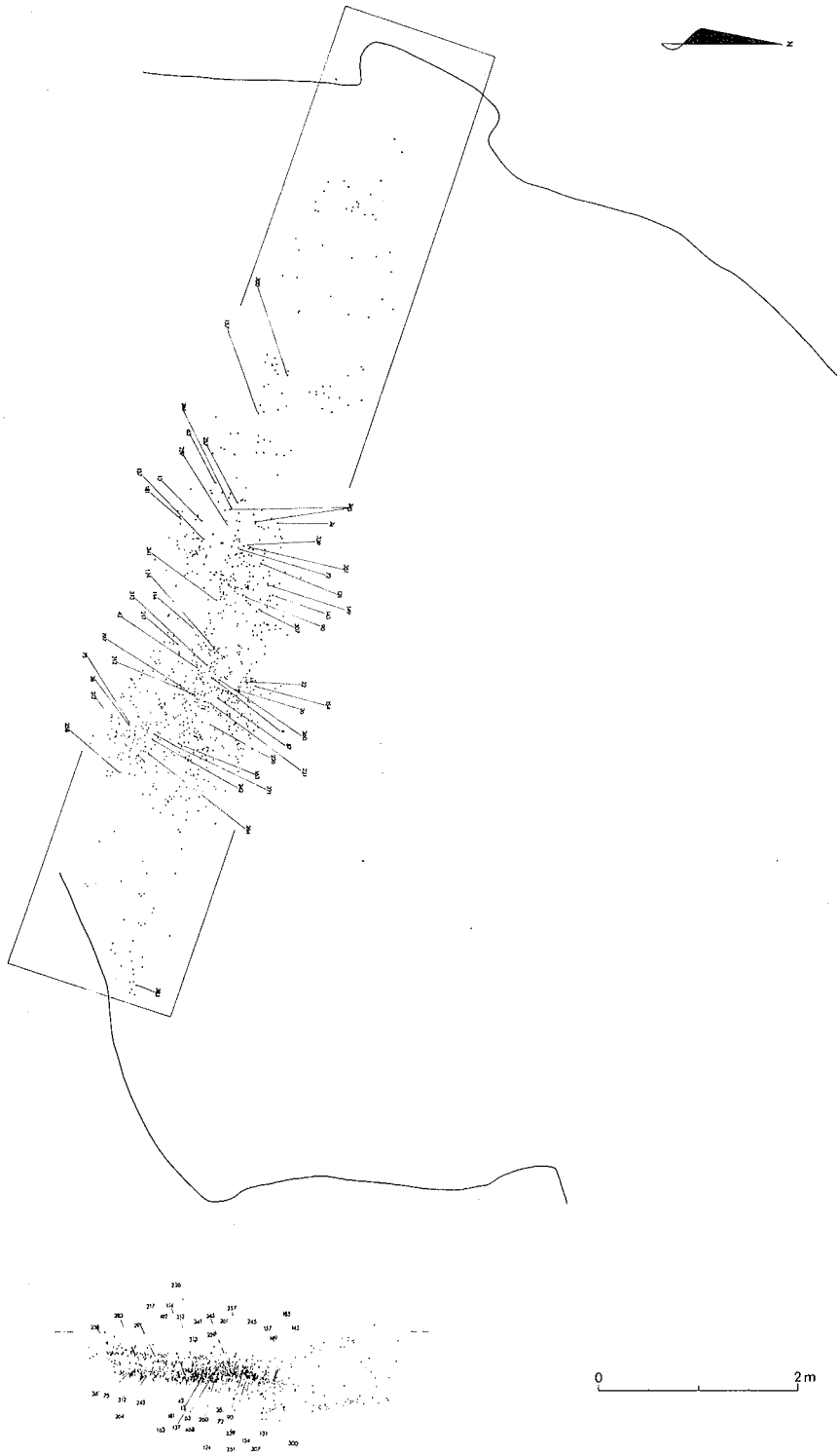
32～46は、隆線と研磨された無文部が垂下するものである。縄文は、32～39・41がＬＲ単節、40・42～46がＲＬ単節である。口縁部付近で縄文が横転されているのを確認できるのは42のみである。33の外面上半に炭化物が顕著に付着している。

47～49は、垂下する無文部と縄文の境が、無文部のナデにより隆起したものである。縄文は、47・48がＬＲ単節、49はＲＬ単節である。

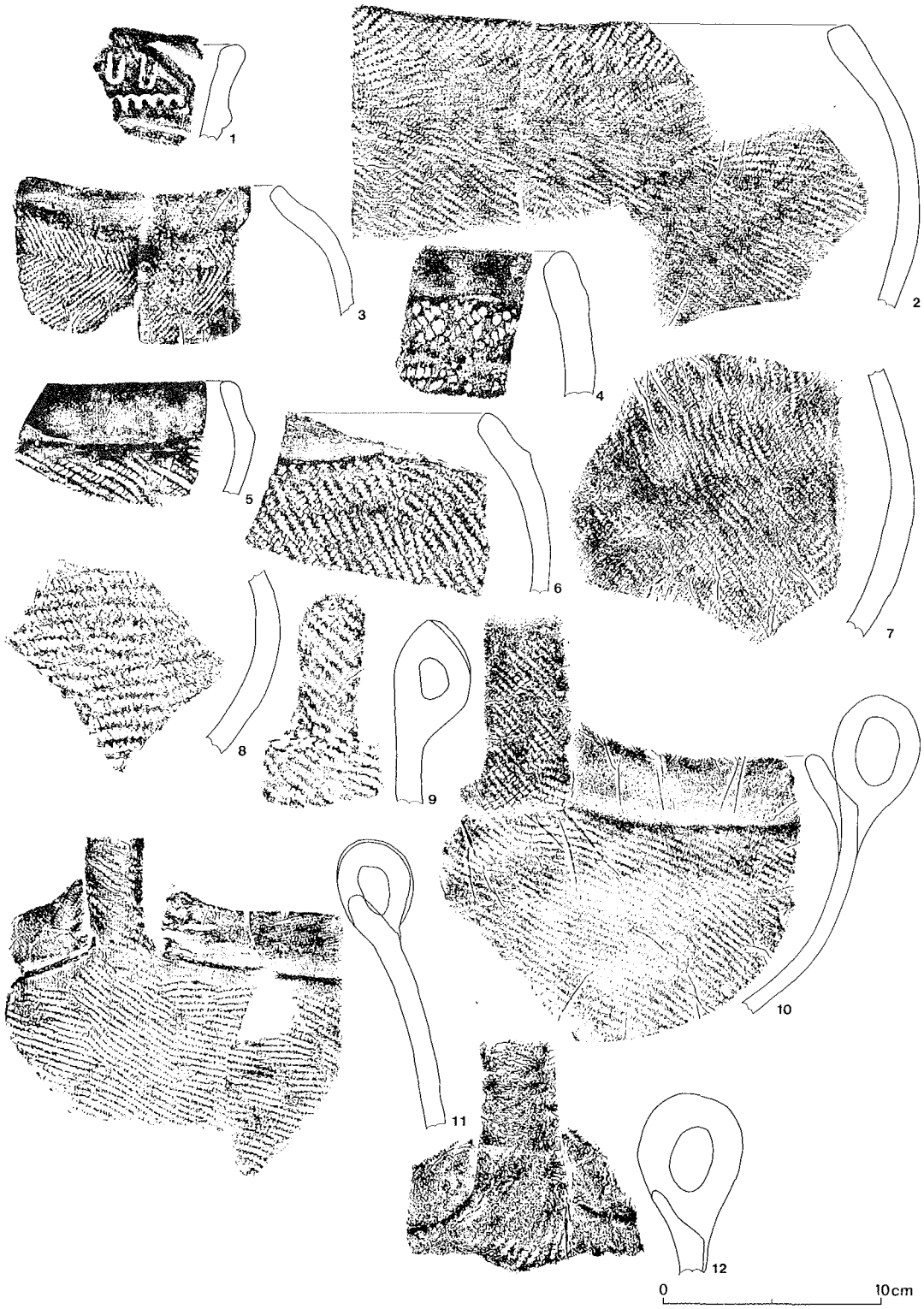
50～74は、隆線と研磨された無文部により、円形状又は渦巻状の文様や、Ｕ字状の懸垂文などが描かれたものである。50～52・55・56・58～61は波状口縁であろう。口縁部はだいたい無文であるが、50は浅い沈線状となっており、55は波状の頂部を除き縄文が横転されていたようである。57は口縁部に１条の隆線が巡るが、円形状のモチーフの上で山状の突起となっている。58～60は波状口縁の頂部が外側に肥厚したものである。61は橋状の把手がついたものであろう。縄文は、50～53・55～58・62・66～70はＲＬ単節、64・73は不明、他はＬＲ単節である。縄文の回転方向がやや乱れたものがあるが、58・66は特に著しい。口縁部付近で横転されていることが確認できるものは、50・51・53・55・56・61・62・66である。

○Ⅱ－Ｄ（75～153）

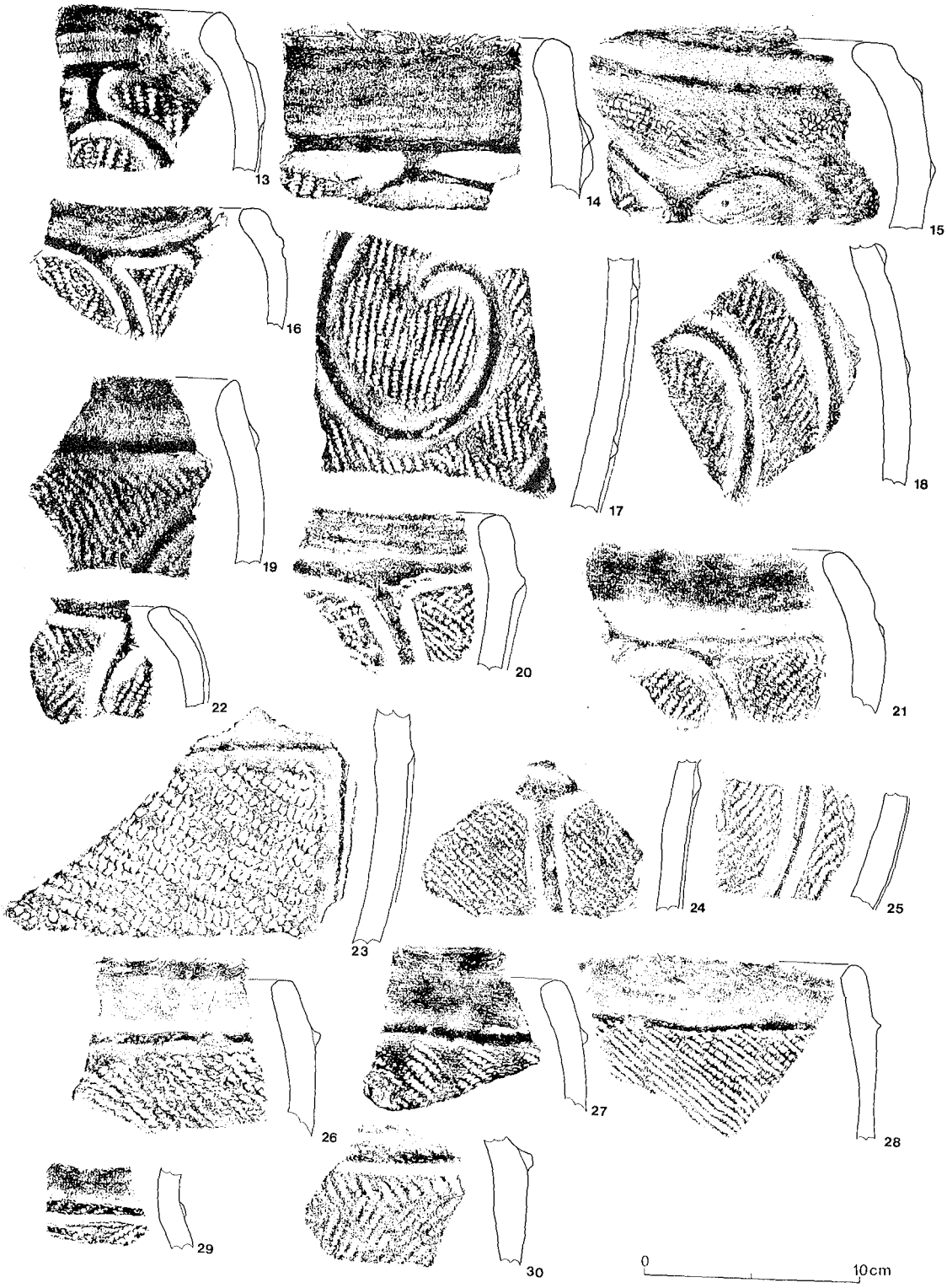
75～81は、口縁部の無文帯と縄文が横位の沈線により画されるものである。78は波状口縁であり、胴部には沈線と研磨された無文部により、深い波状の文様が描かれていた可能性がある。縄文は、75～78はＬＲ単節、79～81はＲＬ単節。全て口縁部付近で横転されている。77・81は回転方向がやや乱れている。80は外面に炭化物が顕著に付着している。



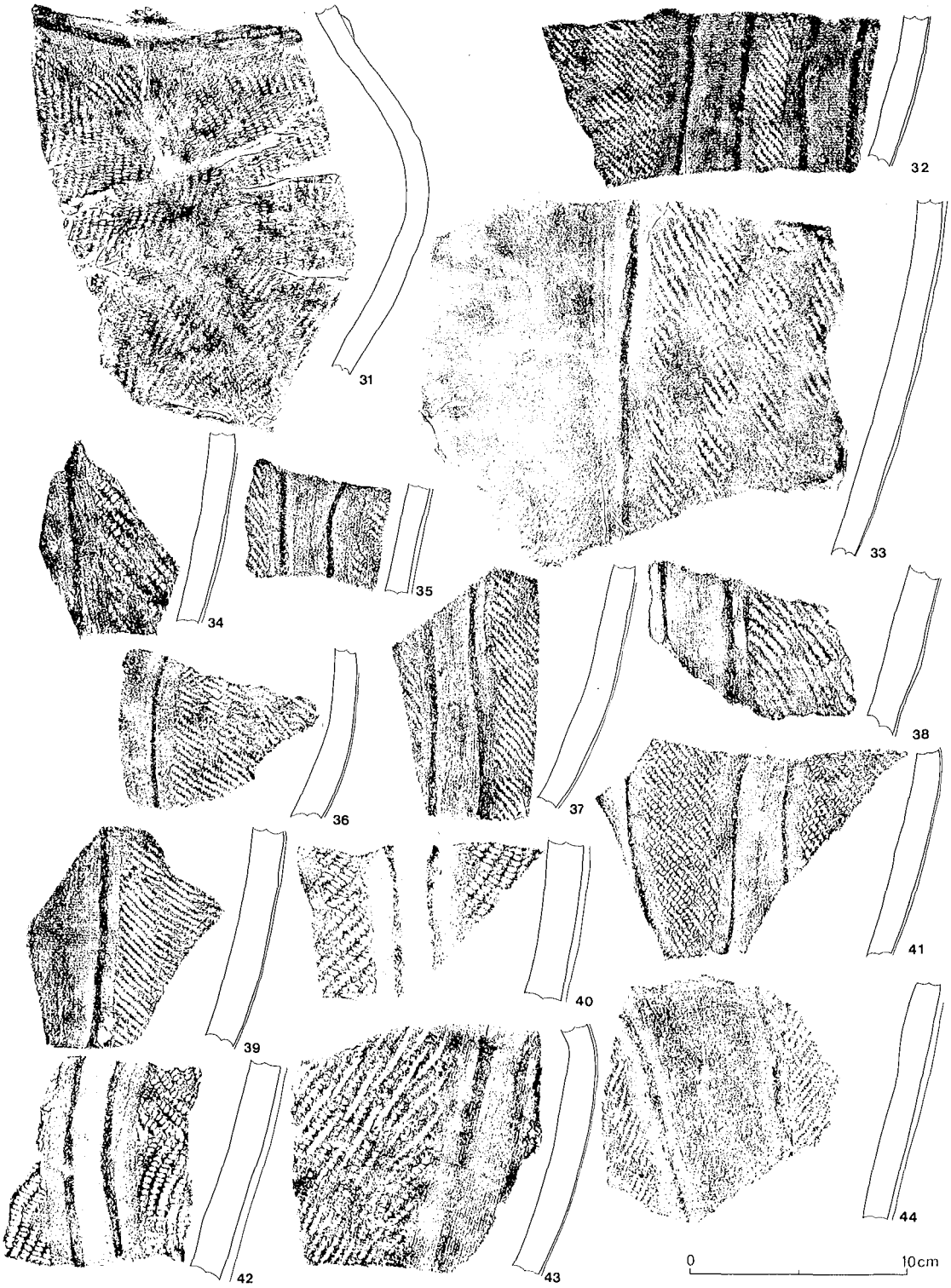
第30図　第１・３号川跡遺物出土状態



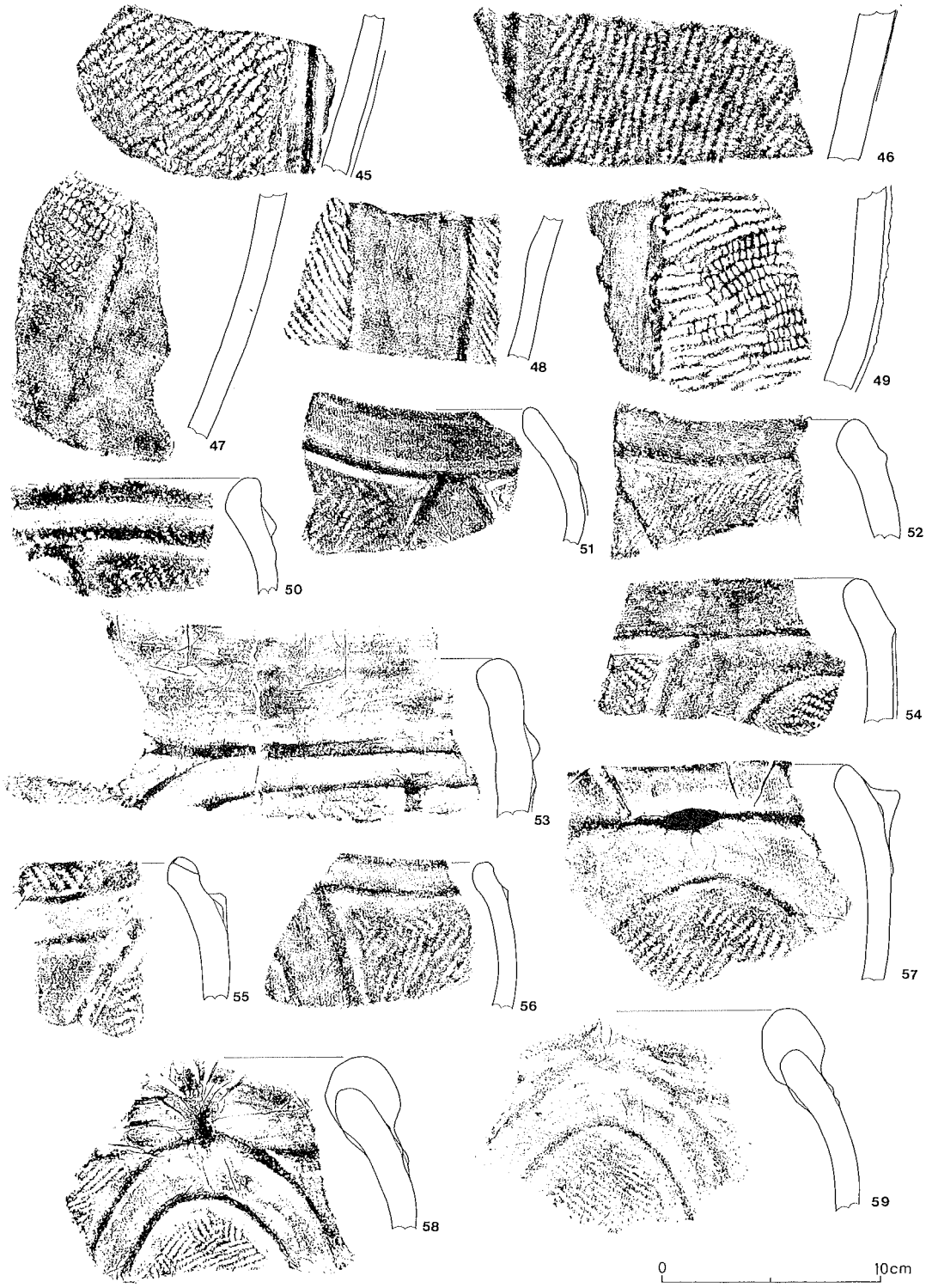
第31図　第１・３号川跡出土土器(1)



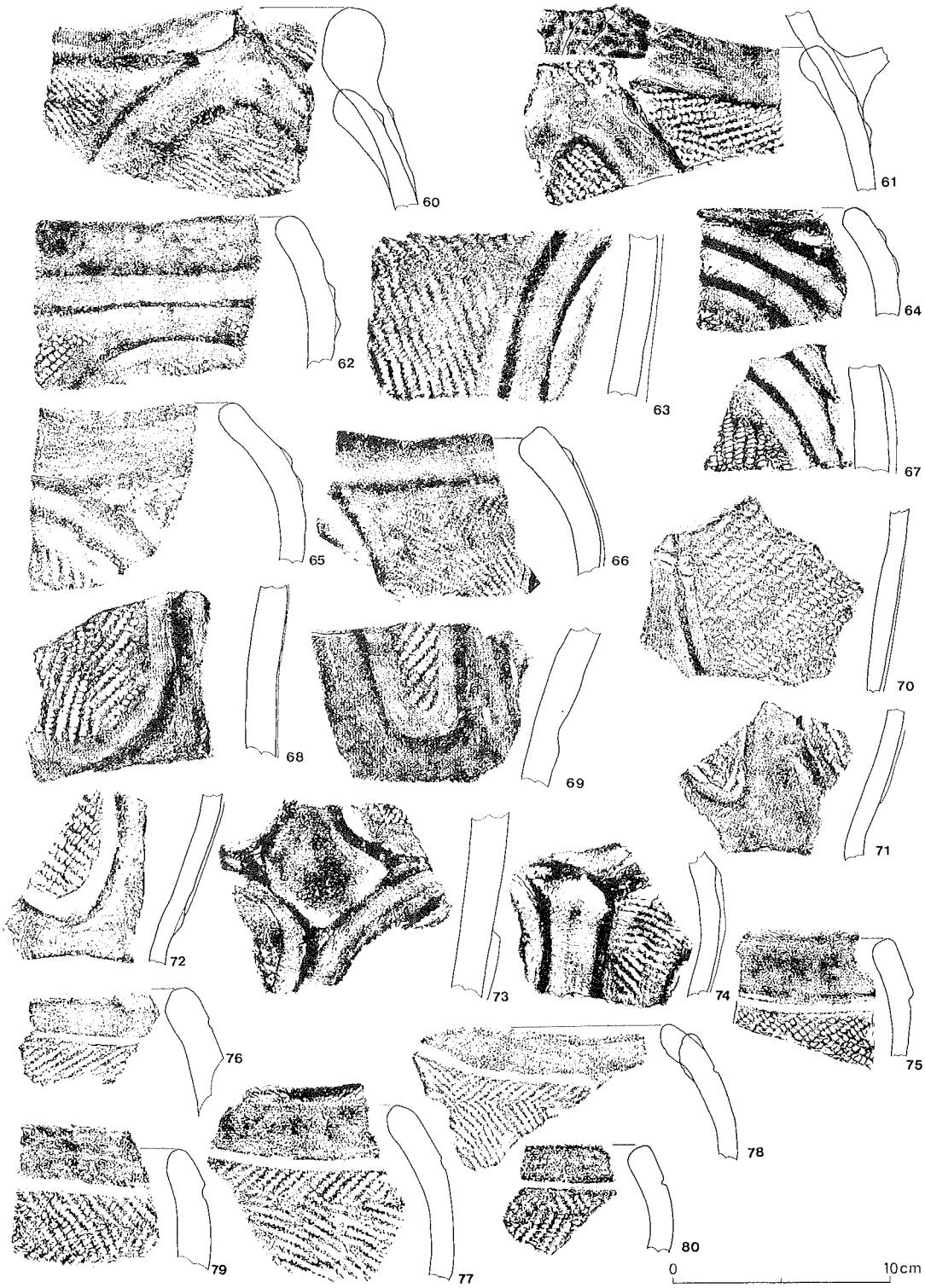
第32図　第１・３号川跡出土土器(2)



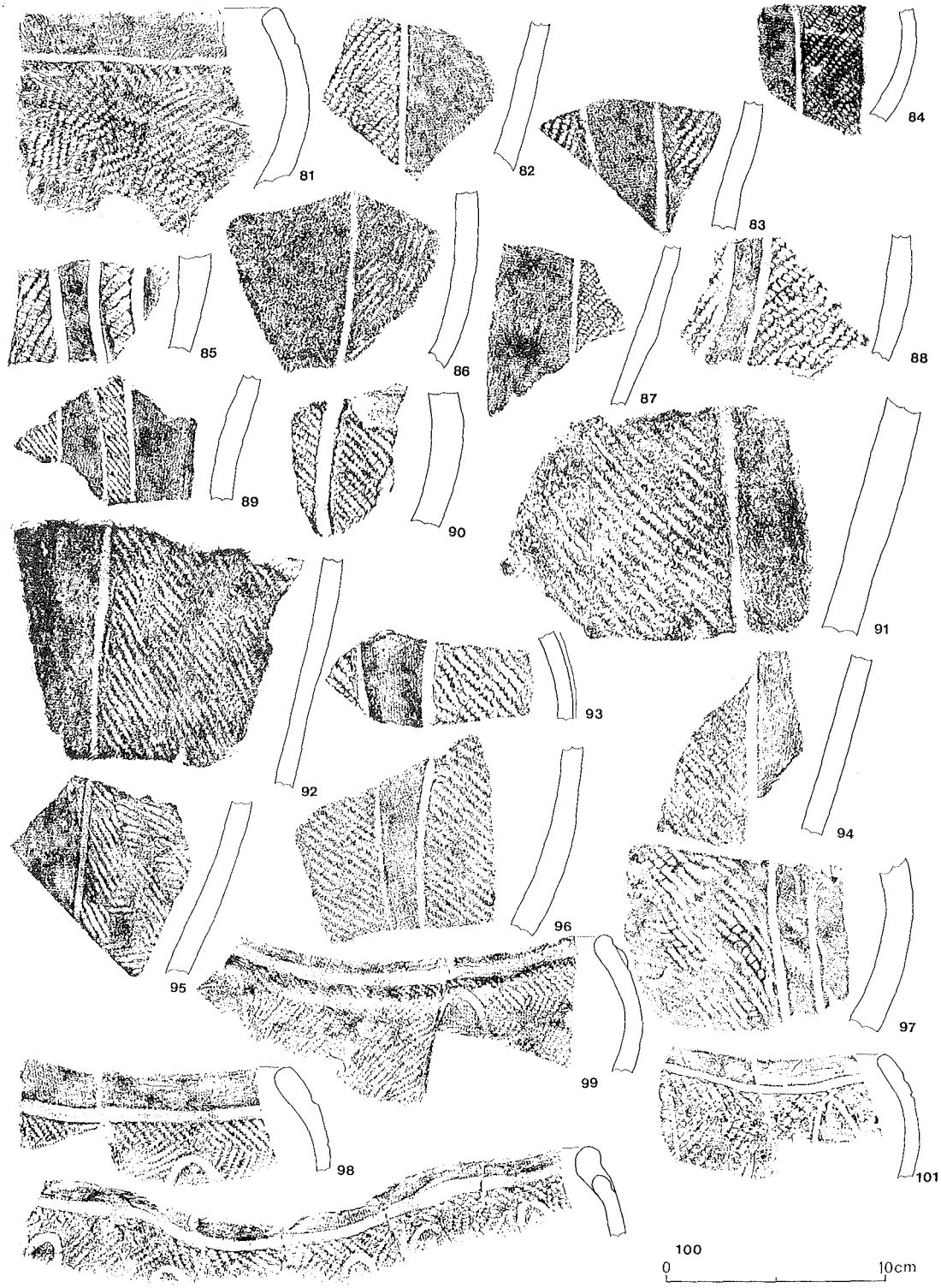
第33図　第１・３号川跡出土土器(3)



第34図　第１・３号川跡出土土器(4)



第35図　第１・３号川跡出土土器(5)



第36図　第１・３号川跡出土土器(6)

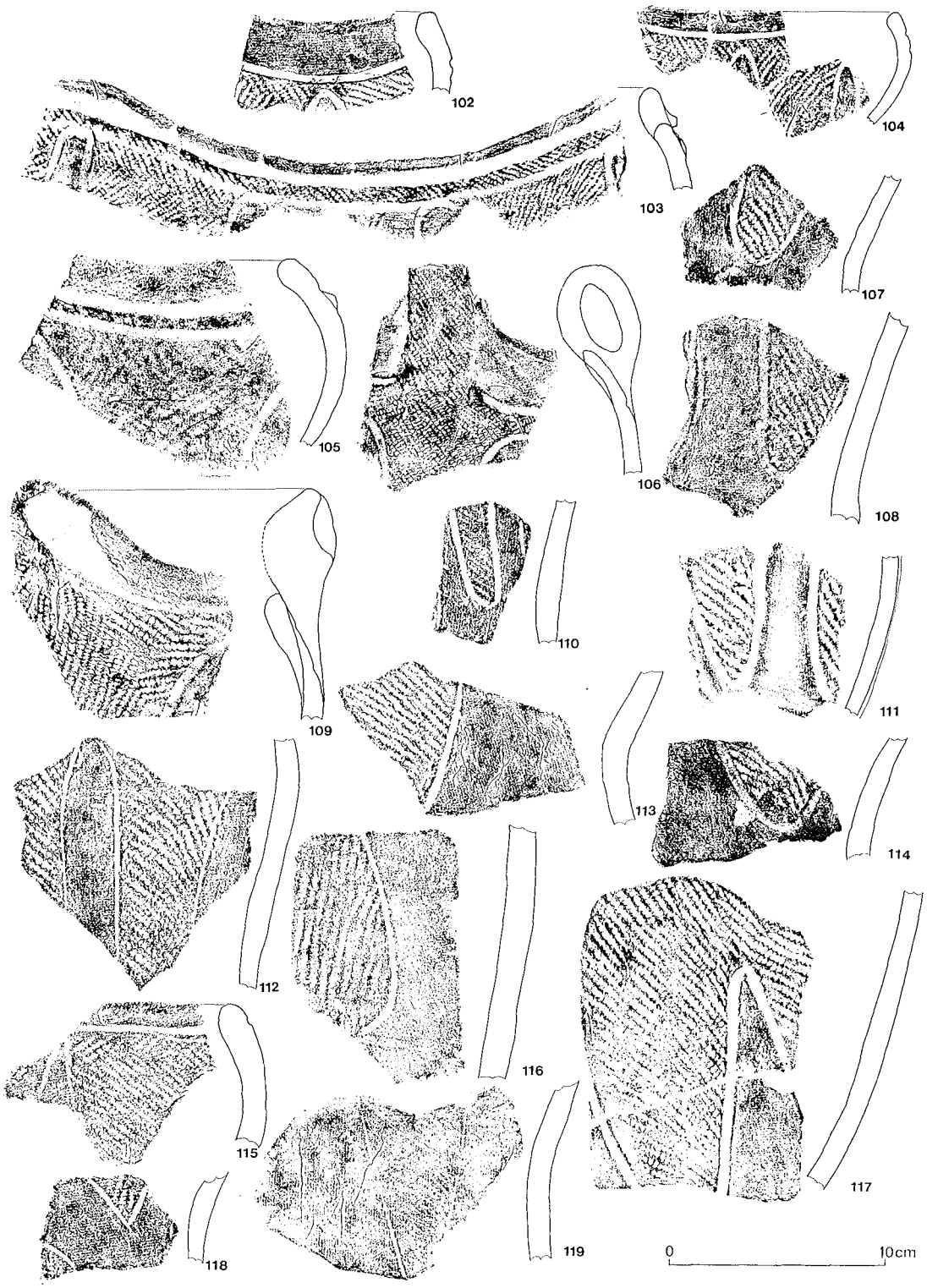
82～97は、沈線と研磨された無文部が垂下するものなどである。U字状の懸垂文などを構成しているものが多いと考えられる。85・88は沈線の間隔が狭く、円形状などの文様を描いていたものかもしれない。90は無文部がなく、93は沈線の無文部側が隆起している。97は3条1組の沈線が垂下したものであろう。縄文は、82～88はＲＬ単節、89～97はＬＲ単節である。95は回転方向がやや乱れている。85の外面には炭化物が顕著に付着している。

98～124は、沈線と研磨された無文部により、U字状文・Ω状文、W字状文、H字状文、深い波状文などが描かれたものである。波状口縁であることが明確に認められるものは、98～100・102・103・105・109・126である。口縁部無文帯と胴部文様帯が横位の沈線により画されるものが多いが、99・103・105は、口縁部に沈線と断面カマボコ状の隆線が巡り、隆線上にも縄文が転がされている。103と105は同一土器の可能性がある。106・121～123は口縁部に橋状の把手がついている。123の把手は向かって右側へ曲げて作られている。109は口縁部の沈線が波状口縁の頂部で大きな窪みとなって止まっている。124は口唇部まで縄文が施されている。縄文は、98～105・109・116・118・120・123・124がＲＬ単節、106～108・110～115・117・120・122がＬＲ単節、119は不明瞭だが細かいＬＲ単節ないしＬ無節であろう。口縁部付近で横転されていることが確認できるものは、98～106・109・115・123・124である。100・101の内外面、102・114・122の外面には炭化物が顕著である。なお、98～124は、円形状又は渦巻状の文様を構成しているものが含まれている可能性がある。

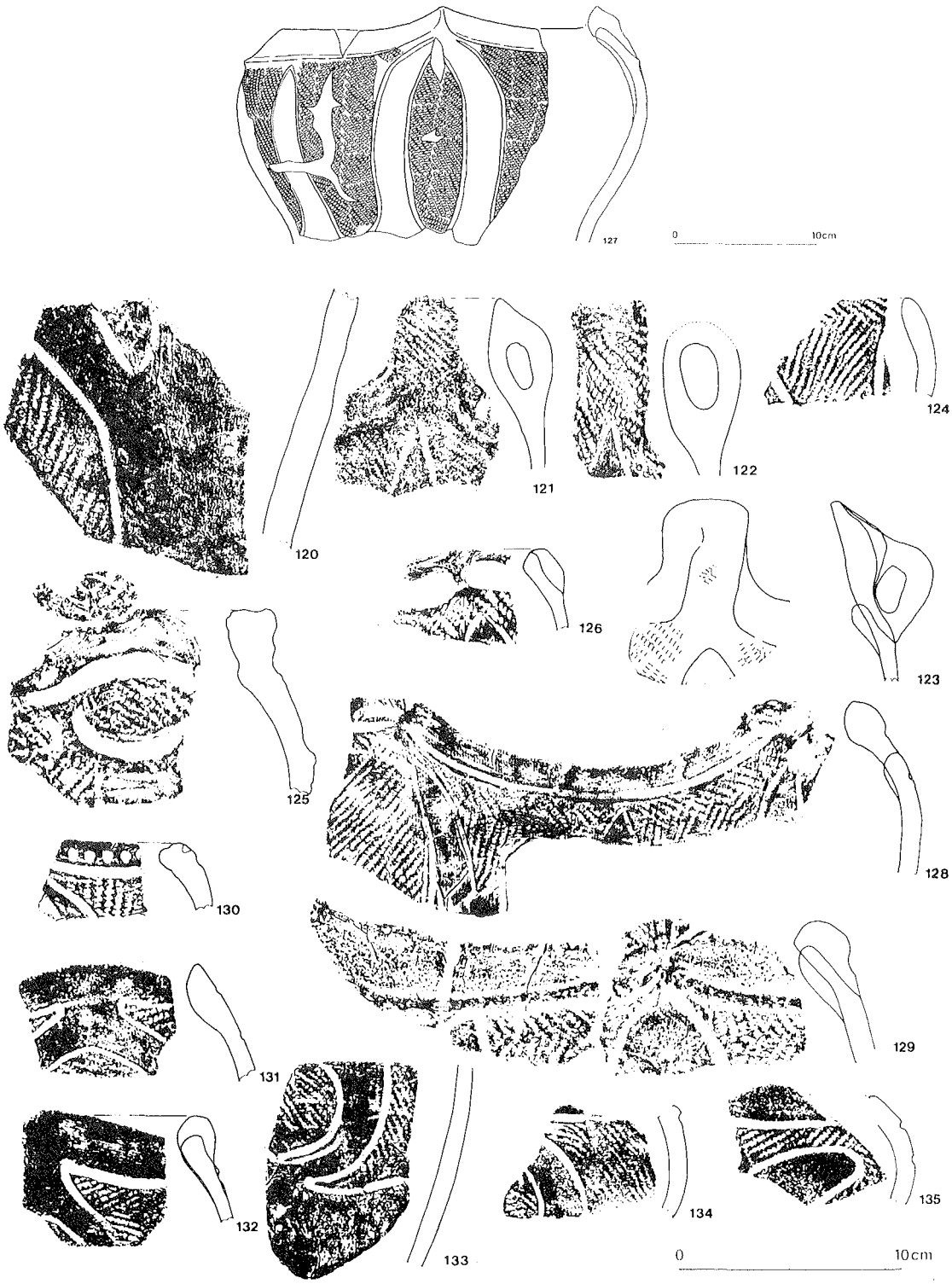
125～153は、円形状（長円形状のものを含む）や渦巻状の文様が描かれているものである。波状口縁であることが確認できるものは、125・127～129・131・132・136・137・148である。127～129・132は波状口縁の頂部が外側に肥厚しており、131は内側に肥厚している。125は口縁部に沈線と隆線による区画文が描かれ、胴部に沈線が垂下するものであろう。波状の頂部直下の文様は円形状となる。口縁部内面にも浅い沈線が巡っており、螺施状に連続して波状の頂部で渦巻状となっている。126は、口縁部に巡る浅い沈線が、波状の頂部で左右から止められているものである。127は、口縁部に微隆線が巡り、波状の頂部直下は長円形状のモチーフが描かれ、その他の文様はU字状文で構成されている。130は、口唇部外面に列点が巡っている。129は、口縁部に微隆線が巡り、微隆線上にも縄文が施されている。136・137は、口縁部に橋状の把手がついたものである。148は、口縁部に間に縄文が施された平行沈線が巡っている。縄文は、125・126・128～130・136・138～141・146・149～151はＲＬ単節、他はＬＲ単節である。口縁部付近で横転していることが確認できるものは、125・126・128・129・131・132・135～142・144・145・149である。128・129・141の外面には炭化物が顕著に付着している。なお、125～153には、U字状文・W字状文・深い波状文などが描かれたものが含まれている可能性がある。

○Ⅱ－Ｅ（154～169）

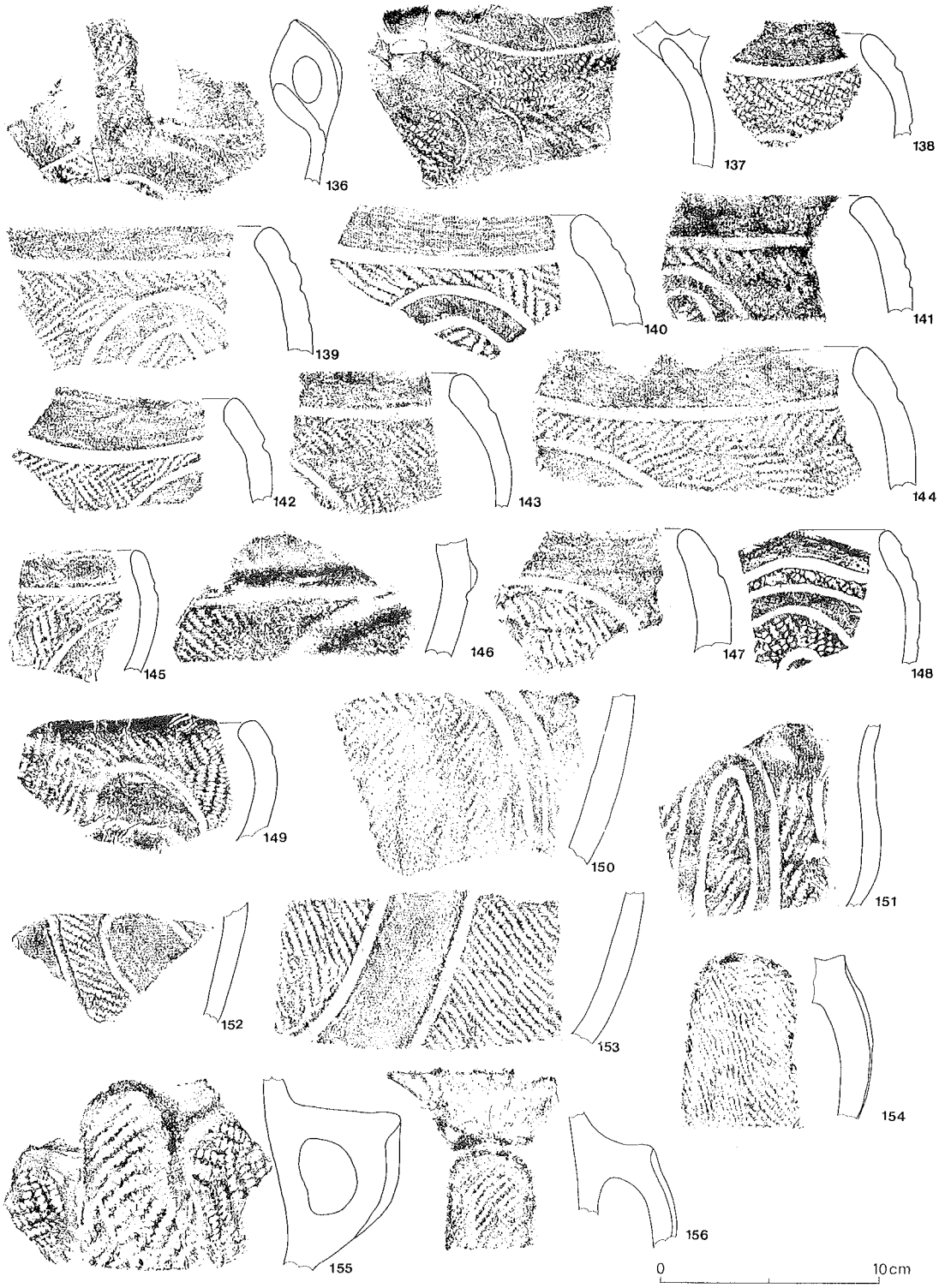
耳の外面は中央が窪んだものが多いが、159・161・162・169は平坦である。154～159・162は耳の外面にも縄文が施されている。161は、耳の外面にU字状の沈線が描かれ、その上位は縄文、下位は無文である。162は、耳の付け根に円形状の沈線が描かれ、その内側は無文、外側には縄文が施されている。164は胴部に隆線による円形状の文様が描かれたものであろう。166～169は小型のものである。169は耳が口縁部に貼り付けられており、浅鉢状の形態を呈するものかもしれない。169の外面口



第37図　第１・３号川跡出土土器(7)



第38図　第１・３号川跡出土土器(8)



第39図　第１・３号川跡出土土器(9)

縁部無文帯と内面は赤く彩色されていたようである。縄文は、155・156・161・164・166・167がＲＬ単節、他は163を除きＬＲ単節である。なお、155・164～166・169は、口縁部無文帯と胴部文様帯が、隆線又は微隆線により区画されていることが確認できる。

○Ⅱ－Ｇ（170～177）

170～174は、加曽利Ｅ式とみられる条線文土器である。170は沈線により、171は隆線により縄文と条線文が区画されている。ともに縄文はＬＲ単節で、胴部上位に円形状の区画文が描かれたものであろう。172は微隆線により、173は沈線により口縁部無文帯と胴部の条線文が区画されたものである。173の外面には炭化物が顕著に付着している。174は、条線文を地文として、隆線と研磨された無文部が垂下するものである。

175は、比較的小型の口縁部の橋状把手である。縄文はＲＬ単節であろう。胴部の文様は不明瞭だが、沈線と研磨された無文部により文様が構成されていたものと思われる。176は口縁部の角状の突起で、下位に橋状の耳が貼り付けられていたようである。内外面ともよく研磨されており、外面両脇は浅い沈線状となっている。口縁部には沈線が巡っていたようである。177は、口縁部に沈線とその下に列点が巡っている。口縁部は内側に稜を作り、口唇は尖っている。

○Ⅲ－Ａ（178～182）

178～180は口唇部から縄文が施されており、181・182は口縁部の無文帯と縄文が横位の沈線により画されている。178・179は口縁部がかなりすぼまった形態を呈し、181・182の口縁部はやや外反する。縄文は、178・182がＲＬ単節、179～181はＬＲ単節で、178は若干撚りが弱いものであろう。181の外面には炭化物が顕著に付着している。なお、180を除き加曽利Ｅ式とみるべきかもしれない。

○Ⅲ－Ｂ（183～186）

183・185・186は、刻みや竹管状工具による連続刺突や沈線などが施された隆線が、口縁部に巡っていたり、胴部に垂下していたりするものである。186は、渦巻状の文様を描いていたものと思われ、更に垂下する沈線により縄文と研磨された無文部が画されている。縄文は、器面が乾いてから施されたものと思われ、不明瞭だがＬＲ単節であろう。

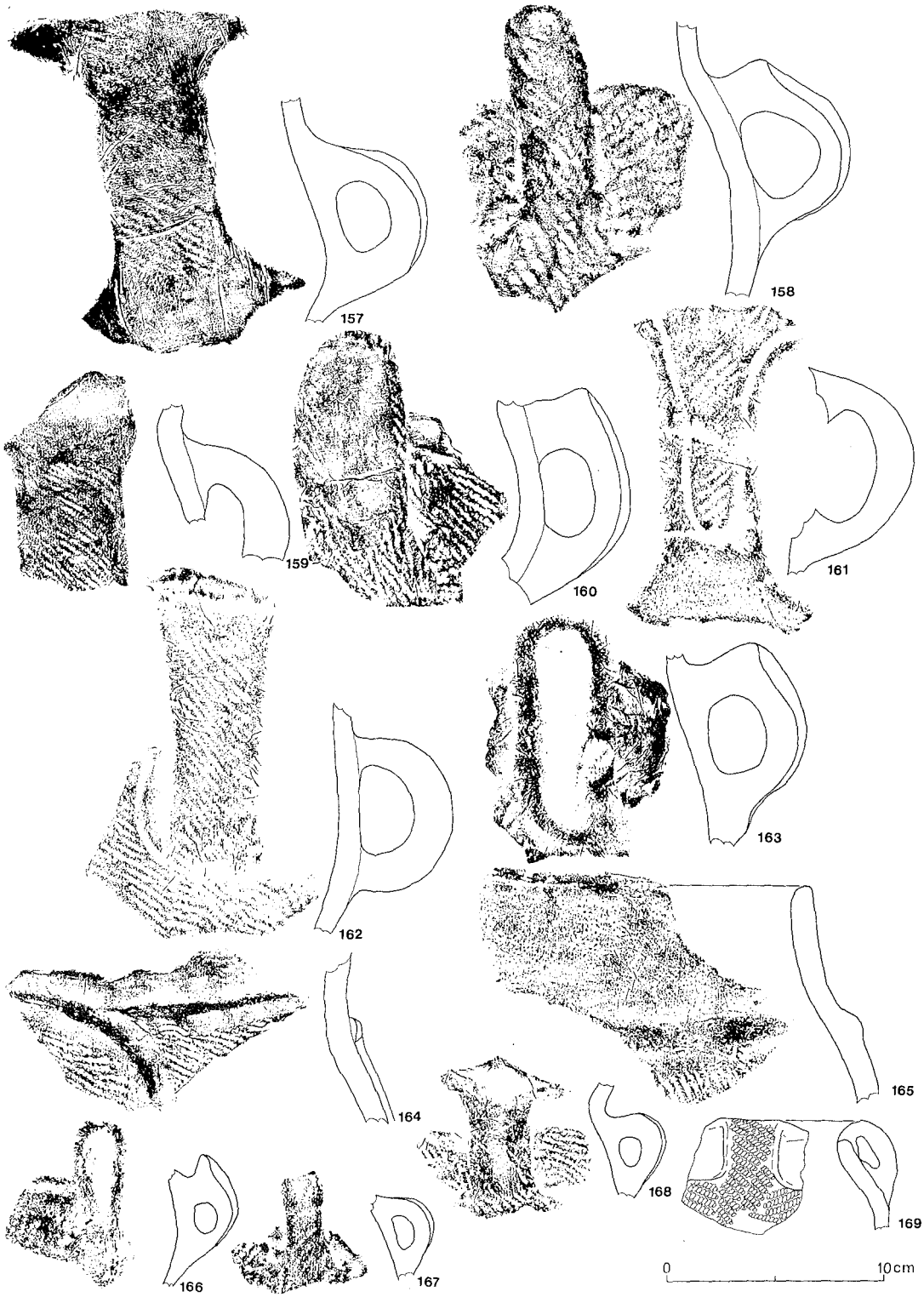
184は、口縁部に隆線が巡り、胴部には２条１組の隆線が曲線を描いて垂下している（一部が剝がれている）ものである。隆線の断面は山形を呈する。縄文は細かいＬＲ単節である。

○Ⅲ－Ｃ（187～189）

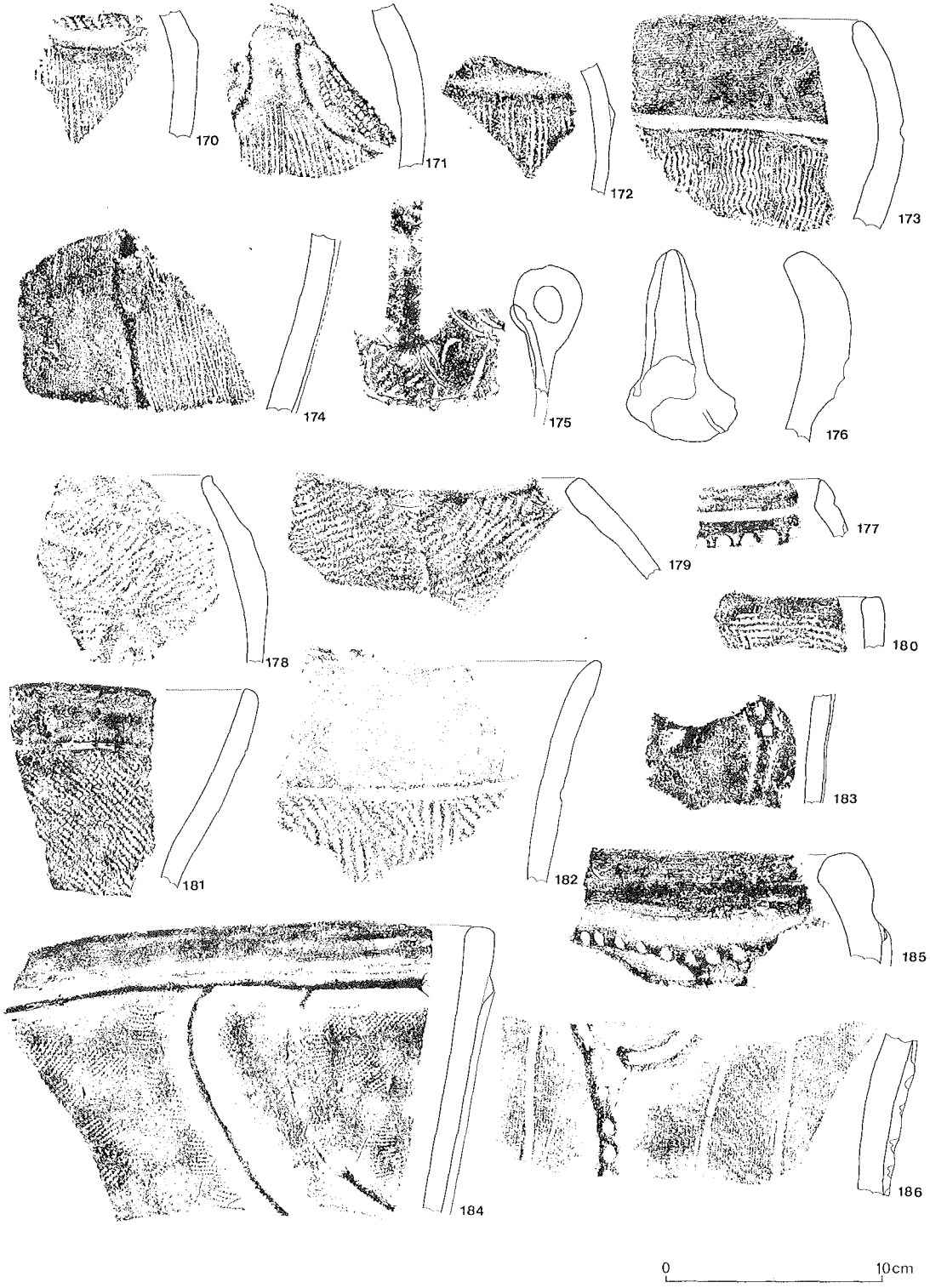
187は、口縁部に断面山形を呈する隆線が巡り、胴部にはΩ状の平行沈線が描かれている。外面には炭化物付着。188は、平行沈線により胴部にＪ字文などの複雑な文様が描かれたものであろう。沈線間には列点が施されている。189は、口縁部が無文で、その下に横位の沈線と列点が確認できる。

○Ⅲ－Ｄ（190～206）

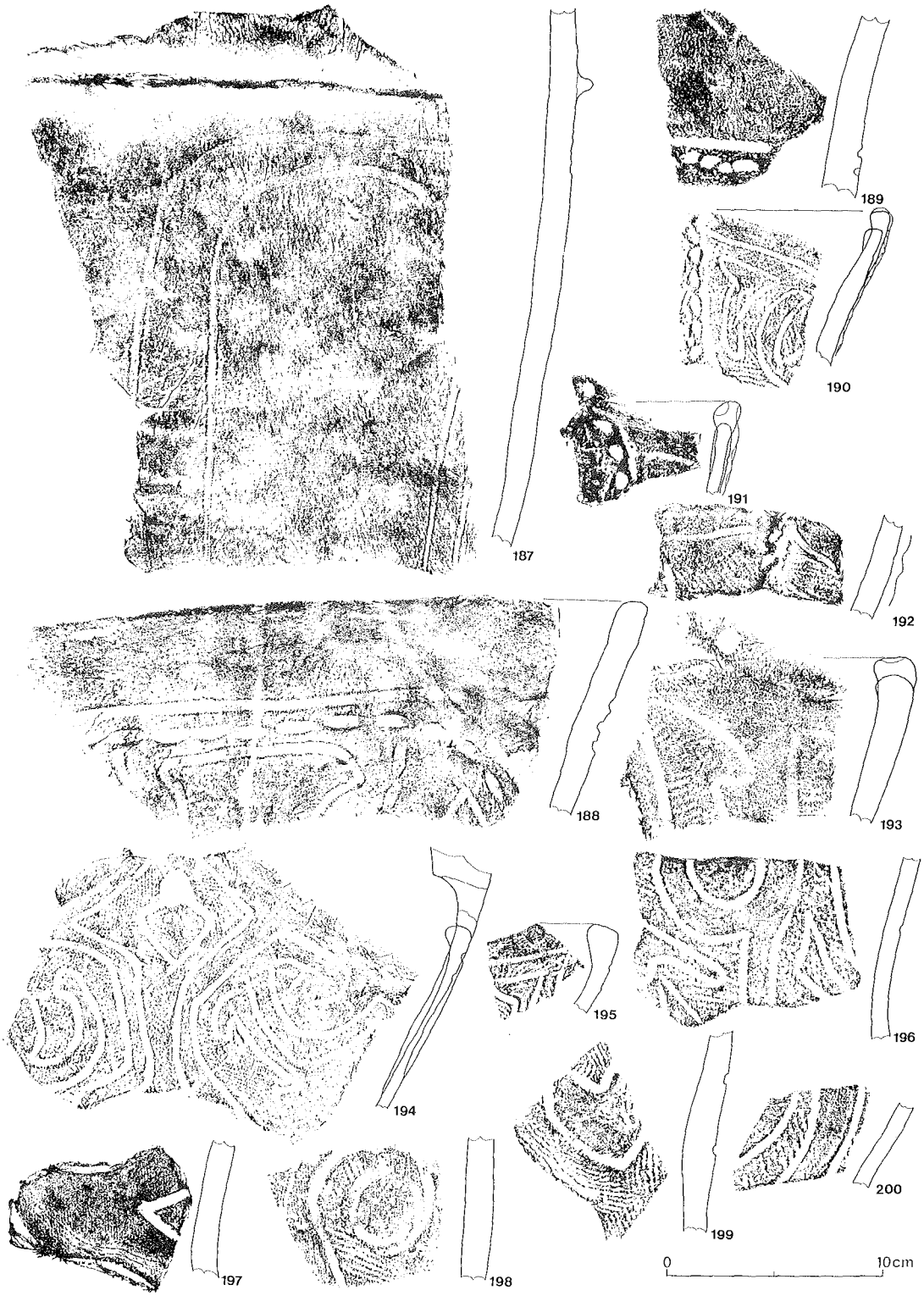
190・191・193～195は波状口縁である。191・194は口縁部がわずかに内側に屈曲している。190・191は波状口縁の頂部から刻みが施された隆線が垂下している。192も同様のものであろう。 191・193は波状口縁の頂部に浅い刺突が施されている。194は、波状口縁の頂部が内側にせり出し、その直下に円形の孔が穿たれている。197は沈線のみにより文様が描かれたものかもしれない。204は、隆起上に連続刺突が施されている。縄文は、細かく不明瞭なものが多いが、190・194・199・203・204は



第40図　第１・３号川跡出土土器(10)



第41図　第１・３号川跡出土土器(11)



第42図　第１・３号川跡出土土器(12)

ＲＬ単節、192・193・195・196・198・200～202・205・206はＬＲ単節であろう。191は不明である。190・194・199・203・204の外面には炭化物が顕著に付着している。

○Ⅲ－Ｆ（207～211）

207・208は、口縁部無文帯と胴部文様帯を画する横位の隆線上に、山状の突起又は中央に刺突のあるボタン状の貼付を施したものである。胴部の文様は隆線により縄文と無文部が画され、207と208はネガとポジの関係になっている。縄文は、207がＬＲ単節、208はＲＬ単節である。

209は、口縁部に巡る隆線上に刻みが施されたものである。

210・211は、波状口縁の頂部の突起である。210は頂部が深く円形に、211は浅くΩ形に窪んでいる。210は口縁部に隆線と沈線が巡り、211は外面にＲＬ単節の縄文が施されている。

○Ⅳ－Ａ（212～222）

212～220は、口唇部外面がナデられていたり、沈線が巡る又は浅く沈線状に巡るものである。212～214は口唇部が内側に屈曲又は内彎している。215は口唇部の内外面が浅く沈線状に巡っており、特に内面は明瞭な稜を作り出している。縄文は、撚りが比較的弱いものが多いようであり、 212はＲ無節、他はＬＲ単節で、全て横転されている。212・214・219の外面には炭化物が顕著に付着している。

221・222は同一個体かもしれない。波状口縁の頂部から、刻みが施された隆線が垂下している。頂部はわずかに窪み、その直下、隆線の向かって左側に浅い刺突が施され、口唇部は浅く沈線状に巡っている。縄文は撚りの弱いＬＲ単節であろう。

○Ⅳ－Ｂ（223～243）

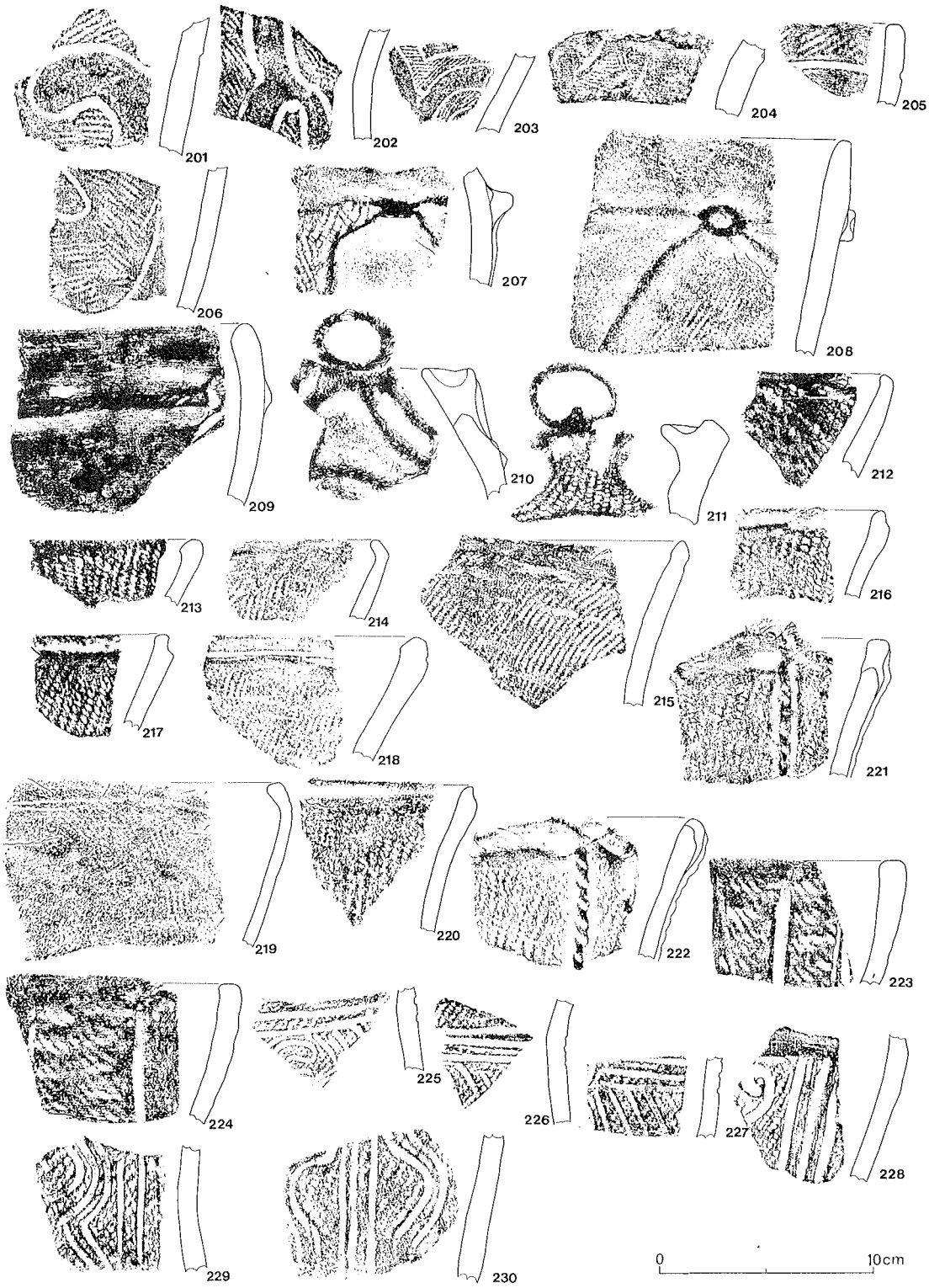
223・224は、口縁部から間隔を置いた沈線が垂下するもので、同一個体の可能性がある。縄文は不明瞭だが、ＬＲ単節であろう。

225～236・243は、集合沈線により縦位構成の文様が描かれたものであろう。蕨手状・過巻状・同心円状或いは蛇行して垂下する沈線などが描かれている。225～227は同一個体の可能性がある。243は、頸部が若干すぼまった形態を呈する。頸部に２条の沈線が巡り、その下に、中央に刺突を施したボタン状の貼付を中心にした同心円状の主文様が描かれている。垂下する沈線は５条ないし４条を１組としている。胴部最大径は約22cmで、文様は３単位であったようである。縄文は、撚りが弱いと思われるものや、不明瞭なものが多いが、231のみ不明、他は全てＬＲ単節であろう。225～227の外面には炭化物が顕著に付着している。

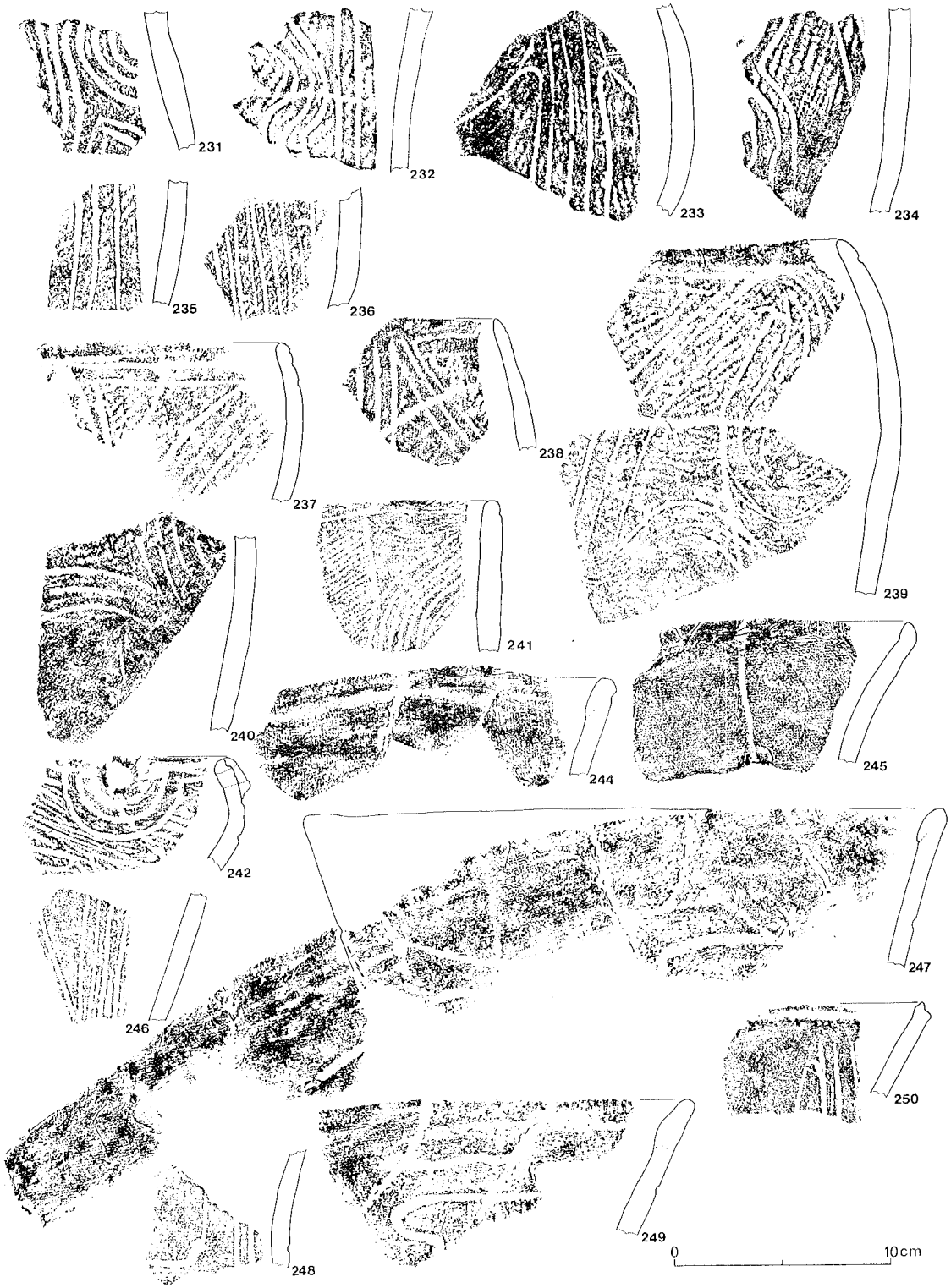
237～240は同一個体の可能性がある。口縁部に２条ないし３条の沈線が巡り、胴部には３条１組の沈線により曲線的な文様が描かれている。縄文はＬＲ単節である。

241は、集合沈線による曲線的な文様と、区画内に斜位の沈線が充塡された文様が描かれている。地文は縄文のようであるが、判然としない。

242は、口縁部にドーナツ状の貼付が施された穿孔があり、その両脇に竹管状工具による刺突が施され、穿孔を中心とした同心円状の文様が描かれている。縄文はＲＬ単節のようであるが、比較的器面が乾いてから施されたものと思われ、不明瞭である。外面には炭化物が顕著に付着している。



第43図　第１・３号川跡出土土器(13)



第44図　第１・３号川跡出土土器(14)

第45図　第１・３号川跡出土土器(15)

○Ⅳ－C（244～266）

244～254・265・266は、沈線により縦位構成の比較的簡単な文様が描かれたものである。244・247は同一個体の可能性がある。口唇部が若干内側へ折り返されている。250・251は同一個体であろう。口唇部外面に沈線が巡り、∩状の沈線と３～４条の沈線が１組となり、間隔を置いて垂下している。248も250・251と同一個体かもしれない。266は、口唇部に沈線と３つ並んだ刺突が施されている。

255～264は、集合沈線により縦位構成の文様が描かれたものである。渦巻状又は同心円状の文様、曲線的な文様、蛇行して垂下する文様などがある。255・259・264の文様は横位構成かもしれない。263の外面には炭化物が顕著に付着している。

○Ⅳ－D（267～293）

267～269は口縁部などに刻みを施した隆線が巡っている。267・268は８字状の貼付(267は横位か)がある。267・270～273・275～277・280は、口唇部内面に沈線が巡るか、口唇部が内側に屈曲したものである。267・271・272は、区画内に沈線が充塡されている。276～278は同一個体の可能性がある。279の文様構造も276～278に類似している。280の口縁部は、一部がわずかに突起しているが、単位数は不明。283・288～290は、縄文が施されておらず、成形も他に比して粗い。288～290は同一個体の可能性があり、幾何学的文様もやや乱れている。286・287は、区画内に沈線が充塡されるものであろう。292は文様が曲線化している。293は特異な口縁部で、口唇部外面に沈線が巡り、その直下に細かい刻みが施されている。口唇部内面は肥厚して稜を作り出しており、口唇部には細い穿孔があった痕跡がある。文様帯最上位の沈線内にも刻みが施されている。293は他と異なった形態を呈するものかもしれない。縄文は殆んどが非常に細かく、不明瞭なものが多いが、267・269～272・274・284・292がＬＲ単節、273・276～278・279～282・285・287・291はＲＬ単節であろう。286の縄文は不明。280・292の外面及び285の内面には炭化物が顕著に付着している。

○Ⅳ－F（295・296）

295は、注口の付け根に刺突が施された隆線が巡り、口縁部には刻みが施された隆線とそれに平行する沈線が巡っていたものと思われる。口縁部はわずかに外反していたようである。296は注口土器の把手であろう。把手の上位は団扇形の吊手状に突出し、下位は裾広がりとなる。把手の付け根に刺突から始まる刻みが施された隆線が認められる。口唇部は外曲し、口縁部に沈線が巡る。地文は縄文だが、磨滅のため不明瞭である。

○Ⅳ－G（294）

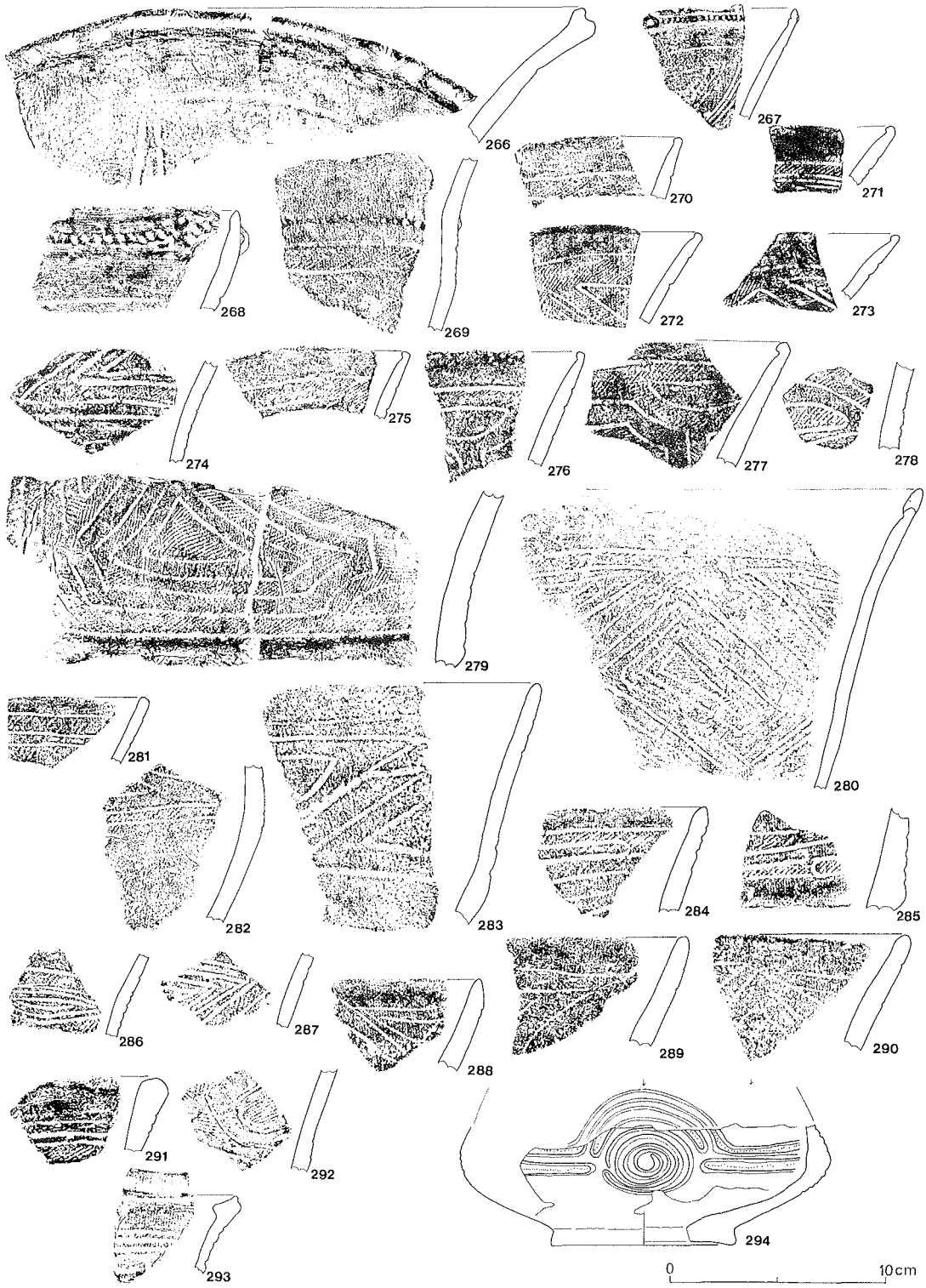
沈線による渦巻状の文様が描かれ、その上と両脇に平行沈線間に細かい列点が施された文様が描かれている。底部は高台状で、中央が焼成後穿孔されている。渦巻状の部分は若干膨らんでおり、図の右側の外形は中央の矢印の部位、左側の外形は右の矢印の部位で実測したものである。

○Ⅳ－H（297～307）

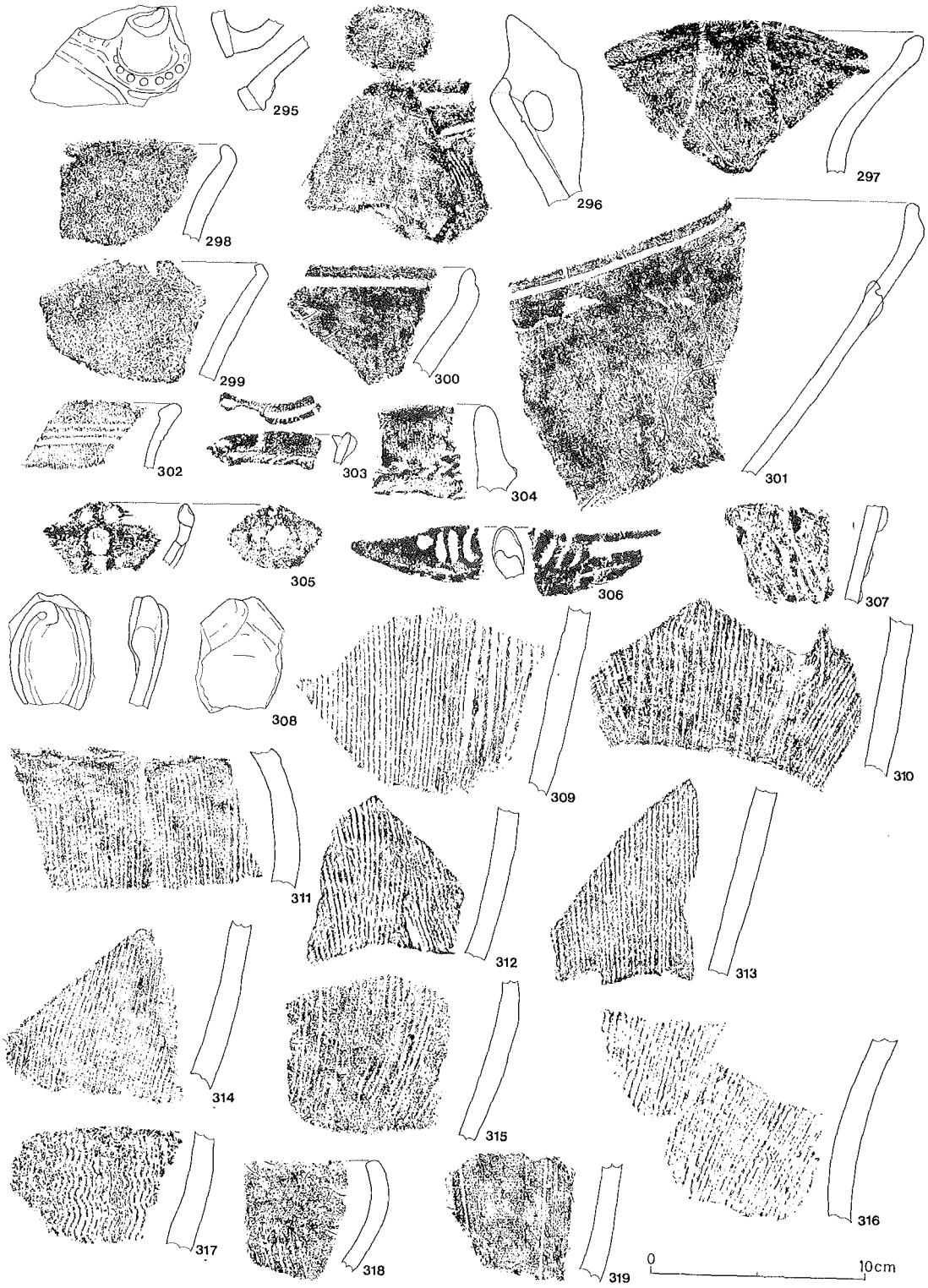
297～304は、胴部の文様形態が不明瞭な口縁部の破片である。

297～299は無文の口縁部で、口唇部が内曲している。300は口唇部外面に沈線が巡り、口唇部はわずかに内曲する。301は波状口縁で、口唇部外面に沈線が巡る。波状の頂部はわずかに内曲し、外面に刺突が施されていたようである。302は口唇部外面に３条の沈線が巡り、口唇部は内側に突出

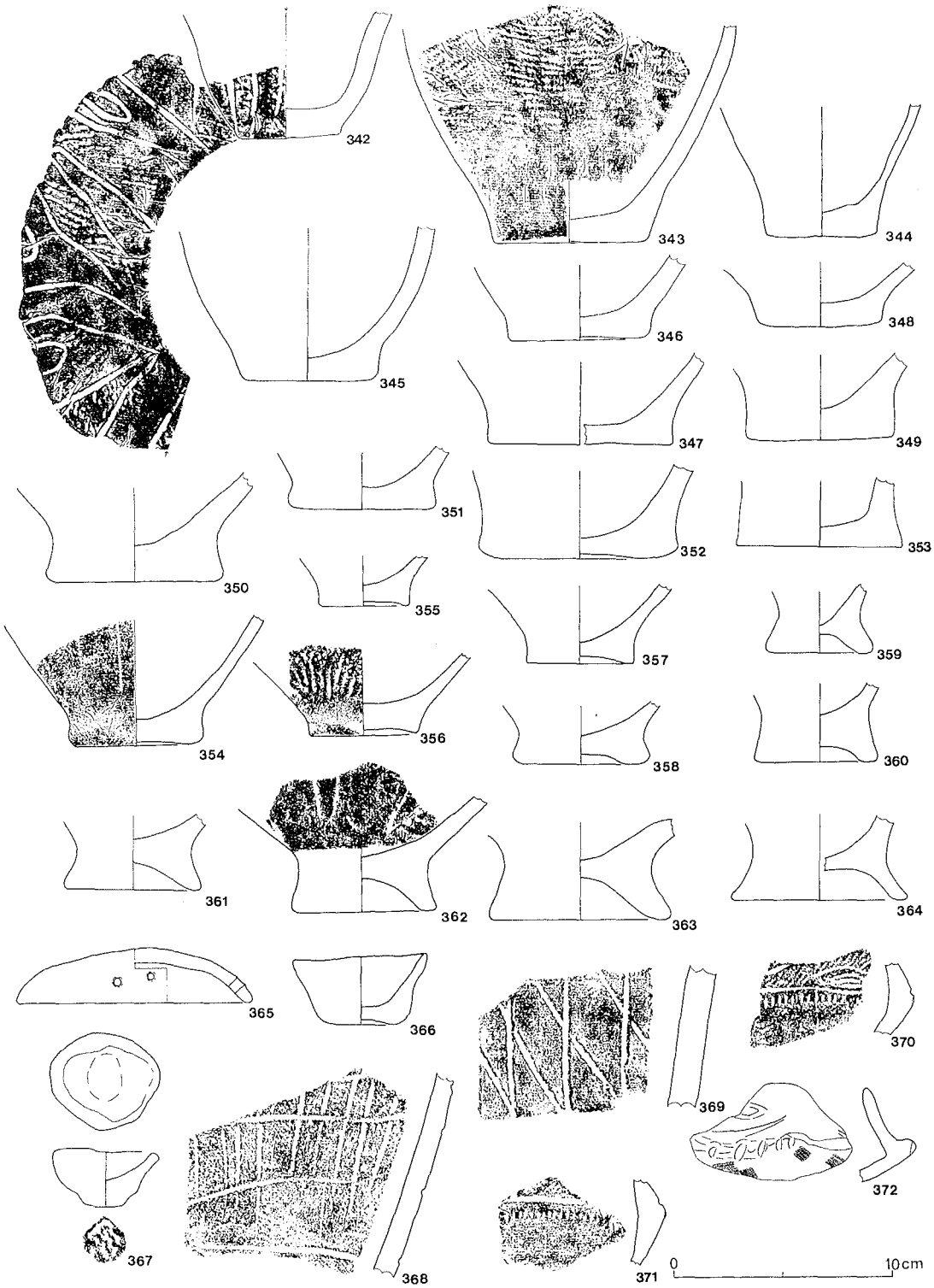
第46図　第１・３号川跡出土土器(16)



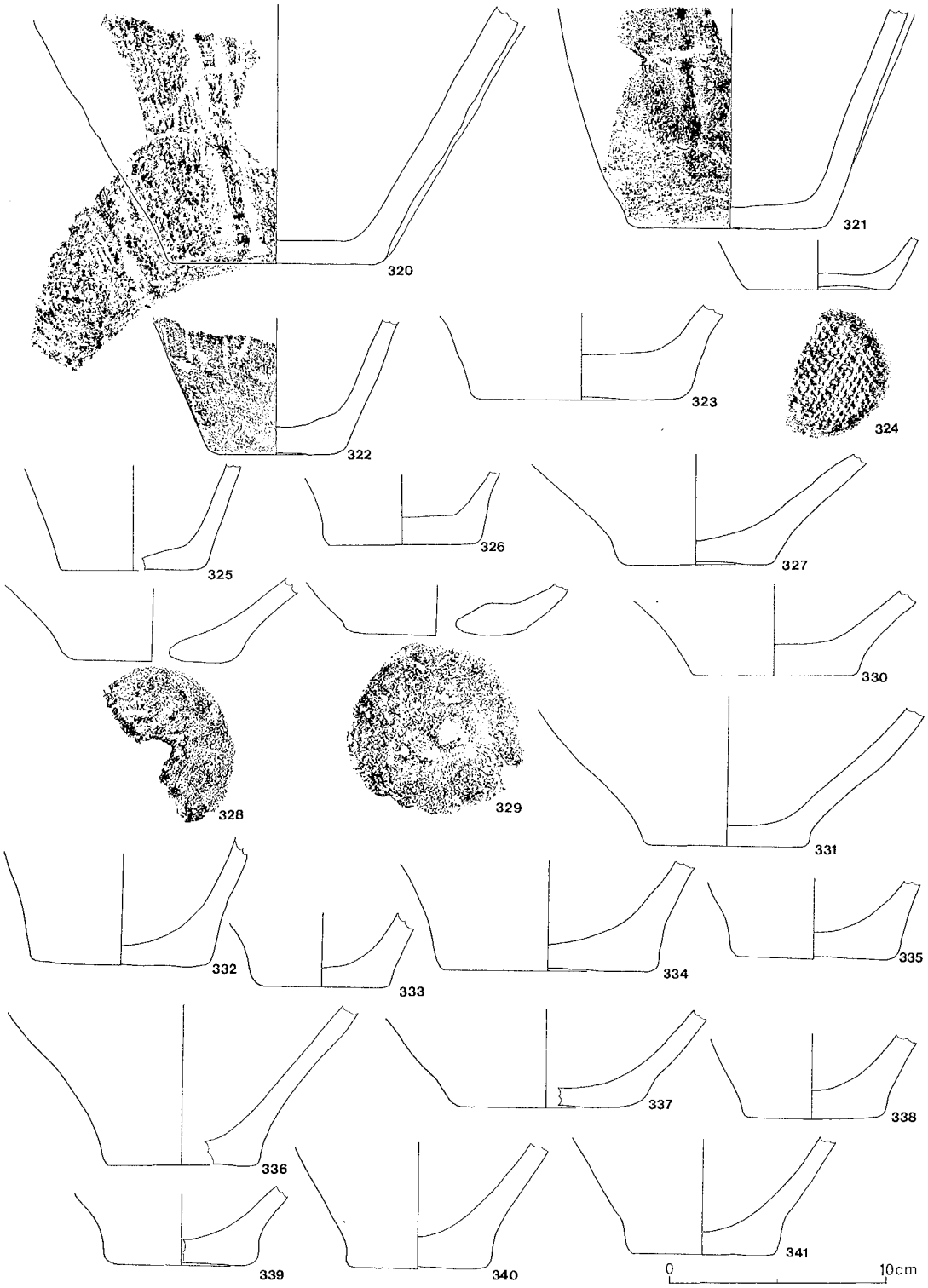
第47図　第１・３号川跡出土土器(17)



第48図　第１・３号川跡出土土器(18)



第49図　第１・３号川跡出土土器(19)



第50図　第１・３号川跡出土土器(20)

している。口唇頂部にも沈線と刺突が施されていた痕跡が認められる。303は小型土器の口縁部で、口唇部内面に突線が貼り付けられ、口唇部には沈線が巡り、刻みが施されている。口唇部外面には小豆大の貼付がある。文様帯最上位には斜位の刻みが巡る。302・303は293と類似したものかもしれない。304は直立する口縁部で、刻みのある隆起が巡る。

305は波状口縁の頂部である。口唇部はわずかに内曲する。波状の頂部には竹管状工具による刺突が外面に２つ内面に１つ施され、口唇部外面には沈線が巡る。刺突の下には穿孔が施されている。307は口唇部の装飾である。内外面とも沈線による刻みとその脇に竹管状工具による刺突が施される。口唇部外面には沈線が巡る。307は表面が磨滅しており不明瞭だが、地文は集合沈線のようである。小豆大の貼付が縦位に並んでいる。

308は称名寺式土器の波状口縁頂部にみられる貼付文で、Ⅲ－Ｆとすべきものである。刺突と沈線が施されている。内面頂部は、図の左側の部分が右側の部分にかぶさるようになっている。

○Ⅴ（311～319）

318は内彎する口縁部で、上位は無文である。319は細い数条一組の条線が間隔を置いて垂下している。

○Ⅵ（320～364）

320～322は加曽利Ｅ式であろう。320・321は隆線が垂下している。320は地文が施されているが、器面がボロボロなため縄文か条線か不明である。322は平行沈線が垂下していたようである。324の底面は網代痕が明瞭である。325・326は底部中央に焼成後両側からなされた穿孔がある。342は沈線と磨消縄文によるやや乱れた文様が描かれている。称名寺式であろう。縄文はＬＲ単節である。343は加曽利Ｅ式であろう。縄文はＬＲ単節である。354・362は平行沈線が垂下している。356の縄文はＲＬ単節である。356～358は明瞭に上げ底状になっており、359～364は高台状になっている。

○Ⅶ（365～372）

365は蓋である。断面弧状を呈し、２個一組の小孔が内側より穿たれている。おそらく１対になっていたものであろう。内面が丁寧に磨かれている。

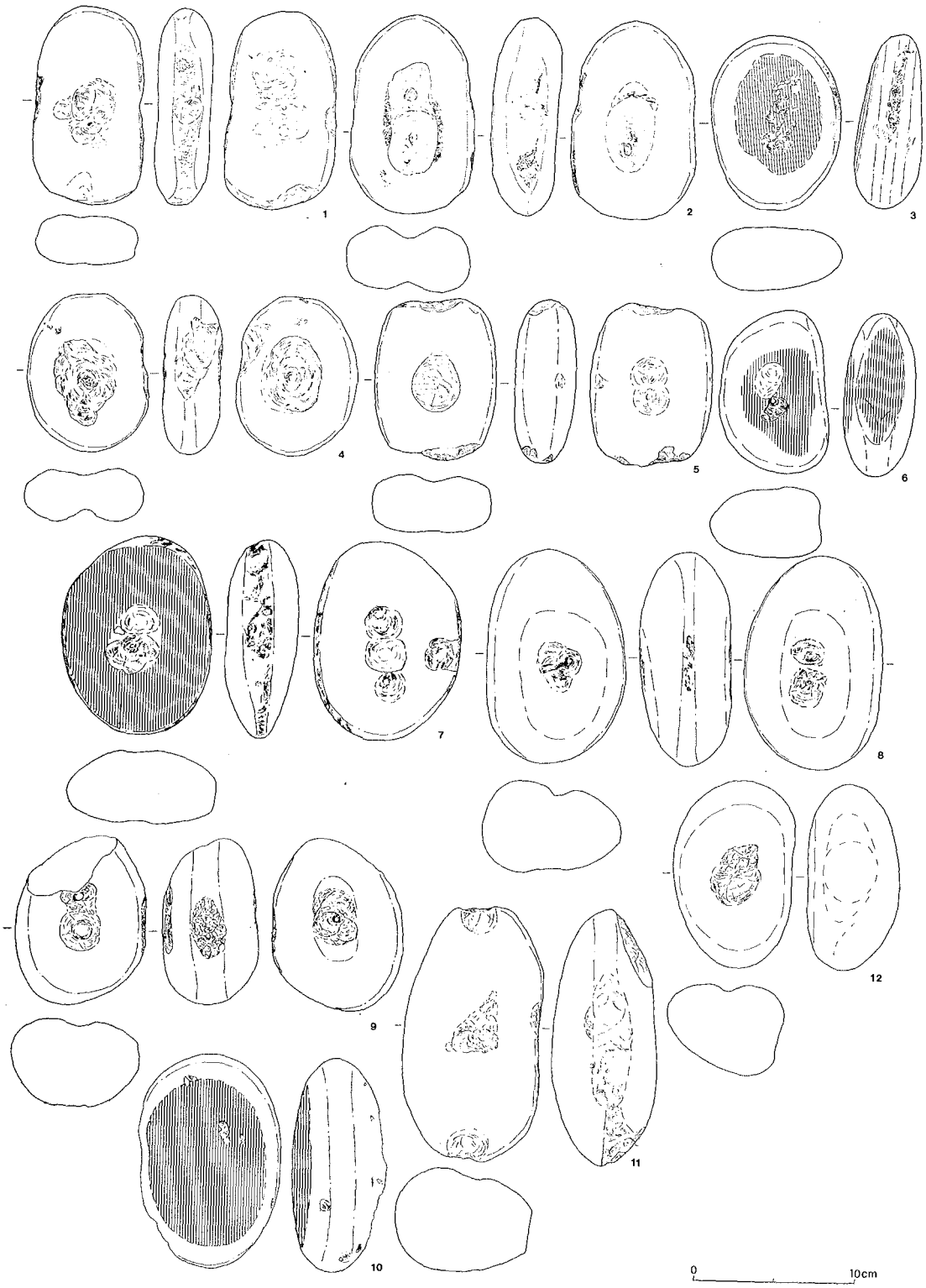
366・367は手捏土器である。367の底面には縄文の圧痕らしいものが認められる。

368～372は加曽利Ｂ式であろう。368は縦位の沈線が施された後に横位の沈線が施されている。369は格子目状の沈線が施されている。370～372は、内曲部の外面に刻みが施されており、372は一部が突出する。いずれも縄文は細かいＬＲ単節で、沈線による文様が描かれている。370と371は同一個体の可能性がある。372は浅鉢であろう。

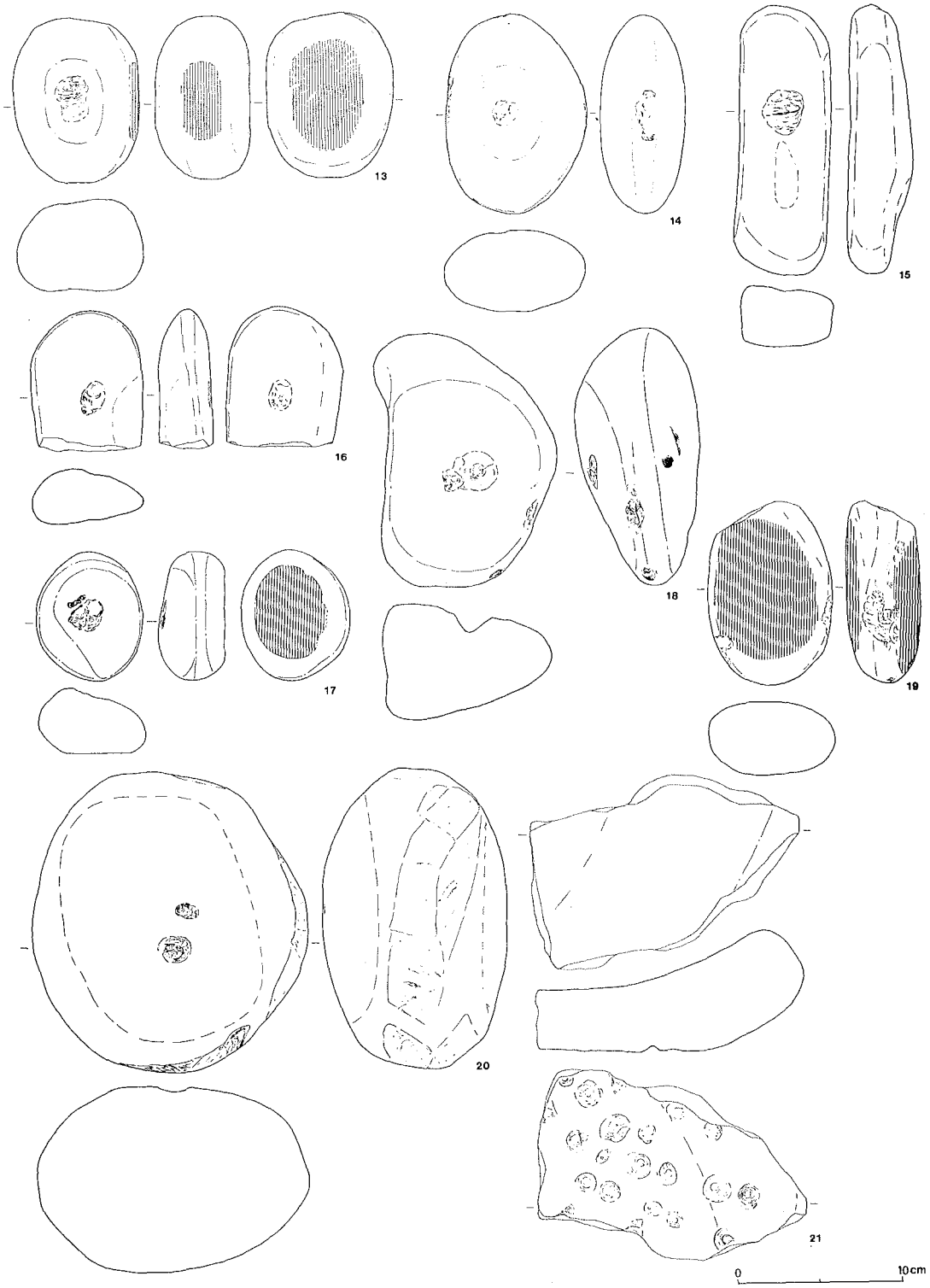
イ．出土石器（第51図～第54図）

表4　第1・3号川跡出土石器一覧

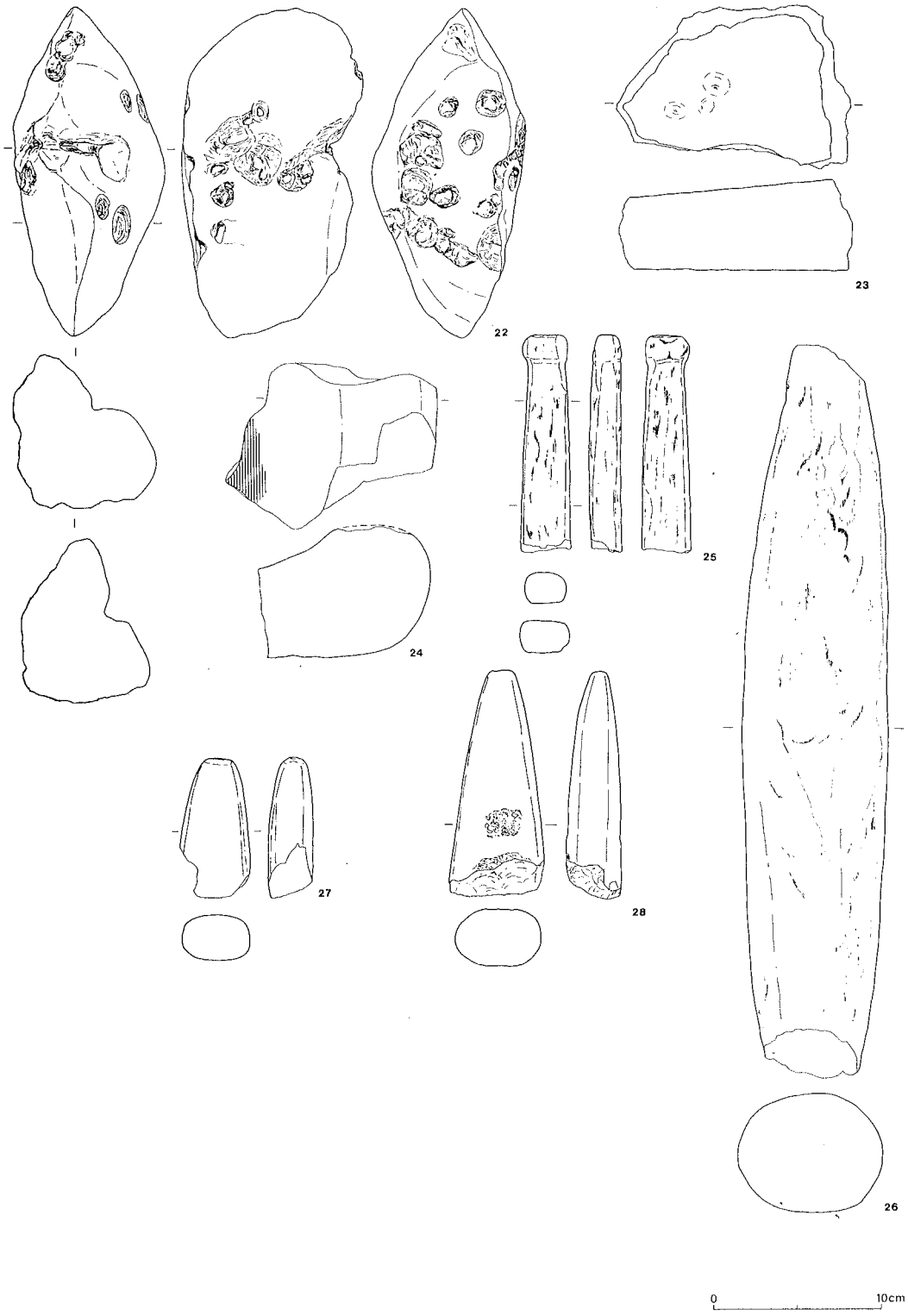
番号	器種	形態	長さcm	幅 cm	厚さcm	重さg	石質	備考
1	磨石	表裏凹有	12.4	6.9	3.4	402	輝石安山岩（スコリア質）	凹み浅く敲打痕状、側面にも敲打痕有
2	磨石	表裏凹有	12.4	7.8	4.1	438	輝石安山岩（スコリア質）	表の凹みは2つ連続、その周辺に敲打痕有
3	磨石		10.9	8.1	4.2	515	石英閃緑岩	表に敲打痕と磨痕
4	磨石	表裏凹有	9.9	7.5	3.5	272	花崗斑岩	凹みは比較的大きい
5	磨石	表裏凹有	10.1	5.6	3.7	465	角閃石安山岩	裏の凹みは浅く2つ連続、両端敲打調整
6	磨石	表凹有	10.2	6.7.	4.4	417	輝石安山岩	表・側面磨痕明瞭
7	磨石	表裏凹有	10.5	9.2	4.5	682	角閃石安山岩	凹みは表2裏3連続、表磨痕明瞭側面敲打痕
8	磨石	表裏凹有	13.4	8.6	5.7	840	角閃石安山岩	凹み表1裏2
9	磨石	表裏凹有	(10.6)	8.1	5.5	(595)	角閃石安山岩	凹み表2つ連続裏浅い側面敲打痕、一部欠損
10	磨石		13.4	(9.0)	6.0	(692)	角閃石安山岩	表磨痕明瞭、一部欠損
11	磨石	表裏凹有	16.0	8.5	6.4	1138	輝石安山岩	両端打ち欠かれている
12	磨石	表裏凹有	10.3	8.2	5.7	691	輝石安山岩	裏凹みは小さく浅い
13	磨石	表凹有	10.2	7.7	5.7	695	花崗閃緑岩	表凹み2つ連続、裏・側面磨痕明瞭
14	磨石	表凹有	12.3	8.6	5.0	720	角閃石安山岩	側面敲打痕
15	磨石	表凹有	16.7	5.6	3.9	608	細粒砂岩	直方体状を呈する。
16	磨石	表裏凹有	(8.7)	6.9	3.3	(295)	輝石安山岩	約1／2欠損
17	磨石	表凹有	8.0	5.6	4.1	305	角閃石安山岩	裏特に平坦で磨痕明瞭
18	磨石	表裏凹有	15.6	10.4	7.5	1530	細粒砂岩	裏凹みは浅い
19	磨石		(11.4)	7.6	4.5	(572)	角閃石安山岩	表裏磨痕明瞭、側面に敲打痕有
20	凹石		18.5	16.9	11.4	2710	輝石安山岩（スコリア質）	凹みは小さい、側面は削られている。
21	石皿	円形？	—	(16.4)	7.2	(1228)	輝石安山岩	裏は蜂の巣状の凹み
22	凹石	蜂の巣状	19.8	8.9	10.8	968	輝石安山岩（スコリア質）	かなり扁平で断面三角形状、一部が抉れ、平坦な裏が蜂の巣状
23	石皿		—	—	(4.3~5.5)	(1269)	角閃石安山岩	裏に浅い凹み(敲打痕)
24	石皿	円形？	—	(12.5)	(9.0)	(1047)	輝石安山岩	内面底磨痕明瞭
25	石棒		(13.1)	(3.0)	(1.9)	(146)	点紋石墨片岩	頭部は基部の両脇を抉るように磨き、頸部に沈線が刻まれている。
26	石棒		(44.0)	(8.7)	(7.1)	(4260)	緑泥片岩	両端欠損、中膨みの形態、図の下位が、表裏ともやや平坦
27	磨製石斧	定角式	(8.4)	(4.2)	(2.8)	(175)	ハンレイ岩	刃部を含む下半欠損、よく磨かれ光沢帯びる



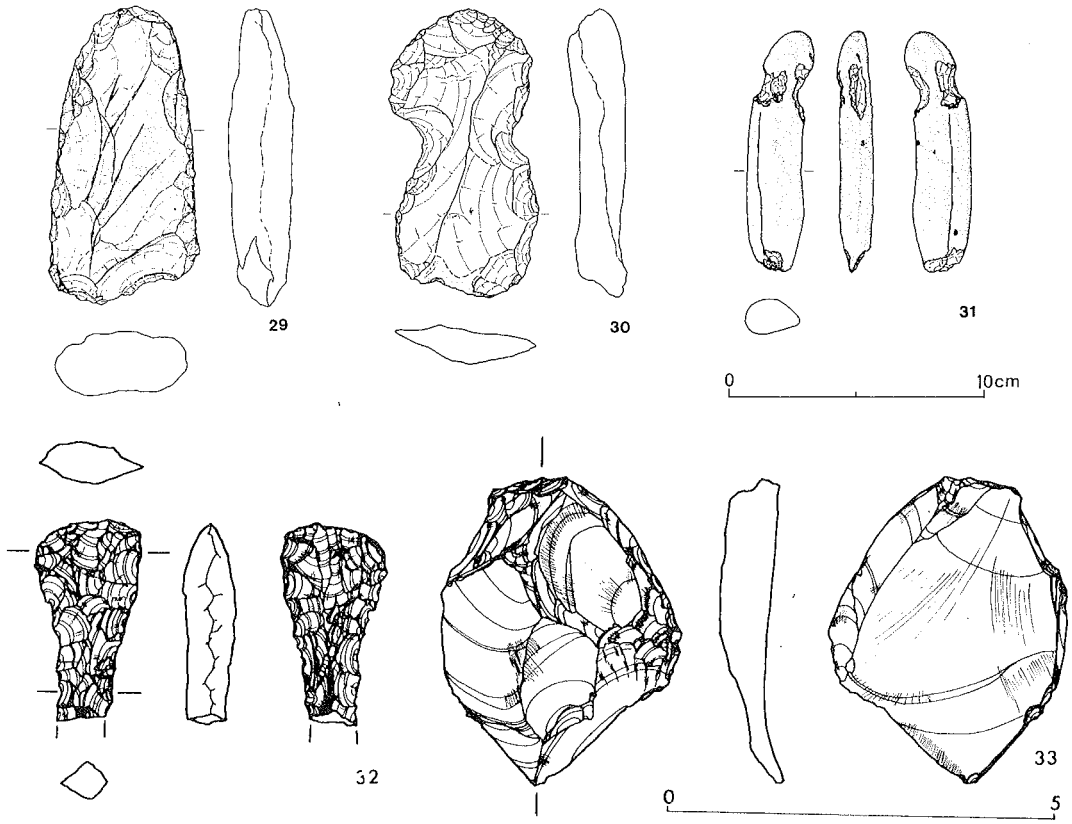
第51図　第１・３号川跡出土石器(1)



第52図　第１・３号川跡出土石器(2)



第53図　第１・３号川跡出土石器(3)



第54図　第１・３号川跡出土石器(4)

（P71より）

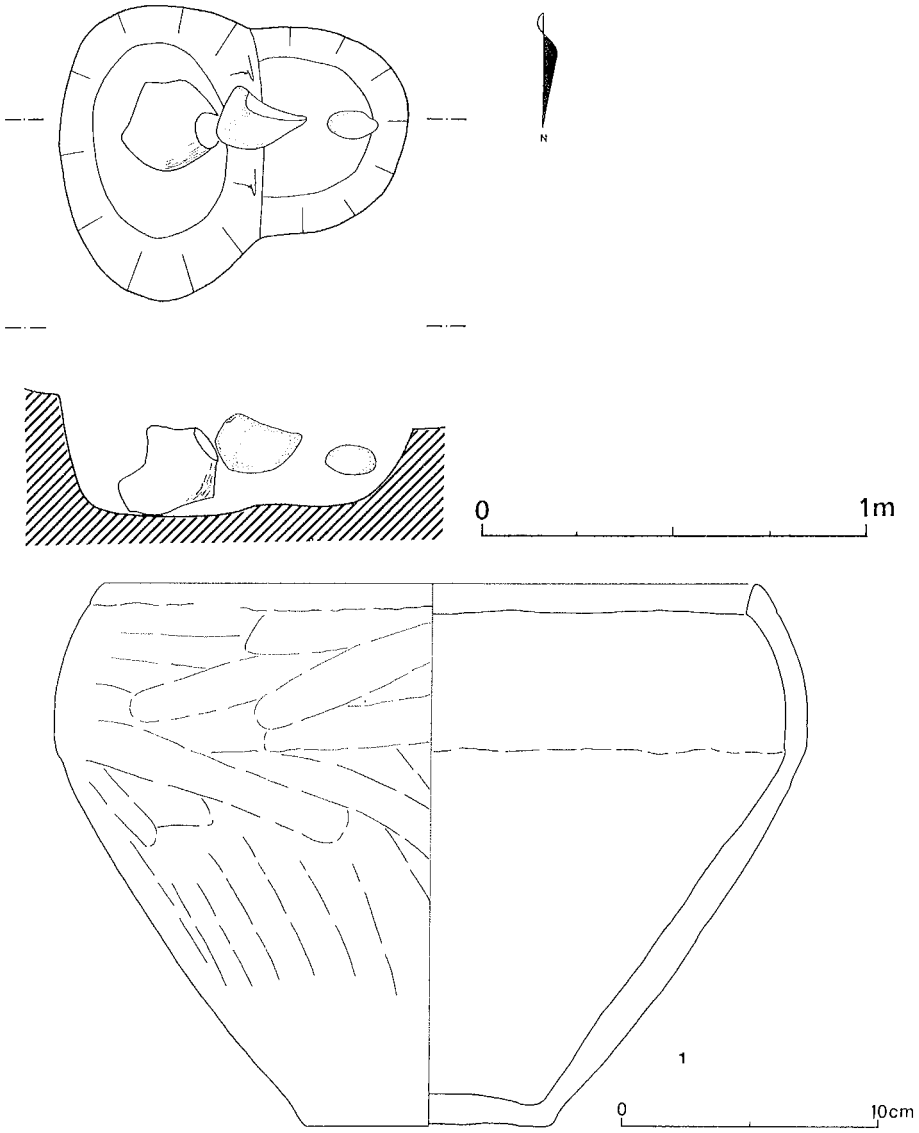
番号	器　種	形　態	長さcm	幅　cm	厚さcm	重さg	石　　質	備　　考
28	磨製石斧	乳棒状	(13.6)	(5.6)	(3.5)	(372)	緑泥片岩	刃部欠損、表裏とも下位中央に敲打痕
29	打製石斧	短冊形	11.9	5.9	2.5	236	ホルンフェルス	表面はやや風化
30	打製石斧	分銅形	11.4	5.5	2.2	115	砂質頁岩	捩れたような形態呈す
31	石棒状石製品		9.6	2.3	1.3	47.4	緑泥片岩	先端側辺に抉入を施す
32	石　錐		(2.6)	1.4	0.7	(2.5)	レッド・チャート	
33	剥　片		4.0	3.1	0.7	8.8	黒耀石	

（　）内は欠損による残存値

磨石では、３・６・７・10・13・17・19はよく磨られており、３・７・10は光沢を帯びている。２点の石棒の表面もよく磨かれており、25の裏面は特に平坦になっている。27は各面の面取りが非常に丁寧になされている。28は刃部欠損後叩石として再利用されたものと思われる。

(4) 第１号土坑出土遺物（第55図１）

無文の大型の浅鉢である。外面の口縁部は横位に、胴部は縦位に削られている。内面は横位に丁寧に磨かれている。内面の口縁部と胴部の境は、輪積み痕が明瞭である。口唇部は内面が平坦にナデられてやや尖っている。胴部の底部の境あたりの内面は、わずかに外曲して弱い稜を有している。



第55図　第１号土坑遺物出土状態及び出土土器

(5) 調査区南西隅出土遺物（第56図）

調査区の南西隅は南西へ向かってわずかに落ち込んでおり、遺物が少量出土した。あるいは第3号川跡の続きかもしれない。

ア．出土土器（第54図）

○Ⅱ－B（1）

口縁部に隆線が巡り、隆線により円形状の文様が描かれたものである。縄文はＲＬ単節で、口縁部では主文様の向って右側が横転されている。

○Ⅱ－C（2）

口縁部に隆線が巡り、円形状の主文様が描かれたものであろう。主文様の上で隆線は山状に突出している。縄文はＬＲ単節である。

○Ⅱ－D（3～5）

3は、磨消縄文によりＨ字状の文様が描かれたものである。縄文はＲＬ単節。

4・5は、円形状の主文様が描かれたものであろう。4は口縁部に隆線が巡り、縄文はＬＲ単節。主文様の上で、隆線上に縄文が横転されている。5は波状口縁で、頂部が内側に肥厚している。縄文はＲＬ単節で、口縁部付近で横転されている。

○Ⅱ－G（6）

口唇部外面に列点が巡る波状口縁の頂部。縄文はＲＬ単節で、列点と縄文の間に沈線が巡る。

○Ⅲ－B（7）

刻みが施された隆線が垂下している。

○Ⅲ－C（10・11）

10・11ともに平行沈線間に列点が施されている。

○Ⅲ－D（8・9）

8は口唇部が内曲している。縄文は細かいＬＲ単節であろう。9は口縁部の把手である。口唇部は内曲し、内面は口縁部を隆線で縁どったようになる。把手の内面に刺突が施されている。縄文は細かいＬＲ単節である。

○Ⅳ－B（12）

3条1組の沈線による縦位の曲線的な文様などが描かれたものであろう。縄文は不明瞭だがＬＲ単節と思われる。

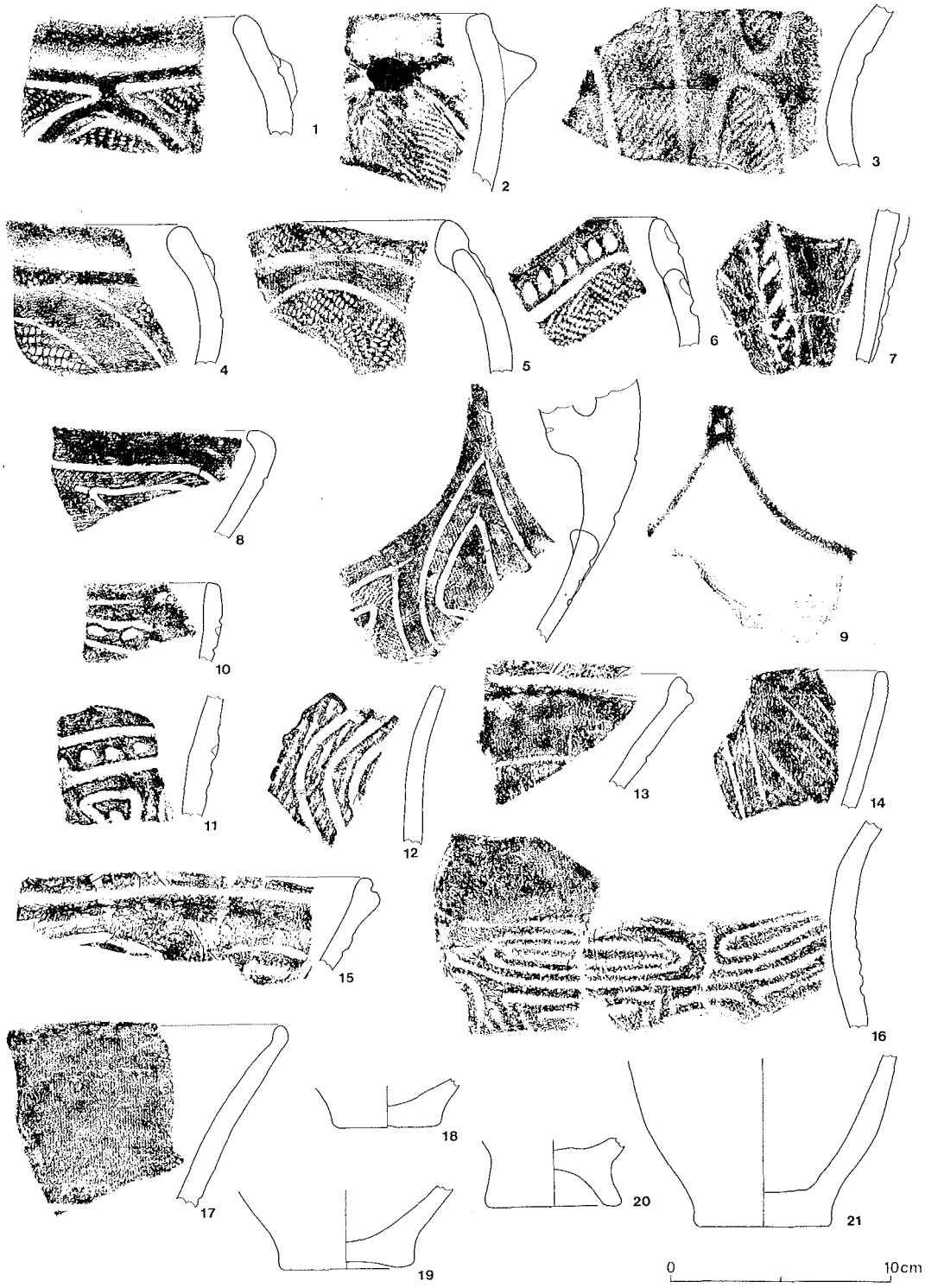
○Ⅳ－C（13～16）

13・15は口唇部外面に沈線が巡っている。胴部には比較的簡単な文様が描かれたものであろう。14は口唇部外面に沈線が巡り、縦・斜めの集合沈線などが描かれている。16は、口縁部は無文で、胴部には集合沈線による複雑な文様が描かれている。13の外面には炭化物が顕著に付着している。

○Ⅳ－D（17）

口唇部が内曲した口縁部の破片である。幾可学的な文様が描かれたものであろう。

○Ⅵ（18～21）



第56図　調査区南西隅出土土器

19は上げ底状、20は高台状となっている。

(6) 第１号溝状遺構流入遺物

後述するように第１号溝状遺構は、古墳時代に構築された水稲耕作に関連した水路跡と考えられる。第１号川跡や第３号川跡と切り合っているため、多数の縄文時代の遺物が流入していたが、ほとんどが小破片であった。

ア．流入土器（第57図・第58図）

○Ⅱ－Ａ（１・２）

１は口縁部が横位にナデられており、２は口縁部の横位のナデが浅い沈線状となっている。１・２ともに波状口縁と思われ、縄文はＲＬ単節で、口縁部で横転されている。

○Ⅱ－Ｂ（３・４）

３・４は同一個体と思われる。上位の文様形態は不明だが、１条の隆線が垂下している。縄文はＬＲ単節である。

○Ⅱ－Ｃ（５～10）

５は、隆線と研磨された無文部が垂下している。縄文はＬＲ単節である。

６～10は、隆線と研磨された無文部により、円形状又は渦巻状の文様が描かれたものであろう。６～８は波状口縁で、６・８は波状の頂部が肥厚している。６は口縁部に区画文が作られている。縄文は、６・10がＬＲ単節、８・９はＲＬ単節、７は磨滅により不明瞭だが、ＬＲ単節であろう。

○Ⅱ－Ｄ（11～20）

11～13は、沈線と研磨された無文部が垂下している。縄文は、11・12がＲＬ単節、13はＬＲ単節である。11の外面には炭化物が顕著に付着している。13は称名寺式かもしれない。

14～18は、沈線が深い波状などを描くものであろう。14・15は内彎する口縁部で、14は１条の沈線が巡る。縄文はいずれもＲＬ単節で、14・15は口縁部付近で横転されている。14の外面には炭化物が顕著に付着している。

19は沈線と研磨された無文部が垂下しているが、文様の全体的な形態は不明である。縄文はＲＬ単節。20は円形状の文様が描かれたものであろう。口縁部にＲＬ単節の縄文が横転されている。

○Ⅱ－Ｅ（21・22）

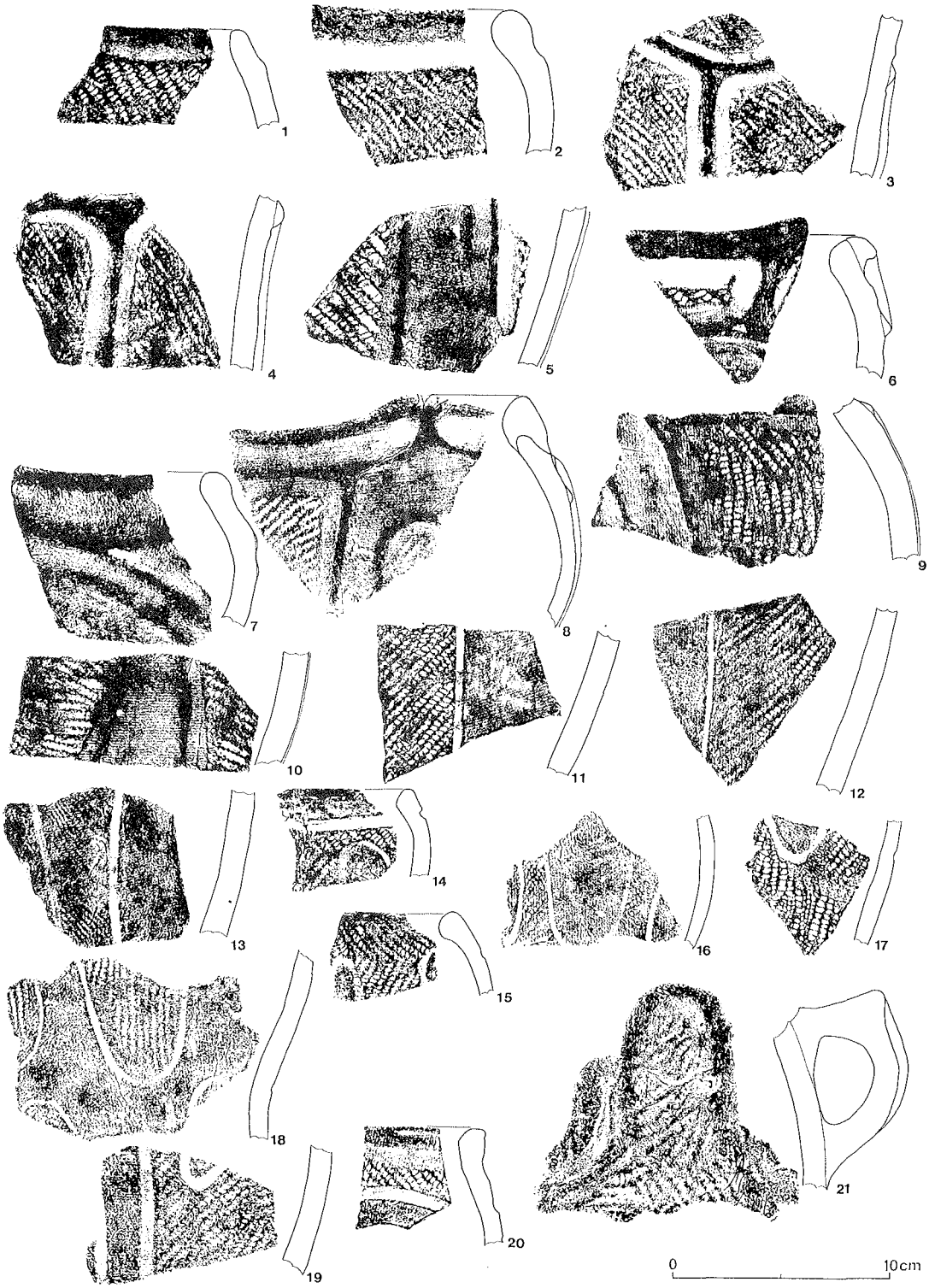
21はＲＬ単節の縄文が施されており、隆線による円形状の文様が描かれていたようである。22の地文は条線で、耳の回りを隆線が囲み、口縁部と胴部の境を隆線が巡っていたようである。22の耳の内側には酸化鉄が厚く付着している。

○Ⅲ－Ｂ（23・24）

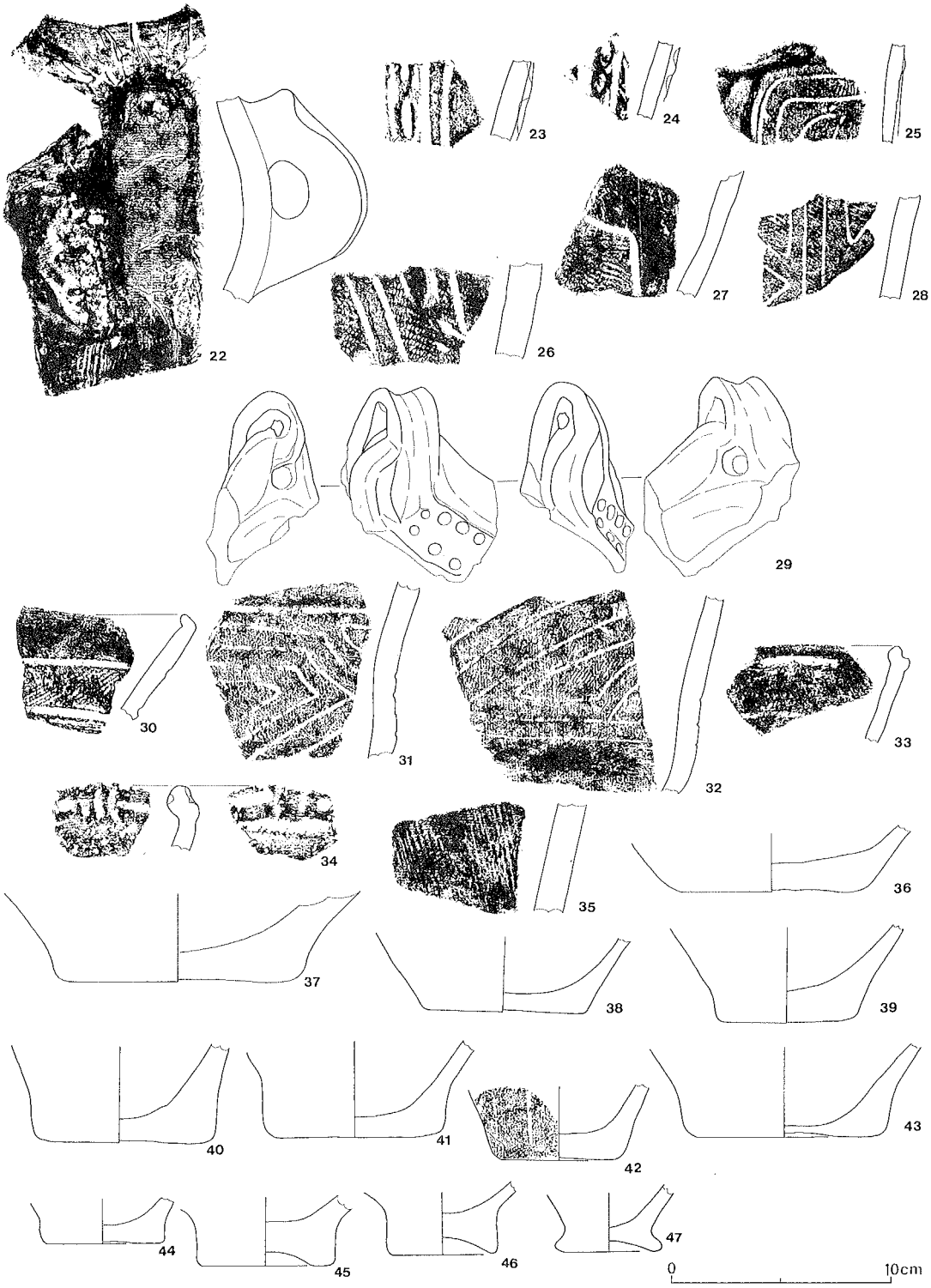
23・24は鎖状の隆線と沈線が垂下している。縄文はともに不明瞭である。

○Ⅲ－Ｄ（25～28）

25は、隆線により、磨消縄文の文様が区画されている。縄文は、25・28は不明瞭だが、25がＲＬ単節、26～28はＬＲ単節であろう。



第57図　第１号溝状遺構流入土器(1)



第58図　第１号溝状遺構流入土器(2)

○Ⅲ—F（29）

波状口縁の頂部に耳がつけられたものである。耳はやや捩れたような形態を呈する。内面に大きな刺突が一つ施され、外面には耳に連続して刺突が２列に施されている。

○Ⅳ—D（30～33）

30の口唇部は内側に屈曲している。33は、わずかに内曲する口唇部の外面に沈線が巡っている。縄文は、30はＬＲ単節、32はＲＬ単節、31・33は不明である。

○Ⅳ—H（34）

内曲する口唇部の装飾文様である。外面には３条の沈線による刻みが施され、両脇に沈線が巡っている。内面は中央が縦位に少し窪み、やはり両脇に沈線が巡っている。

○Ⅴ（35）

○Ⅵ（37～47）

42は縦位の沈線が垂下している。43の底はかなり薄くなっており、やや上げ底状である。45～47は高台状になっている。

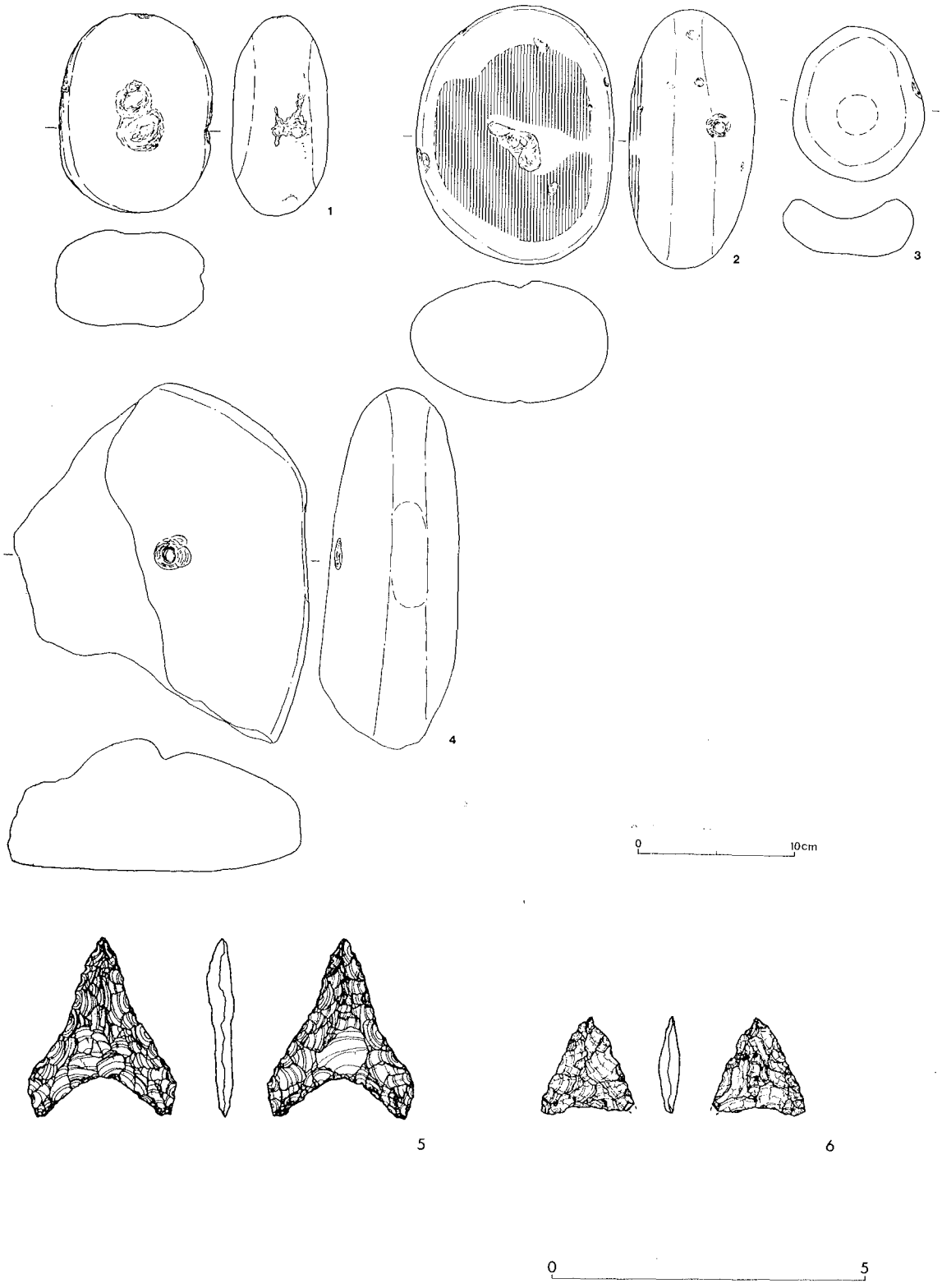
イ．流入石器（第59図・第60図）

表５　第１号溝状遺溝流入石器一覧

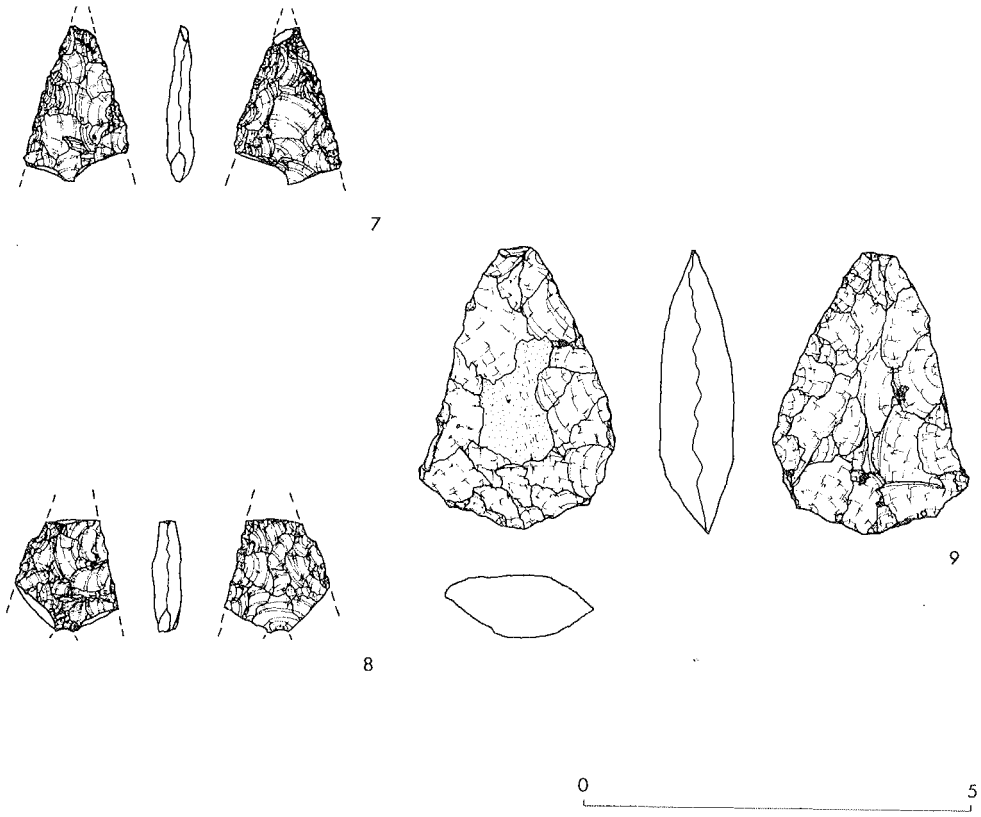
番号	器種	形態	長さcm	幅 cm	厚さcm	重さg	石質	備考
1	磨石	表裏凹有	10.8	8.1	5.2	630	角閃石安山岩	凹み表裏とも２つ連続 側面・図の頂部敲打痕
2	磨石	表凹有	14.0	10.5	5.7	1410	角閃石安山岩	表磨痕明瞭
3	凹石	器状	8.4	7.0	3.1	199	輝石安山岩	正面擂鉢状に窪む、側面の一部・裏面は平坦
4	凹石		(19.5)	(15.6)	(7.2)	(2540)	輝石安山岩	
5	石鏃	凹基無茎	2.9	2.3	0.4	1.7	チャート	上半は少しすぼまる
6	石鏃	平基無茎	1.6	(1.5)	0.4	(0.7)	砂質頁岩	正三角形状を呈する
7	石鏃		(2.1)	(1.4)	0.4	(1.0)	チャート	
8	石鏃	凹基無茎	(1.4)	(1.4)	0.4	(0.8)	チャート	
9	尖頭器		3.7	2.6	0.9	8.6	砂質頁岩	鏃形尖頭器

（　）内は欠損による残存値

３は凹石としたが、内面で磨るために利用されたものであろう。９はいわゆる鏃形尖頭器の一種であろう。



第59図　第１号溝状遺構流入石器(1)



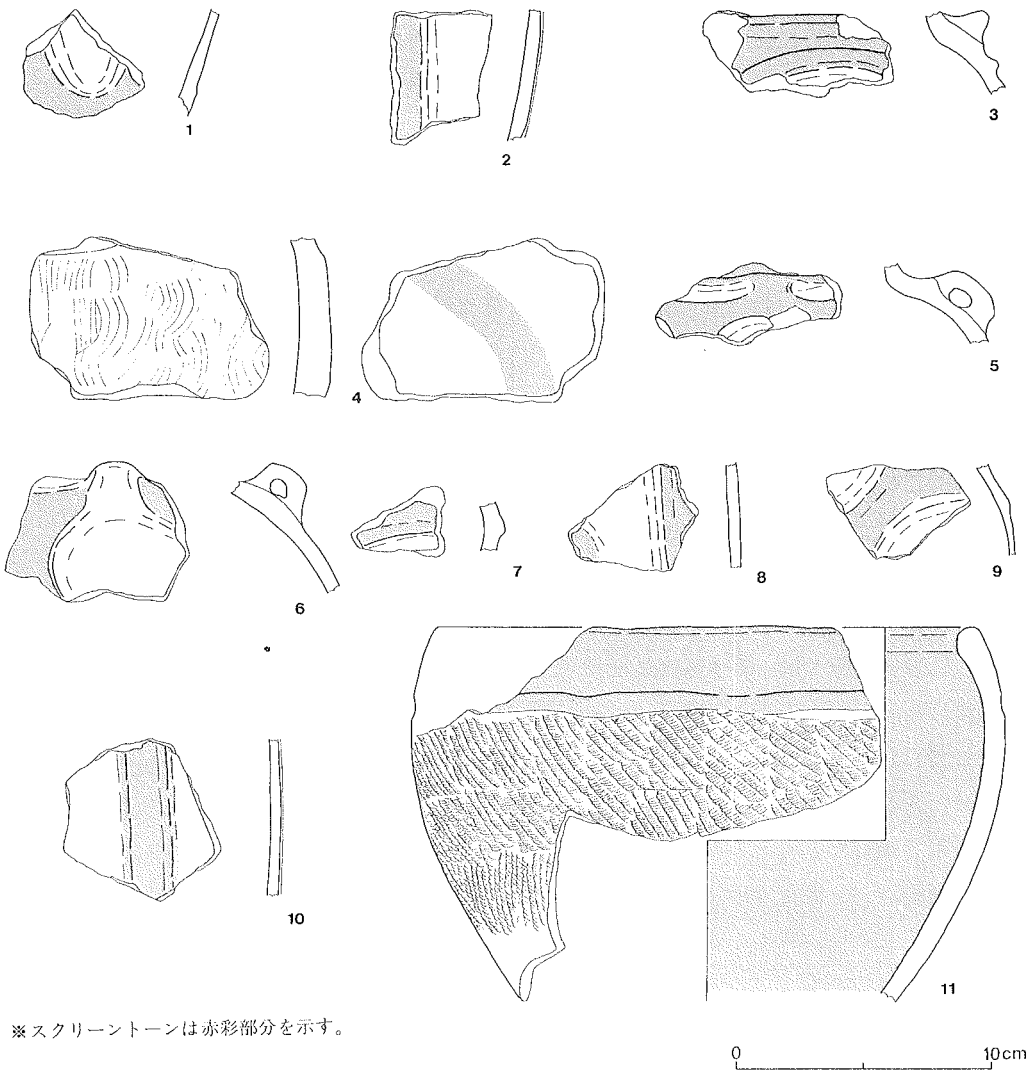
第60図　第１号溝状遺構流入石器(2)

(7)　赤彩土器（第61図）

１・２は第１号川跡より出土した。いずれも微隆起線文により文様が描かれているが、１はU字状、２は直線的に垂下している。微隆起線文により赤色顔料が施された部分が区画されている。１の内面全面にも赤色顔料が施されている。

３・４・８は第３号川跡より出土した。３は小型壺形土器の小破片であろう。口縁部にかなり太く高い断面山形の突帯が巡り、その下に沈線と隆線による弧状の文様がみられる。内面は全面、外面は弧状の隆線より下位を除き赤彩が施されている。４はいわゆる条線文土器である。おそらく口縁部はナデにより無文となっているものであろう。外面の条線は磨滅によりあまり明瞭ではないが、蛇行して垂下している。赤色顔料は、外面には施されていないが、内面には幅1.6～1.8cmの弧状の帯が描かれている。土器の色調は、表面・胎土とも黒色を呈する。８は１・２に類似しており、文様を描く微隆起線により、赤色顔料が施された部分が区画されている。内面にも赤色顔料が施されていたようである。

５～７・９～11は第１・３号川跡から出土した。５は小型壺形土器の耳部分であろう。耳の両脇の横位に巡ると思われる窪んだ部分と耳の下の弧を描く窪んだ部分を除き、赤色顔料が施されている。耳の外面は土器の表面ごと剥離しているが、顔料が施されていたものと思われる。内面には全



第61図　赤彩土器

面に赤色顔料が施されている。６も小型壺形土器の耳部分であろう。文様を描く微隆起線により赤色顔料が施された部分が区画されている。内面には顔料は施されていない。７は、土器自体も磨滅しているため、顔料も剝がれておりあまり明瞭ではないが、文様を描く隆線により赤色顔料が施された部分が区画されていたようである。内面は全面に赤色顔料が施されている。９・10は１・２・８に類似し、文様を描く微隆起線により赤色顔料が施された部分が区画されている。９の内面には顔料は施されていないが、10は内面全面に施されている。11は、無文の口縁部と縄文が沈線により区画されたものである。縄文はＬ無節で、縦位に施されている。外面は沈線を含む口縁部に赤色顔料が施されており、縄文の上位、特に条に顔料が少しかかっている。内面は全面に顔料が施されている。なお11は、４破片が接合したもので、１片を除き表面が磨滅しており、縄文はあまり明瞭で

はない。特に下位はほとんど不明である。

出土した赤彩土器は、ほとんどが胎土は精選され焼成は良好であるが、4のみ胎土は砂を多く含みあまり精選されていない。いずれも加曽利EⅢ式・EⅣ式土器と考えられる。

(8) 木製品

○漆器　杓子（木匙）（第62図1～4）

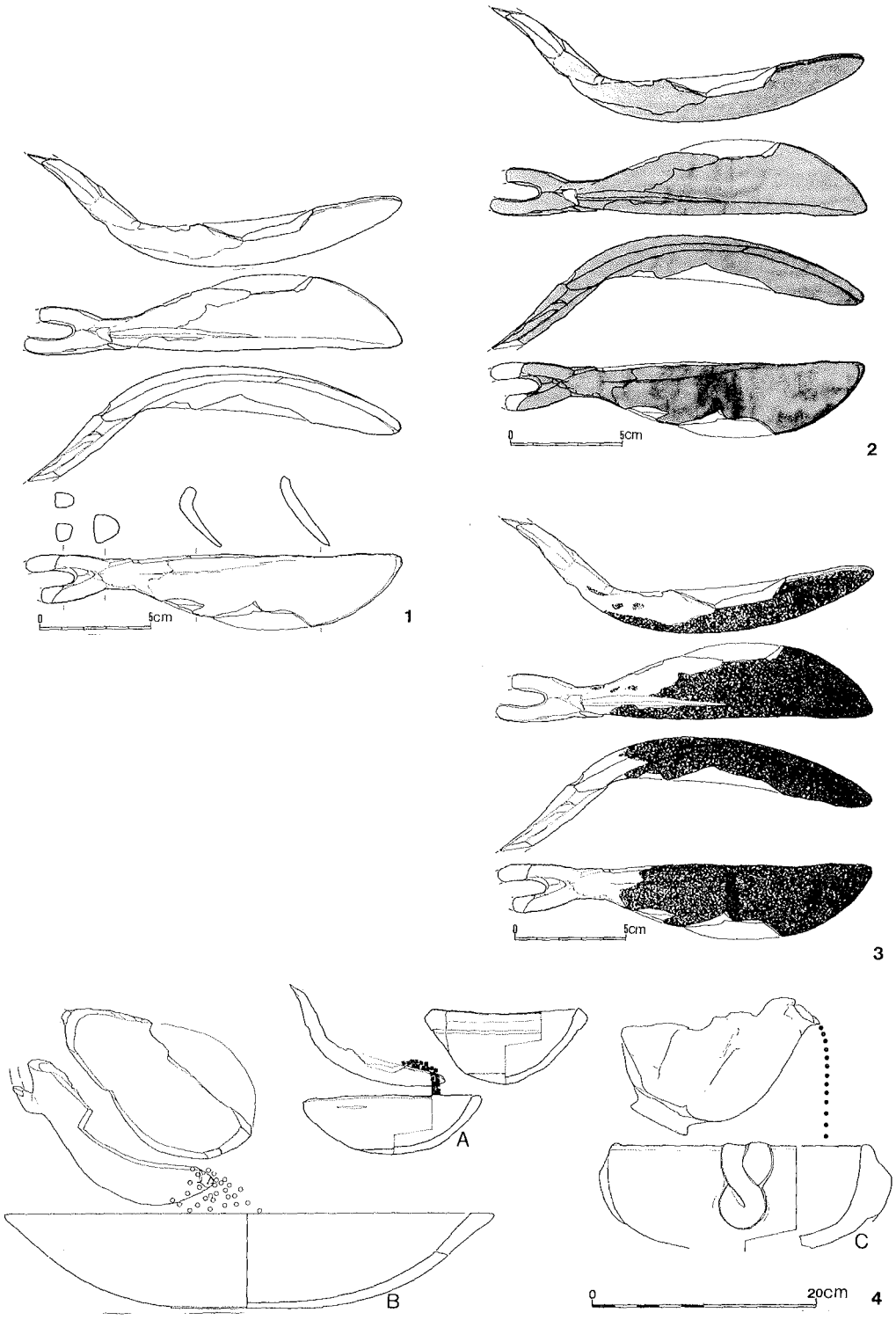
第3号川跡より出土し、縄文時代中期末葉～後期前葉のものと考えられるが、詳しい時期は明確ではない。この漆器は、近年明らかになってきた縄文時代の漆器群のなかに、ひとつの器種を明確に位置づけることになった。寿能泥炭層遺跡出土の漆器の報告によって、縄文時代の漆器は、籃胎のそれを別にして7器種に分類された（註1）。木胎漆器は、日常生活に用いられたもので、鉢・浅鉢・皿・壺・椀・注ぎ具・杓子が存在したものである。それぞれの器種には形態差がある。たとえば杓子のなかには、大形の掬い具と小形の匙が想定されていた。本遺跡出土の木匙はほぼ完形に近いもので、縄文時代の木匙を代表するものとなろう。

〈法量と形態〉　木匙は現存長16.8cmで、手にもつ柄の部分（把手）が6cm＋、掬うための身の部分（匙身）が11.3cmであった。柄の太さは1.2cmほどで、断面形は角の円くなった三角形にちかい。匙身の部分では、最大幅3.2cm＋で、最大厚は0.6cmである。把手の端はやや薄手に作られ、幅広になっており、中央部分はくりぬかれている。この作業は、匙の内側の方＝掬う面の方から主として行われていた。末端を欠損しているものの、湾曲の具合からみて、ぐるりとまわって把手の部分に穴が設けられていたものであろう。この穴は、紐を通して持ち歩いたり吊り下げたりするための用をなしたと考えられる。

匙身の部分は、一側縁はほぼ真直なつくりであるが、他の周縁は円味をもたせたものである。後者の縁辺は、しだいに薄くなるように仕上げられている。直な方の縁部は、ほんの少し剝がれてはいるものの、厚味をもっていたことがわかる。この側辺は、把手の部分も直線的につくられており、本来の形も現存のそれとはほとんど変らないものと想定される。すなわちこのスプーンは、主として用いる部分が、先端から円味をもった一側にかけてであると、あらかじめ考えられての作であったらしい。さらに匙身のくぼみと把手の関係からは、この木匙は左手に持って使われたものといえよう。寿能泥炭層遺跡の木匙は、縁辺部まで残存して形態のわかるものがないが、匙身の湾曲は左右ともに差がないつくりである。また菜畑遺跡出土の弥生時代前期の木匙（註2）も、平面形は左右対称であった。本遺跡出土の木匙は散蓮華に似た形態で、同様な用法で使われたものであろう。

〈塗漆〉　この木匙には赤漆が塗られている。その塗りはきわめて丁寧で、欠損部以外に漆の剝落はみられず、全面にしかも均質に塗られている（第62図2）。寿能泥炭層遺跡出土の漆器の重ね塗り観察では、杓子や椀などの汁器の塗りが、縄文時代後期中葉以降の遺物には改良されていたことが分った。本遺跡出土の木匙は、こうした技術改良の時期に先がけるものであるが、しっかりとした仕上がりとなっている。縄文時代の木製容器類＝食器・調理具の塗漆は、実用的な意味が強かったもので、他の遺物の赤色塗彩とは別に、機能上の必要から施されたといえる。

〈付着炭化物・用途〉　木匙には部分的に炭化物が付着している。それは、寿能泥炭層遺跡出土



第62図　縄文時代の木製品(1)

の漆器椀の内面についていた炭化物と非常に似かよったものである。表面はザラザラとしており、ちょうどカレーライスを食べた際にスプーンについたカレールウの様な感じである。第62図３のように炭化物が付着しているのは、匙身の部分であり、把手には全く付着していない。しかも、掬う面の方に炭化物の付着は著しく、裏面の把手に近い部分の方には、炭化物は部分的にしか残存していない。

この様な付着炭化物と木匙の形態は、縄文時代の漆器の用途を明らかにしてくれる。これまでに発見されている漆器は、多くは調理にかかわる道具であった。福井県鳥浜貝塚出土の浅鉢・皿の類（註３）は、●海の幸、山の幸を盛る　●獣肉、山菜類を調理する　●堅果類の粉をこねる、根菜類を磨ったものを扱う　といった、作業鉢・調理具として用いられたものである。そして寿能泥炭層遺跡出土の漆器からは、注ぎ具・杓子が加わったことから、●酒、水、獣油等を掬う、移す　●粉、豆類などの小粒を掬う、移す　などの具体的な縄文時代の調理作業を想定することが可能となった（第62図４Ｂ・Ｃ）。

そして、今回報告した木匙は、縄文時代の食器の組み合せを明らかにしたものである。第62図４Ａは、木椀と木匙の組み合せの図である。この組み合せ＝木椀の内面炭化物と木匙の付着炭化物は、食事の様式を物語るものであり、シチュー様の料理を掬う姿が浮かびあがってくる。縄文時代の匙には、埼玉県内でも舟山遺跡で土製品の発見（註４）がある。土製の匙は、近年日本列島全域にわたって分布していたことが明らかになった（註５、６）。岩手県小田遺跡では15点といったまとまった出土があった。木製品の場合、通常の遺跡では残らないことが、その出土量を少なくしている原因であろう。

註１　山田昌久他　『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書――人工遺物・総括編――』　埼玉県教育委員会　1984
註２　中島直幸他　『菜畑遺跡』　唐津市文化財調査報告第５集　唐津市教育委員会　1982
註３　山田昌久　『鳥浜貝塚』　縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査１　福井県教育委員会　1979
註４　吉川國男他　『舟山遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査報告書第９集　埼玉県教育委員会　1980
註５　小林康男　「縄文・弥生の匙形土製品」『信濃』第３巻第７号　1981
註６　藤村東男　「岩手県九年橋遺跡出土の匙形土器について」『萌木』第７号　1982
註７　中村良幸　『小田遺跡発掘調査』　大迫町教育委員会　1979

（山田昌久）

○丸木舟状木製品（第63図）

丸木舟の端部と思われるが明瞭ではない。残存長70.6cm、残存幅29.7cm、最大厚7.7cm、最大高12.0cm。丸太の内側を浅く凹形に削って成形されている。図の下位ほど底が薄くなる傾向があり、厚さ約3cm、深さ約9cmであったものと推定される。背面は木の表面を簡単に削って平坦にしたようで、重心がやや図の左側へ傾く傾向がある。端部は丸く成形されている。樹種はコナラである。

(9)　魚骨（写真図版25―37）

マグロ、学名 Thunnus thynnus（dinne）の椎体である。径約3.0cm、長さ2.7cm。保存処理にはBinder 18を塗布した。深谷市でマグロの骨が出土したことは注目されてよかろう。

第63図　縄文時代の木製品(2)

V　古墳時代の遺構と出土遺物

1．古墳時代の遺構（第62図）

○第1号溝状遺構

長さ約70mにわたって確認された溝状遺構である。調査区の南西隅から北東隅にかけて、かなり蛇行しながら調査区を斜めに縦断しており、特に調査区中央では大きく東に迂回している。幅1.5～2.5m、深さ60～70cmほどで、覆土は黒色土、暗灰色土を基本とし、特に泥炭質の黒色土は中央上層から中層にかけて堆積していた。底幅は0.3～0.5mほどで、基本的に両壁にテラス状の平坦部を一段有するようであるが、カーブする部分では、外側のテラス状平坦部が2段以上となり内側は無段となる傾向が認められる。また、土層の状態を観察すると、比較的短期間のうちに埋まってから再構築するという過程を何度が繰り返したように見受けられる。

出土遺物は、土器は、台付甕の脚部の他はいわゆるハケ目を有する微小な土師器破片が数点とごく少なく、いずれも上層～中層より出土した。しかし、木製鋤や、木製鋤の把手を含む木片等は数多く出土し、稲穂も出土している。

なお、この第1号溝状遺構は、調査区の北半において縄文時代の第3号川跡と第1・3号川跡を破壊して構築されている。このため第1号溝状遺構の覆土中からも川跡から流入したと思われる多数の縄文土器・石器・クルミ等が出土した。また、切り合いの部分においては覆土の判別が困難であった場合が多く、第62図では推定復元を行っているが、溝状遺構の底部の形態は、溝状遺構が川跡より深かったためもあって、比較的明瞭に確認できた。

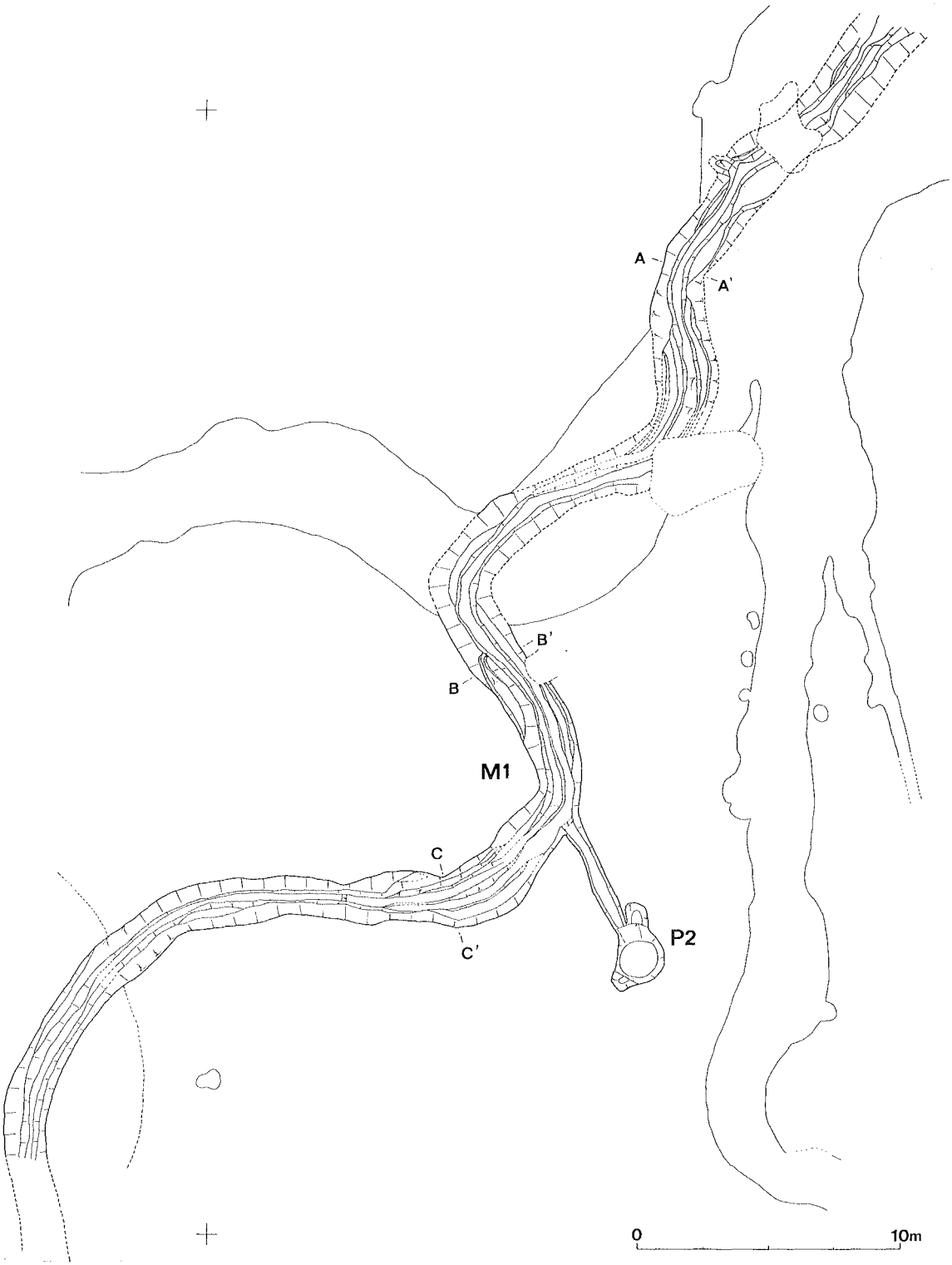
○第2号土坑

第1号溝状遺構と第1号川跡の間に位置し、2.4m×1.8mの不整長円形の土坑に、小さく浅い擂鉢形の土坑が北側と南側に付随したような平面プランを呈する。深さは約60cmである。付随する小土坑は北側は深さ約30cm、南側は約20cmである。覆土は泥炭質の黒色土を基本とする。

幅0.5～0.8m、深さ約15cm、長さ約4.5mの小さな溝状遺構により、第1号溝状遺構とつながっており、第1号溝状遺構に付属する遺構と考えられる。

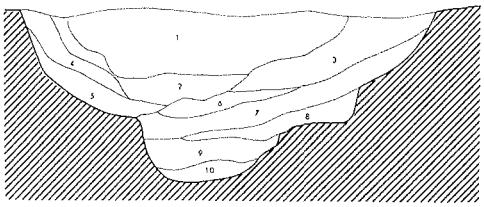
2．古墳時代の出土遺物

古墳時代の遺物は、全て第1号溝状遺構より出土したものである。土器は、図示した台付甕の脚部・甕の底部の他は、甕の口縁部やハケ目を有する甕の胴部の小破片が数点出土したのみである。これらはいずれも覆土上～中層より出土した。少量しか出土しなかった土器に対し、加工品を含む木片等は、主に覆土中～下層より大量に出土した。



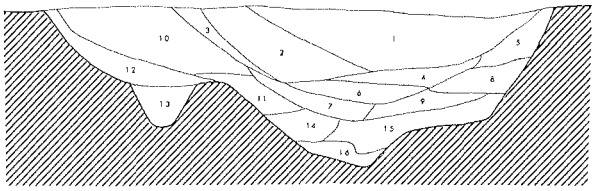
第64図　古墳時代の遺構

A　　A'



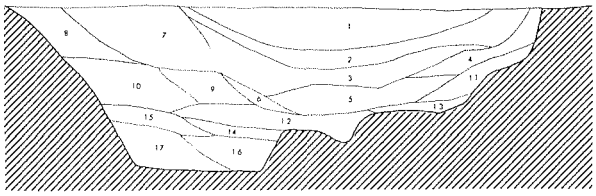
1．黒色土。泥炭質
2．黒灰色土。
3．暗灰色土。
4．灰色土。砂を含む。炭化物を少量含む。
5．暗灰色土。砂を少量、炭化物を少量含む。
6．灰色土。砂を特に多く、炭化物を含む。
7．暗灰色土。砂を多く含む。炭化物を含む。
8．暗灰色土。砂を多量に含む。
9．黒色土。砂を多く含む。粘性強く、しまり悪い。
10．砂層。青灰色がかる。

B　　B'



1．黒色土。泥炭質。
2．黒色土。1より明るい。
3．黒色土。砂をわずかに含む。
4．黒色土。砂を含む。炭化物を含む。
5．黒灰色土。砂を少量含む。炭化物を含む。粘性強い。
6．黒灰色土。砂をわずかに含む。炭化物を含む。粘性強く、しまり悪い。
7．暗灰色土。8より明るい。砂を多く含む。
8．暗灰色土。9より明るい。砂を多く含む。白色粘土粒子、炭化物を含む。粘性強い。
9．暗灰色土。砂を含む。
10．暗灰色土。7より明るい。砂をわずかに含む。粘性強い。
11．暗灰色土。9より明るく、10より暗い。砂をわずかに含む。粘性強い。
12．黒灰色土。砂を少量含む。炭化物をわずかに含む。粘性強い。
13．黒灰色土。12より暗い。砂を少量、青灰白色粘土・粒子を含む、炭化物をわずかに含む、粘性強い。
14．暗灰色土。砂を多く含む。
15．黒灰色土。砂を多量に含む。
16．青灰色砂層。

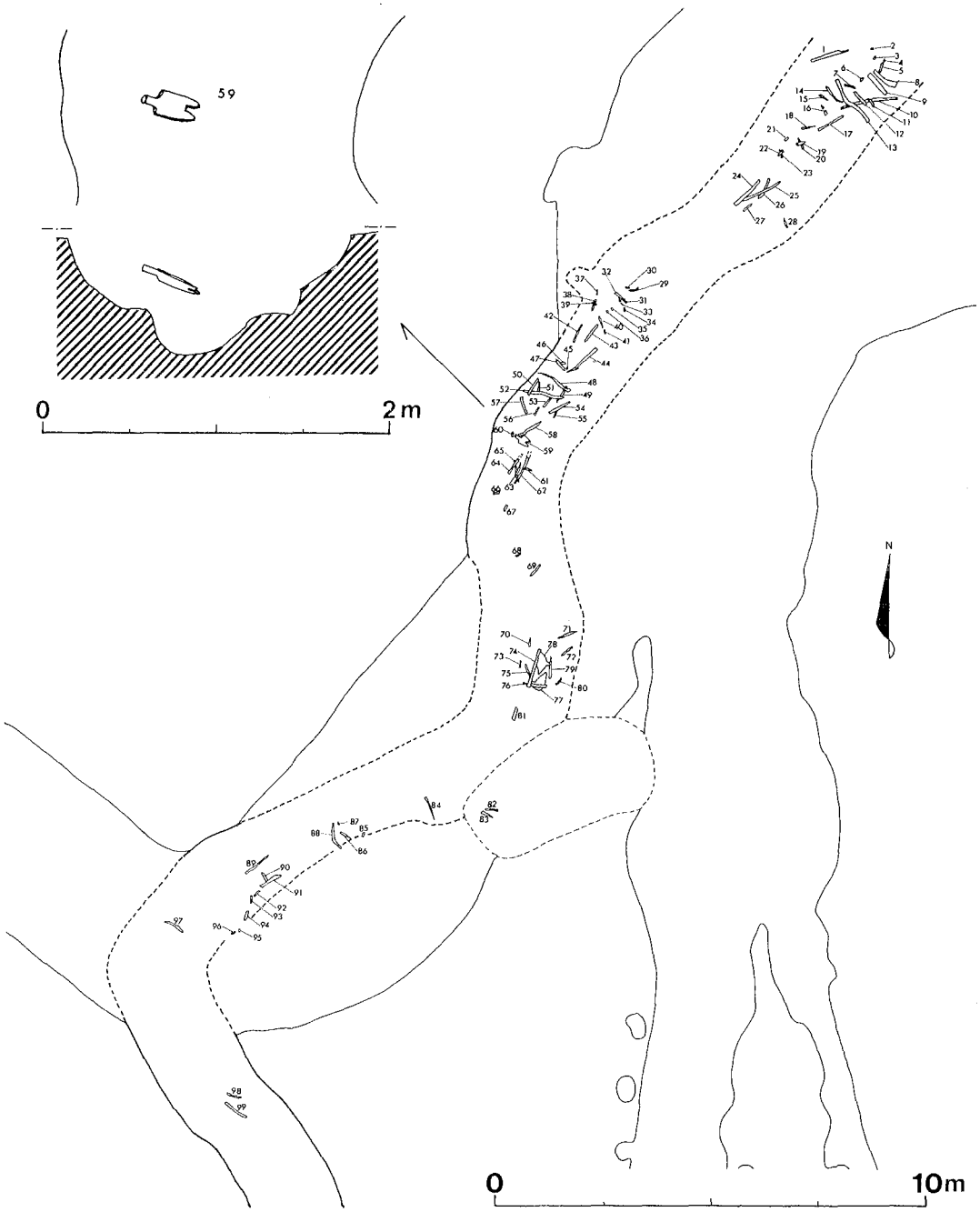
C　　C'



1．黒色土。泥炭質。
2．黒色土。1より明るい。砂を多量に含む。
3．黒色土。2より暗く、1より明るい。砂をわずかに含む。
4．黒灰色土。砂を含む。白色粘土粒子をわずかに含む。
5．黒灰色土。4より明るい。砂を多く、白色粘土粒子をわずかに含む。
6．砂層。砂の粒子は微細。
7．黒灰色土。砂を含む。粘性強く、しまり悪い。
8．黒灰色土。7より明るい。砂を含む。
9．暗灰色土。砂を多く含む。
10．暗灰色土。9より明るい。砂を含む。白色粘土粒子を多く含む。
11．暗灰色土。砂を多く含む。白色粘土粒子を多量に含む。粘性強い。
12．暗灰色土。9、10より暗い。砂を多く含む。炭化物を含む。粘性強い。
13．砂層。炭化物を含む。
14．砂層。砂の粒子は粗い。
15．暗灰色土。10より明るい。砂を少量含む。炭化物を含む。粘性強い。
16．暗灰色土。15より明るい。砂を多量に含む。炭化物を多く含む。
17．暗灰色土。砂を多く含む。

0　　1m

第65図　古墳時代の遺構土層断面



第66図　第１号溝状遺構木片等出土状態

ア．出土土器（第67図１・２）

１は土師器台付甕の脚部である。残存高7.5cm、底径5.5cm。外面には縦位のハケ整形の後、ヘラ状工具により削られている。端部外面はナデられている。内面は横位に丁寧にナデられている。胎土細、砂を含み、焼成良好、橙色を呈する。

２は土師器甕の底部である。球形に張った胴部を有したものと思われる。残存高5.7cm、推定底径7.5cm。外面は斜めのヘラ削りが認められ、底部は比較的薄く、上げ底になっている。胎土細、砂を含み、焼成良好、淡褐色を呈する。

イ．木製品（第67図３～５・第68図６）

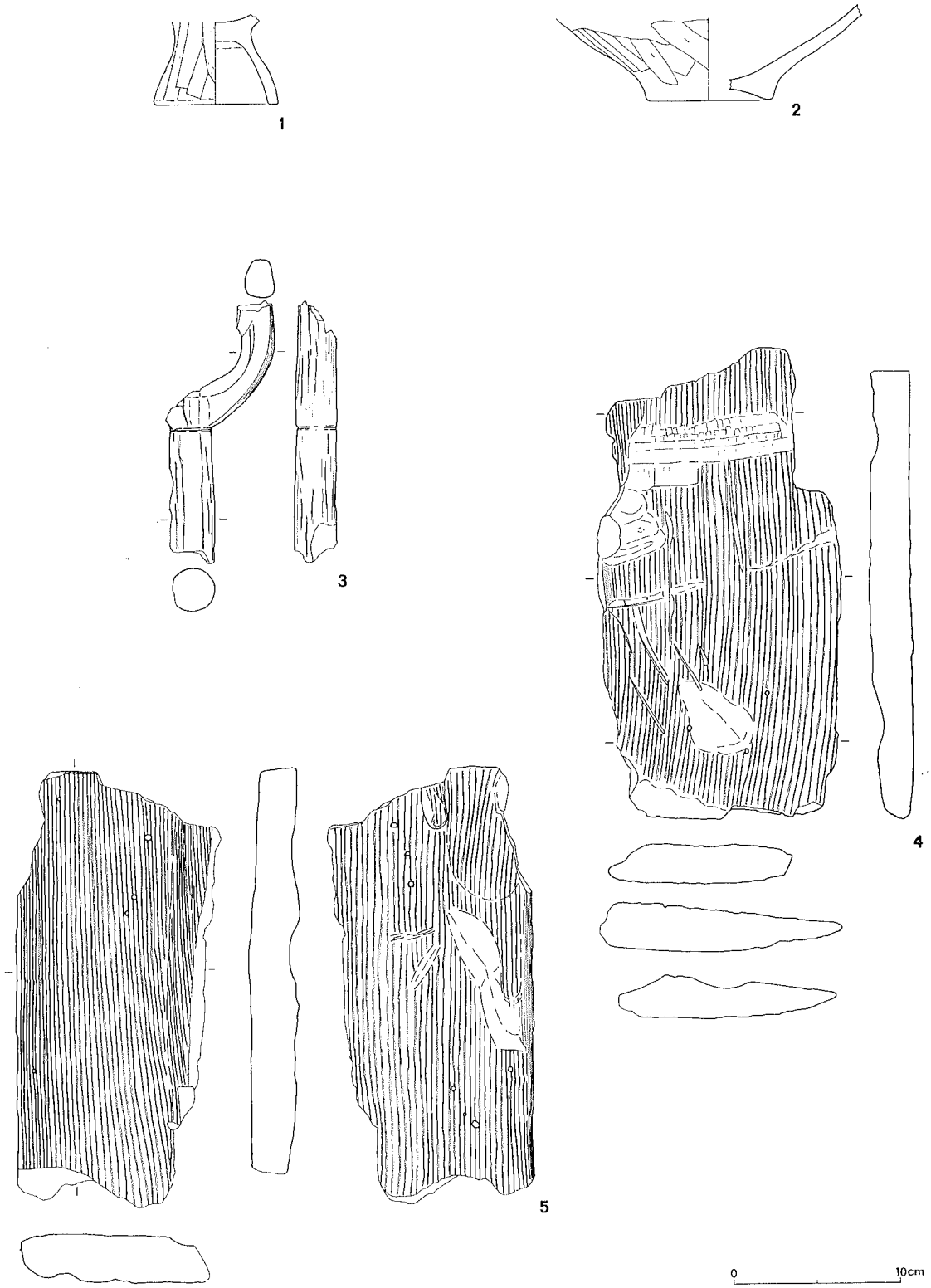
３は木製鋤の把手である。把手部分の半分以上を欠損している。第68図６とはかなり隔たった、第１号溝状遺構の南端近くより出土した。残存長15.8cm、柄幅2.8cm、厚さ2.2～2.5cm。把手部は、表・裏・側面とも平坦に加工されているが、正面は狭く、裏面はやや広く、断面は台形状を呈する。頸部に浅いＶ字状の沈線が刻まれており、柄の断面は円形を呈する。板目材を加工して製作されたものと思われる。樹種はコナラである。

４は用途不明の木製品である。長さ28.6cm、残存幅14.7cm、厚さ1.7～2.5cm。正面は加工痕が多く認められ、裏面は横位に丸みを有し、横位の断面は三日月状を呈する。正面上位には鑿状工具によるものと思われる浅く広い溝が削られており、下位中央にも削られた跡がある。下位の向って左側には稜を作り、その周辺に刃傷状の痕跡（釘が抜けた痕跡とも思われる）が認められる。正方形に近い釘穴と思われる穴も４ヶ所認められる。下端は磨耗しているが、使用のためと思われる。なお、左端を欠損している。この木製品は、着柄して土起こしなどの用途に用いられたとも考えられよう。柾目材が用いられている。樹種はハルニレである。

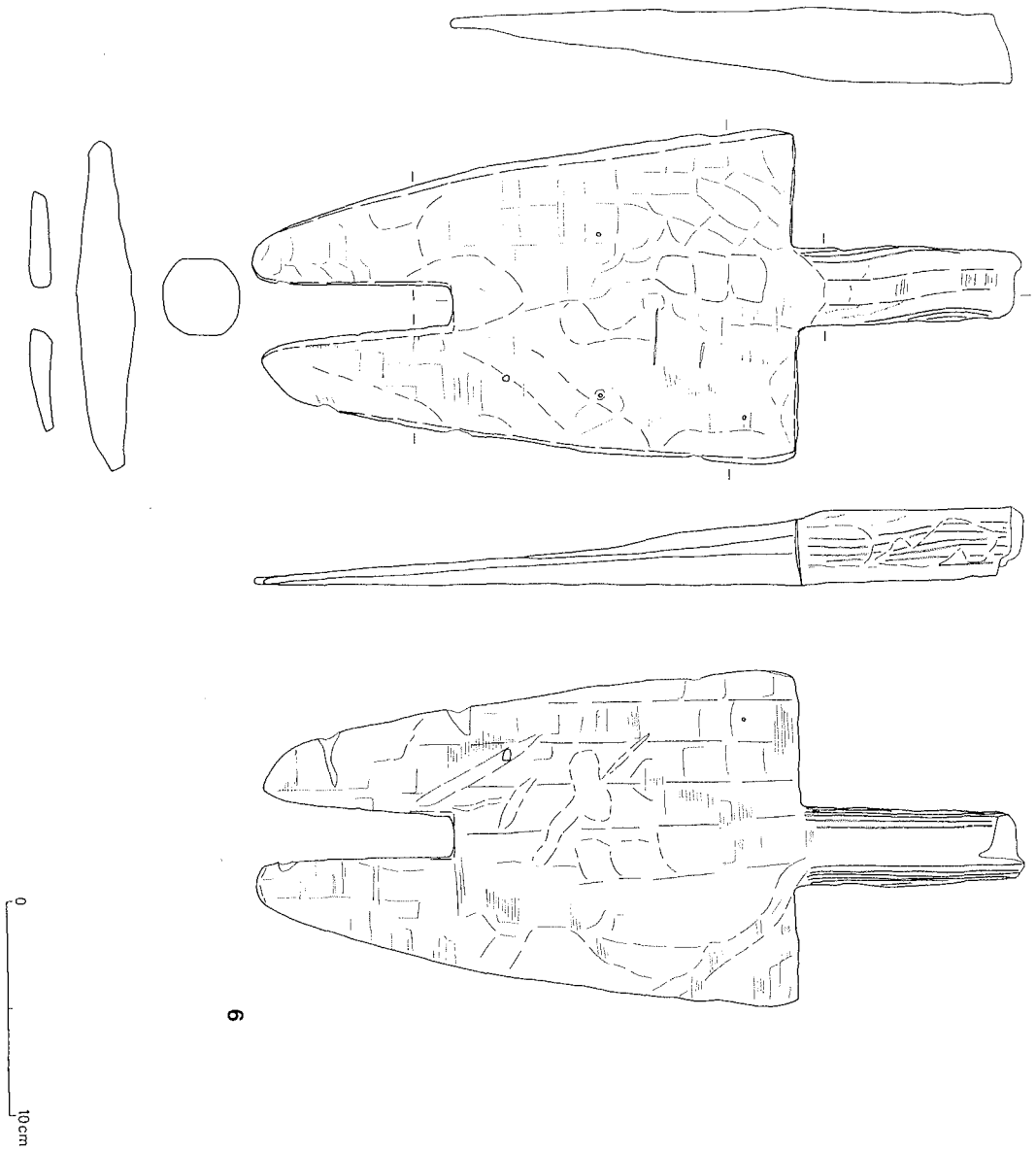
５は板状の木製品である。残存長26.0cm、残存幅11.4cm、厚さ2.1～2.9cm。柾目材である。正裏側面は丁寧に平坦に加工されている。側面は、端部は正面へ、側辺は裏面へわずかに傾いている。正面向って右側（本来は板材の中央あたりになるものと思われる）に縦位に浅い溝が彫られている。正面面とも釘穴が数ヶ所認められる。樹種はハルニレである。

６は二股の鋤である。残存長35.6cm（作用部長さ25.2cm）、作用部幅15.6cm、柄幅3.7cm、作用部厚さ0.3～3.0cm、柄厚さ3.0～3.4cm。全体はスコップ形を呈し、中央の抉入は長さ9.2cm。鋤先端部は向かって左側はやや厚く平坦であるが、右側は側辺が薄く断面が弱い弧を描く。正裏面とも鑿状工具によると思われる加工痕が明瞭である。裏面は縦位方向の削りが明瞭で、縦位の弱い稜が数条認められる。正面も概ね縦方向に削られているが、柄の近くでは斜めに削られ、鋤の先端も若干細かい調整が加えられているようである。作用部の正面は中央がやや高く、鋤先は平坦である。裏面は横位に弱い弧状となっている。作用部の側辺は、全体に向って左側が厚く、右側は薄い。正裏面とも小さい穴が数ヶ所認められる。柄は断面円形を呈するが、作用部との境あたりは側辺が平坦に加工されている。正面が木の中心を向く板目材が用いられている。樹種はシラカシである。

なお、他にも杭状の木製品などが出土しているが、紙幅の関係で掲載しえなかった。



第67図　第１号溝状遺構出土遺物(1)



第68図　第１号溝状遺構出土遺物(2)

Ⅵ　赤彩漆器及び赤彩土器に用いられた顔料

深谷町遺跡より出土した赤彩漆器１点及び赤彩土器３点について、用いられた顔料の種類を明らかにすることを目的として、蛍光Ｘ線分析及びＸ線回折分析を実施した。土器はいずれも縄文中期末葉に属するものと考えられる。漆器については加曽利ＥⅢ期から堀之内Ⅱ期のいずれかに属することが確実なものの詳しい時期は不明である。赤は、赤彩漆器では勿論のこと、赤彩土器のいずれにおいても程度の差こそあれ、塗膜状に残存している。ＩＲ分析や元素分析或いは薄片による顕微鏡観察等は実施していないが、一応これを漆と理解しておきたい。

赤彩漆器では赤色塗膜の一部を採取し、これを試料として用い、また赤彩土器は土器をそのままで試料として用いた。

蛍光Ｘ線分析は試料に含まれる元素の種類を明らかにするために実施した。測定には、理学電機工業ＫＫ製大型不定形試料用蛍光Ｘ線分析装置を用い、Ｘ線管球；クロム対陰極、分光結晶；フッ化リチウム、印加電圧―電流；40 kV―20 mA、検出器；シンチレーション計数管、測定雰囲気；大気、ゴニオメーター走査速度；4°（2θ）／分、記録紙速度；4 cm／分、ゴニオメーター走査範囲；20°～65°（2θ）、の条件で行なった。なおフルスケール、時定数は適宜設定している。

赤彩漆器の塗膜片からは鉄（Fe）が検出された。また赤彩土器１、２、３からは鉄の他に亜鉛（Zn）、ルビヂウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、ジルコニウム（Zr）などが検出された。鉄は顔料と胎土の両者に由来するものと考えられるが、他の元素は胎土のみに由来するものであろう。ただし土器胎土にピークとして認められる程の亜鉛が入る例を、筆者は今までに知らない。

Ｘ線回折分析は試料に含まれる鉱物の種類を明らかにするために実施した。測定には、理学電機ＫＫ製文化財測定用Ｘ線回折装置を用い、Ｘ線管球；クロム対陰極、フィルター；バナジウム、印加電圧―電流；27.5 kV―10mA、検出器；シンチレーション計数管、発散側及び受光側ソーラースリット；0.34°、照射野制限マスク；2mm、時定数２、ゴニオメーター走査速度；2°（2θ）／分、記録紙速度；1cm／分、ゴニオメーター走査範囲；60°～30°（2θ）、フルスケール；400cps、の条件で行なった。

赤彩漆器の塗膜片からは赤鉄鉱のみが、また赤彩土器１、２、３からは赤鉄鉱に加え、石英や長石が検出された。この場合、石英、長石は土器胎土に由来するものであろう。なお赤鉄鉱の確認には 2.51 Å（2θ＝54.3°）、2.69 Å（50.4°）、3.66 Å（36.5°）などのピークを用いた。

以上のことから、赤彩漆器１点及び赤彩土器３点に用いられた顔料はいずれもベンガラ（酸化第二鉄）であることが明らかとなった。この結果は縄文時代の朱（硫化水銀）の初現は後期中葉で、それ以前に用いられた赤色顔料はベンガラのみと言う従来の研究成果（註）を補強するものである。

	顔料の種類	蛍光Ｘ線分析		Ｘ線回析分析		備　　考
		鉄	水　銀	赤鉄鉱	赤色硫化水銀	
赤彩漆器	ベンガラ	＋	－	＋	－	縄文時代中期末葉～後期前葉　第62図
赤彩土器１	ベンガラ	＋	－	＋	－	縄文時代中期末葉　第61図７
赤彩土器２	ベンガラ	＋	－	＋	－	縄文時代中期末葉　第61図８
赤彩土器３	ベンガラ	＋	－	＋	－	縄文時代中期末葉　第61図11

註　田辺義一　「日本石器時代の朱について」『人類学雑誌』第53巻第12号　1943
成瀬正和　「赤色塗彩土器・漆塗土器・漆液容器」『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書――人工遺物編――』埼玉県教育委員会　1984

（成瀬正和）

Ⅶ　結　　語

深谷町遺跡は、現地表面を約1.7m掘り下げて確認されたいわゆる低湿地遺跡である。現地の発掘では軟弱な地盤と地下水の湧出に常に悩まされたが、最近注目を集めている各地の低湿地遺跡と同様に、赤彩土器、木製品を含む木片類、クルミ・トチなどの種子類、稲穂の一部など、台地上の遺跡の発掘調査ではほとんど検出されることのない遺物が豊富に出土した。土器や石器なども多量に出土し、こうした出土遺物により深谷町遺跡は、縄文時代中期末葉～後期前葉及び古墳時代中期頃の文化の痕跡が留められていることが確認された。出土遺物の総数は、微小な破片まで含めると２万点を越えるものと推定され、その全てを網羅することはほとんど不可能である。この報告書ではごく代表的なものを紹介しただけだが、遺跡の性格・特徴などは概ね理解していただけるものと思う。まとめとして、調査結果から考えられることなどを、ごく大雑把に記しておきたい。

縄文時代の遺構は、３条の川跡という言わば自然遺構が主体であり、人工の遺構は土坑１基と第１・３号川跡内の丸太を足場状に設置した遺構のみである（第２号川跡のみ人工の溝跡である可能性がある）。出土遺物は、第１号土坑出土の浅鉢形土器を除きほとんどが流入又は廃棄されたものと考えられる。出土土器は、大半が従来の編年の加曽利ＥⅢ式～堀之内Ⅱ式にあたるものである。遺物の出土状況から、３条の川跡はほぼ同時期に存在したものと推定され、形状からも第３号川跡が本流と考えられる。なお、川跡という性格のため、遺物出土状態の層位的な検討も困難である。

出土土器はほとんどが小破片であり、完形に近い状態に復原できたのは第28図76のみである。保存状態は全般的にあまり良くなく、表面が磨滅しているものが多い。報文では17・18ページのような簡単な分類を行い、それに従って記述したが、多分に恣意的かつ混乱していることも指摘されよう。しかし上記のような状況のため、分類による記述は飽くまで便宜的な方法であると理解していただきたい。

近年になって資料の大幅な増加に伴い、加曽利Ｅ式・称名寺式・堀之内式土器などについては、型式論、編年論、系統論などの論議が特に盛んであるが、ここではこうしたことにあまり深入りすることはできない。そこで、先学の研究成果を頼りとして、主に出土した土器の文様などから考えられることを若干検討し、ごく大まかな流れを追ってみたい。

さて、当遺跡で出土した縄文土器は、「縄文中期土器群の再編」（谷井、宮崎、大塚、鈴木、青木、金子、細田、1982）を参照すると、XIII期、従来の編年では加曽利ＥⅢ期に始まるものと考えられる（それ以前のものも出土はしているが数量的には微々たるものである）。口縁部文様帯を有するも

のはほとんど認められず、加曽利EⅢ式でも比較的新しい段階から始まると考えられよう。加曽利EⅢ式とⅣ式の判別は小破片では困難なことが多いが、加曽利EⅣ式と認められる土器片もかなりの数がある。この報告書に掲載できなかったものを含めても、続く称名寺式・堀之内式土器を、数量的に完全に圧倒している。加曽利EⅢ式・Ⅳ式土器の文様構造は、笹森健一氏による深谷市内の島之上遺跡・出口遺跡を素材とした詳細な分析（笹森　1977）があり、深谷町遺跡の出土土器も場所が近いためもあってかなり類似した様相を示している。

加曽利EⅢ式・Ⅳ式土器の文様は、縄文を地文として1条の隆線により描出されるものの他は、隆線による場合も沈線による場合も磨消部分を伴うのが一般的である。特に沈線による文様は、磨消縄文（註1）と深く関わっているとみてよかろう。また、口縁部は隆線や微隆起線又は沈線により画されて無文帯となる場合が特にⅣ式に多い。稀な例としては第34図55のように、口唇部外面に縄文を横転し、その下が無文帯となるものがある。しばしば指摘されるように、隆線により文様を描出したものが関東北東部的で、沈線によるものが関東南西部的であるとすれば、深谷町遺跡の出土土器は、両者の折衷的な傾向を示していることになり、特に沈線によるものが増加していく様子が窺われる。

縄文の回転方向（註2）をみると加曽利E式土器は、無論例外はあるが、胴部文様帯では基本的に縦転されている。口縁部文様帯の縄文は縦転・横転ともにあるが、口縁部文様帯での縄文の横転という手法は加曽利EⅠ式で既にみられ、しだいに一般化するようである。口縁部文様帯の消失後も、口縁部で縄文が横転されるものがしばしばみられ、口縁部文様帯における縄文の横転という手法が形骸化したものと考えられよう。

加曽利E式土器にみられるこうした縄文の施文手法は、文様自体と密接に関わっている。発生的には、横方向に展開することが多い口縁部の文様と、縦方向に垂下することの多い胴部の文様に、縄文の回転方向が規定されたものと考えられる。胴部での縄文の縦転という手法は、加曽利EⅠ式の撚糸文以来の、加曽利E式土器の伝統とも言えよう。口縁部文様帯の消失後は、縄文は当然のように全面縦転が基本となる。文様も懸垂文、縦長の長円形状文、下端が垂下する渦巻状文など、縦方向が強く意識されている。深い波状文なども横方向の連続としてよりは、上下方向の連続としての縦の方向性がより強く意識されたものと認められよう。

しかし加曽利EⅣ式になると、文様の変化と共に縄文も回転方向の乱れが著しくなる。こうした状況になってこそ、言い換えれば加曽利E式の末における文様の縦方向の意識の希薄化があってこそ、称名寺式土器にみられる文様や施文手法が受容され得たのであろう（註3）。

深谷町遺跡の周辺では、島之上遺跡の1号住居跡にみられるように、加曽利EⅡ期には大木式や曽利式の影響が色濃いが、加曽利EⅢ期・Ⅳ期ではそうした外的な影響は希薄となる。深谷町遺跡も同様で、縄文を地文として1条の隆線により渦巻状の文様を描いたものに大木式の影響が、第26図52などに曽利式の影響が認められる程度である。全般的に、他地域からの影響による要素も加曽利E式の文様構成の中に取り込まれ、充分に消化されて安定感のある文様を描出している。前述したように出土した土器片数も加曽利EⅢ式・Ⅳ式のものが圧倒的に多く、深谷町遺跡の出土遺物をもたらした人々は、縄文時代中期末葉において最も安定した状態にあったと推定できそうである。

加曽利EⅢ期・Ⅳ期と称名寺Ⅰ期・Ⅱ期或いは堀之内Ⅰ期・Ⅱ期は同様の時間的幅を有していたとは考え難く、大規模な移動等も考えられるので、一概に称名寺期に衰退したという表現を用いることはできない。しかし、深谷市内の南側台地上の島之上遺跡、出口遺跡、小台遺跡のように称名寺期の早い段階で消滅したと考えられる遺跡が多くあり、深谷市遺跡詳細分布調査（註４）においても多量に採集された加曽利E式土器片に比べて称名寺式土器片はごくわずかで、こうした状況に少なからず対応していることは興味深い。今村啓爾氏が、関東地方の人口が「称名寺式の初頭には最低レベルに落ち込んだ」(今村　1977）と推定しているのは注目される。

称名寺式土器についても近年研究が盛んである。複雑にみえるその文様は、下村克彦氏の論考（下村　1973）により、Ｊ字状文、銛状文などの基本的モチーフが、磨消縄文によりポジティヴ・ネガティヴに描出されることにより構成されていることが明らかにされた。深谷町遺跡の出土土器でも、磨消縄文によるＪ字状文は第16図102、第27図60、第42図190・194、第43図202、銛状文は第16図107などにみることができる。

称名寺式土器にみられる磨消縄文は、基本的には平行沈線間に縄文が、沈線の方向に沿って縦・横・斜めと様々な方向に回転して施されている点で、加曽利EⅢ式・Ⅳ式土器とは大きな違いがある。加曽利EⅢ式・Ⅳ式土器の文様が縦の方向性を強く意識しているのに対し、称名寺式土器の文様は、その影響によって縦位の構造もかなり意識されてはいるが、はるかに横位の複雑な展開をも容易にしている。称名寺式土器では、原体を様々な方向へ回転させることにより施された帯状の縄文そのものが文様を描出しているとも言えよう。島之上遺跡11号土拡出土土器のように沈線のない帯状縄文のみで文様が描かれたものや、第41図184のように、口縁部の無文帯を隆線で画し平行する隆線が垂下して（この文様形態は不明）隆線間が磨消されてはいるが、細かいＬＲ単節の帯状縄文のみが施されたものなどは、多分に示唆的である。

こうした称名寺式土器の縄文の施文手法は、前述のように加曽利EⅣ式にみられる文様の変化と縄文の回転方向の乱れといった状況があってこそ、初めて受容されえたと考えられるが、その手法の出自がどこに求められるかは難しい。称名寺式と西日本の中津式が密接に関連していることはしばしば指摘されるところであるが、平行沈線間に方向を変える沈線に沿って縄文を回転させる例は既に大木10式にみられる。称名寺式と中津式の関係については今村啓爾氏の見解（今村　1977）に賛成したいが、今村氏は称名寺式に対する大木10式の影響はあるとしても小さいとされている。しかし上記のような縄文の施文手法においては決して無視すべきではないと考えられよう（註５）。

称名寺Ⅱ式土器には、平行沈線間に列点が施されたものが多くみられる。深谷町遺跡では、第26図57、第42図188、第56図10・11などが挙げられる。こうした列点は、平行沈線内に沈線の方向に沿って様々な方向へ施された、文様としての方向性をもった縄文が省略化されることにより出現したものとみるべきであろう。だからこそ列点は、沈線間にややランダムに施されることもあり、一定線上に並ぶように施されもしたと考えられる。言い換えれば、称名寺Ⅰ式にみられる施文手法があってこそ、主に称名寺Ⅱ式にみられる列点による文様が生じえたのであろう。加曽利EⅣ式土器には、第15図84・85、第38図130、第56図６のように、口縁部などに列点を施す例がしばしばみられるが、これは沈線が変換されたか沈線又は隆線を補足したものと考えられ、称名寺式土器の平行沈

線間に施された列点とは全く性格を異にするものとみるべきである。称名寺式土器の列点文の発生の原因は、やはり直接的には他地域の影響であろうが、今後更に検討が加えられなければならない。称名寺式土器は、文様が複雑化の頂点に対した後、外からの影響により、施文手法も文様自体も省略化（単純化）されていったと考えられる。なお、稀にではあるが、沈線間に条線が施された例がある。江戸川台第Ⅰ遺跡（中山　1981）には、沈線方向に沿って条線が充塡されたものがあることは注目される。

こうした施文手法と文様の省略化の方向は更に進み、列点まで失われ、堀之内式の粗製土器にみられる沈線のみが描かれた単純な文様へ変化していったのであろう。

なお、第27図60と第42図187は、破片のため文様の構造も明確ではないが、理解が困難な土器である。他地域の影響を認めるべきであろうが、或いはもう少し新しい段階のものとみるべきかもしれない。

称名寺式に続く堀之内式土器では、文様は一見その様相をかなり変える。その文様要素からは18ページのような大別が可能であろうが、型式論・編年論・系統論のうえでは更に詳細な分類を必要とすることは言うまでもない。

堀之内式土器の文様の一つである集合沈線には３条を１組としたものが多くみられるが、第43図230、第44図232・239などはその明瞭な例であり、第44図233は３条沈線に枠線が施されたものである。３条１組の沈線は、称名寺Ｂ貝塚の出土例などをみると、今村啓爾氏の指摘（今村　1977）のとおり、称名寺式土器の平行沈線間に一列に並ぶ列点が沈線に変換されたものであろう。ここにも施文の作業手順の上での省略化が認められるのではなかろうか。

称名寺式土器の文様と施文手法の省略化（一種の衰退ともいえよう）が進行していく中で、かなり異なった要素を有する南東北の綱取Ⅰ式の影響によって東関東において堀之内Ⅰ式が成立し、それとはまた異なった要素（称名寺式の文様と施文手法の省略化は西関東において著しかったのではなかろうか）をもって西関東的な性格の堀之内Ⅰ式が成立する、といった単純な図式が的を得たものかは今後の一層の検討を待たなければならない。しかし、堀之内式土器において、地文として縄文が施されるのが東関東的な要素であり、地文を施さずに沈線のみによるのが西関東的な要素であることはしばしば指摘される。深谷町遺跡では、関東中央部に位置しているという地理的状況にもよろうが、両者が混在している。なお、称名寺式からの系譜をひく沈線のみによる縦位構成の単純な文様が描かれたものは、神奈川方面の西関東を中心に分布していることが知られている。深谷町遺跡でみられるものは、いずれも堀之内式の新しい段階で把えられるものであることは注目しておいてよかろう。

以上、深谷町遺跡の出土土器をもとに、加曽利ＥⅢ式から堀之内Ⅱ式までの土器の文様の流れを至極大まかに追ってみた。加曽利ＥⅢ・Ⅳ式では、施文手法を含め文様構造に縦方向の強い意識が認められた。称名寺式では、平行沈線間に沈線に沿って縄文を様々な方向に施す手法が導入され、文様そのものが質的な変化を遂げた。この手法は、堀之内Ⅰ式で一時影を潜めるが、堀之内Ⅱ式以降、より一層消化された精緻な形態をもって盛行する。更に詳細に検討されねばならないが、加曽利Ｅ式と称名寺式の間には、土器の文様に対する意識のうえで一つの画期が見出されるのではなか

ろうか。

出土した縄文時代の石器では、クルミやトチなどの種子とともに磨石が非常に多く出土したことが注目されよう。報文中に記載したのは凹みを有したものが多いが、機能面を重視して磨石と記した。他に凹みをもたない磨石も多量に出土したが、紙数の都合で省略せざるを得なかったことをお断りしておきたい。これらの磨石をみると、形態や石質、使用痕などにより、いくつかのタイプに分類することができる。用途等による使い分けなどが推定できそうだが、今後の検討に委ねたい。

古墳時代の遺構は、第1号構状遺構と第2号土坑のみである。両者は細い溝状遺構で繋っており第2号土坑は第1号溝状遺構に付属した遺構と考えられる。第1号溝状遺構は、木製鋤や稲穂の一部が出土したことにより、水稲耕作に関連した水路跡とみて間違いなかろう。出土土器はごくわずかであるが、従来いわれる和泉式土器と考えられる。当地においても古墳時代中期頃、大規模な灌漑農耕が行われていたことを示す貴重な証拠である。第1号溝状遺構の土層断面を観察すると、埋没した後に再利用するといった経過が認められる。この水路が当地において重要な機能を果たしていたものと考えられる。

深谷町遺跡の発掘調査の成果をもとに、とりとめのないことを記してきたが、発掘調査のまとめの文章としては遺跡の特徴を明示したものにはできず、筆者の浅学を露呈した結果に終わった。しかし、この発掘調査で得た資料が高い価値をもつことに変わりはなく、諸兄に様々に利用されることを切に望む次第である。

発掘調査にあたっては、関東郵政局建築部管理課長松本享氏、調整官平岡勇氏には、調査期間の延長や委託契約内容の変更等について格別の御配慮をいただいた。厚く御礼申し上げたい。

深谷町遺跡の発掘調査の内容を、この報告書で充分表現しえなかったことは全て整理を担当した筆者の責任である。現地の発掘を担当していただいた小川望氏、坂本行弘氏に、御礼とともに御詫びを申し上げて結語としたい。

註1　しばしば指摘されるように、磨消縄文には、縄文→沈線→不要部の磨消という場合と、沈線→縄文（充填縄文）という場合があるが、ここでは広義の意味で用いた。

註2　正しくは縄文の原体の回転方向であるが、煩雑なため以後も縄文の縦転といった表現を用いた。

註3　加曽利E式土器には、渦巻状の文様に沿って縄文原体を回転させたものがみられるが、最末期のものを除いて大木式の影響を受けたと考えられるものである。

註4　昭和56年度・57年度に実施。調査主体は深谷市教育委員会。

註5　大木10式にみられるこうした手法は、大木9式のいわゆるコ字状文などに合わせて縄文の施文手法が変化していったものであろう。

引用文献　（下記以外の参考文献等は紙数の都合で省略せざるを得なかった。御了承願いたい。）

今村啓爾　「称名寺式土器の研究」『考古学雑誌』第63巻第1号・第2号　1977

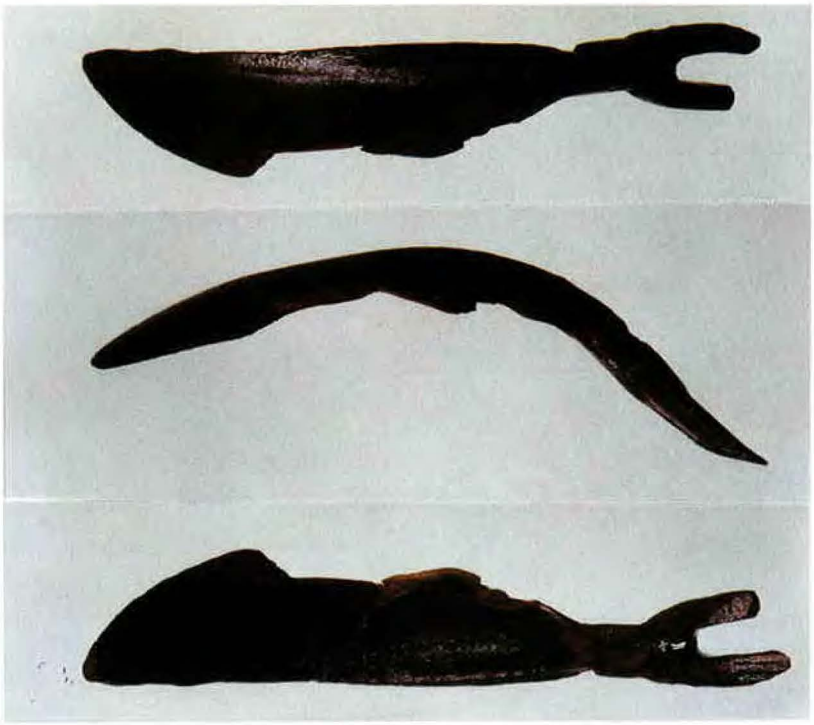
笹森健一他　「前畠・島之上・出口・芝山」　埼玉県遺跡発掘調査報告第12集　1977

下村克彦　「称名寺式土器の意匠二態」『埼玉考古』第11号　1973

谷井彪他　「縄文中期土器群の再編」　埼玉県埋蔵文化財調査事業団紀要　1982

中山吉秀　「千葉県流山市江戸川台第Ⅰ遺跡」江戸川台第Ⅰ遺跡調査会　1981

写　真　図　版

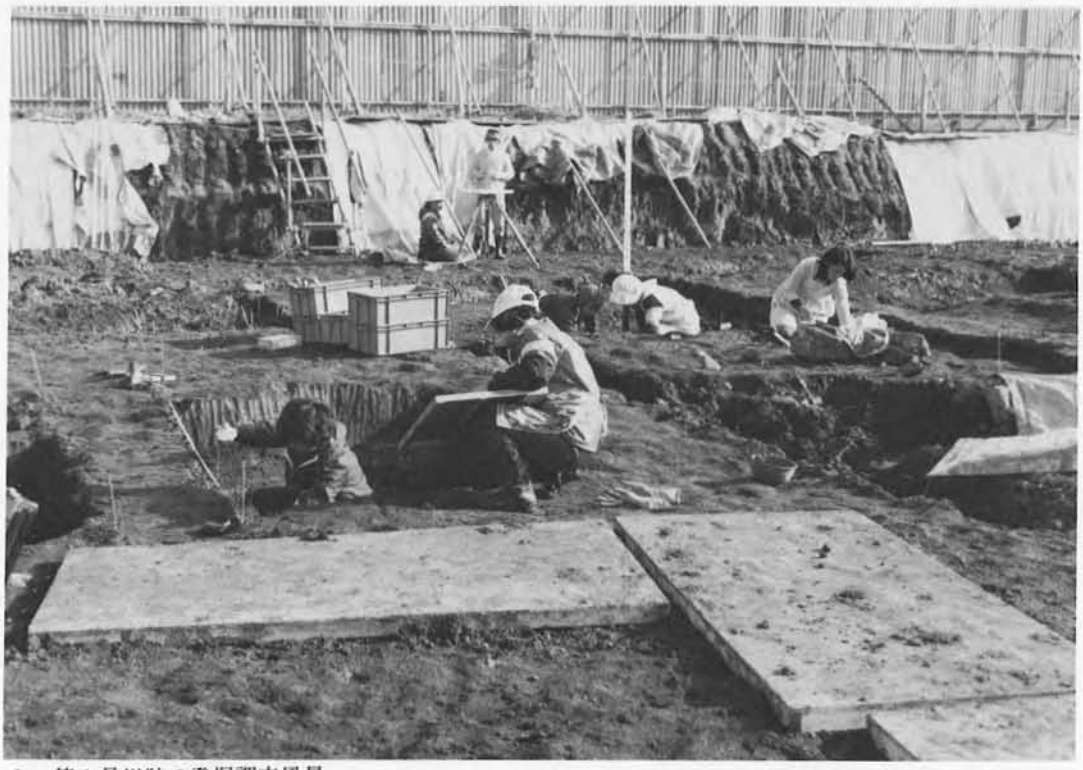


第３号川跡出土木製杓子

赤彩土器

図版 1

1．調査区全景（北より）



2．第１号川跡の発掘調査風景

図版 2

3．第 1 号川跡遺物出土状態(1)

4．第 1 号川跡遺物出土状態(2)

5．第3号川跡（西から）

6．第3号川跡土層断面

図版 4

7．第 3 号川跡遺物出土状態

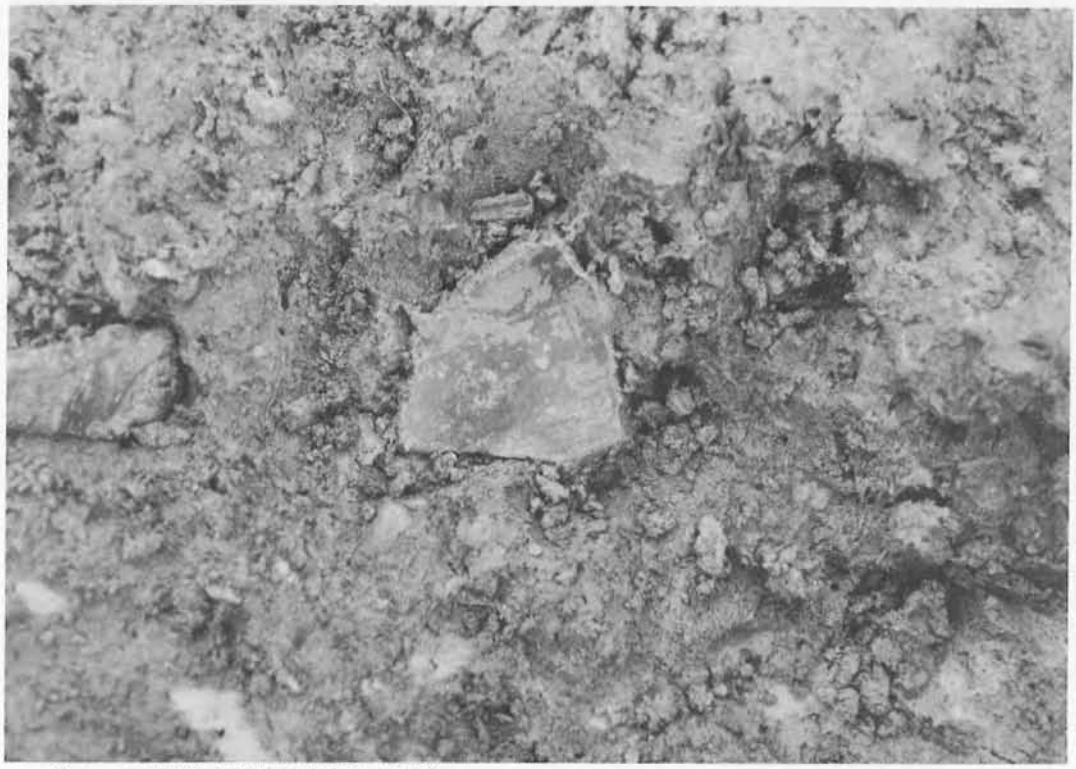
8．第 3 号川跡木片等出土状態

9．第 3 号川跡石鏃出土状態

10．第 3 号川跡木製杓子出土状態

図版 6

11．第１・３号川跡の調査風景



12．第１・３号川跡赤色塗彩土器出土状態

13．第１・３号川跡の足場状の遺構

14．第１・３号川跡足場状遺構の止め杭

図版 8

15．第１・３号川跡石棒出土状態

16．第１・３号川跡丸木舟状木製品出土状態

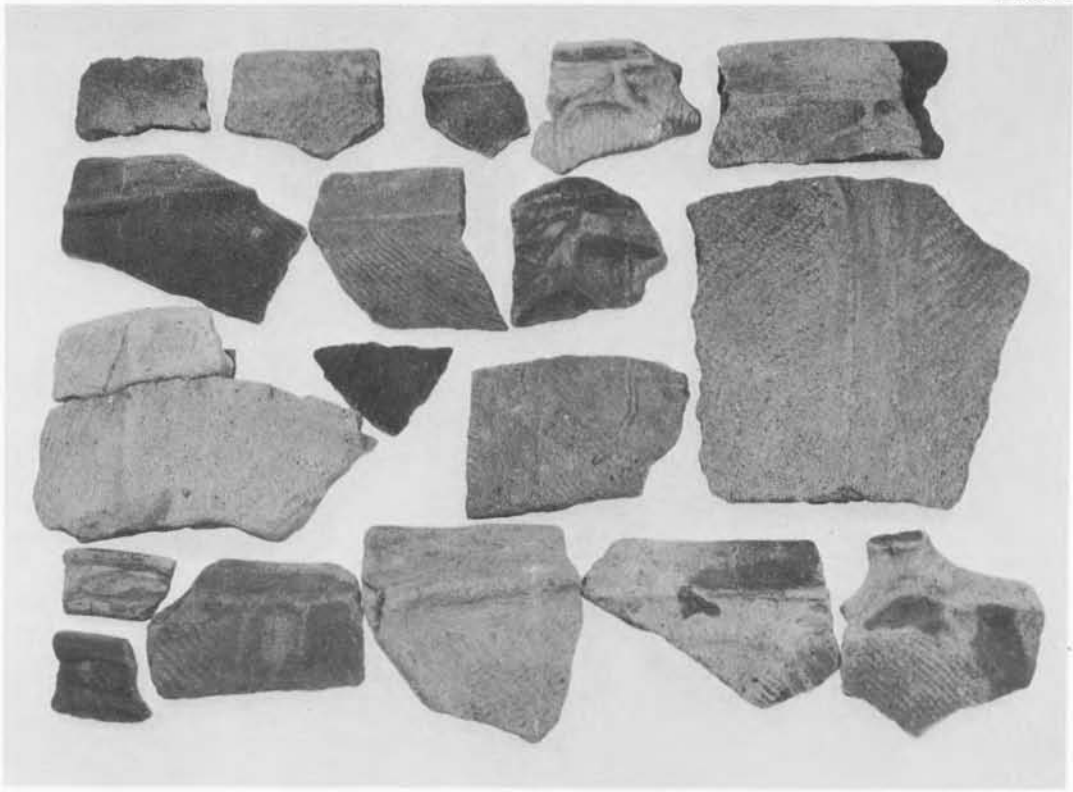
17．第１号土坑遺物出土状態

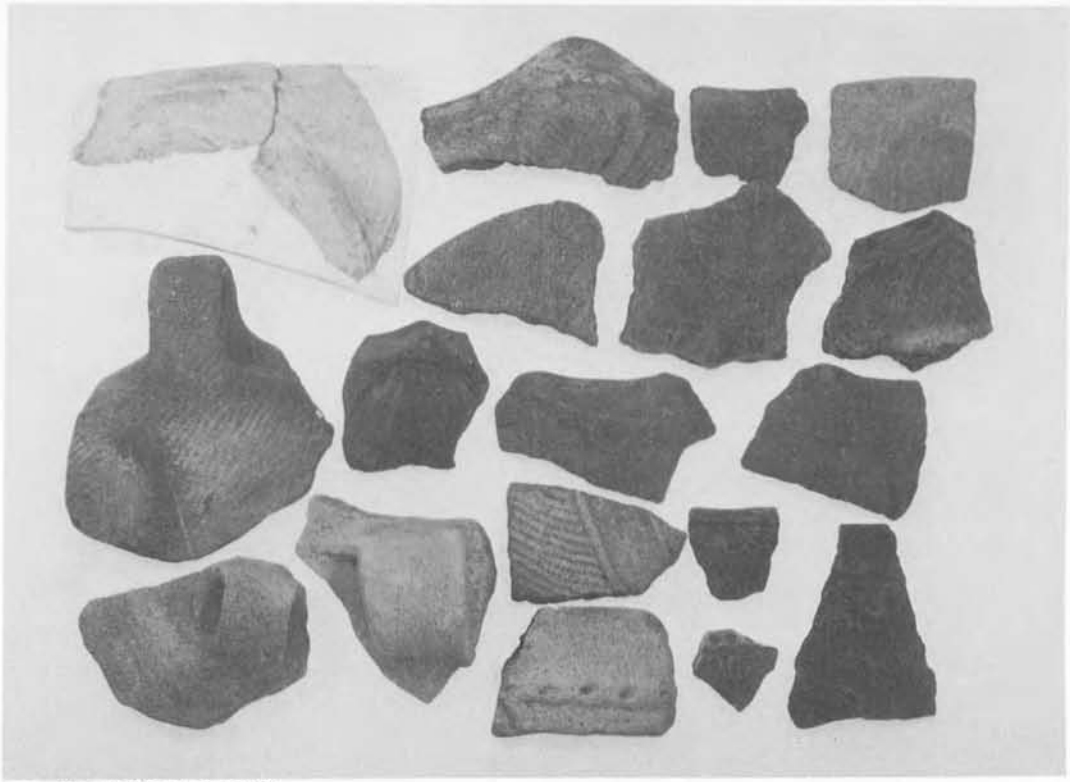
18．第１号溝状遺構（南西より調査区中央を望む）

図版10

19．第１号溝状遺構土層断面

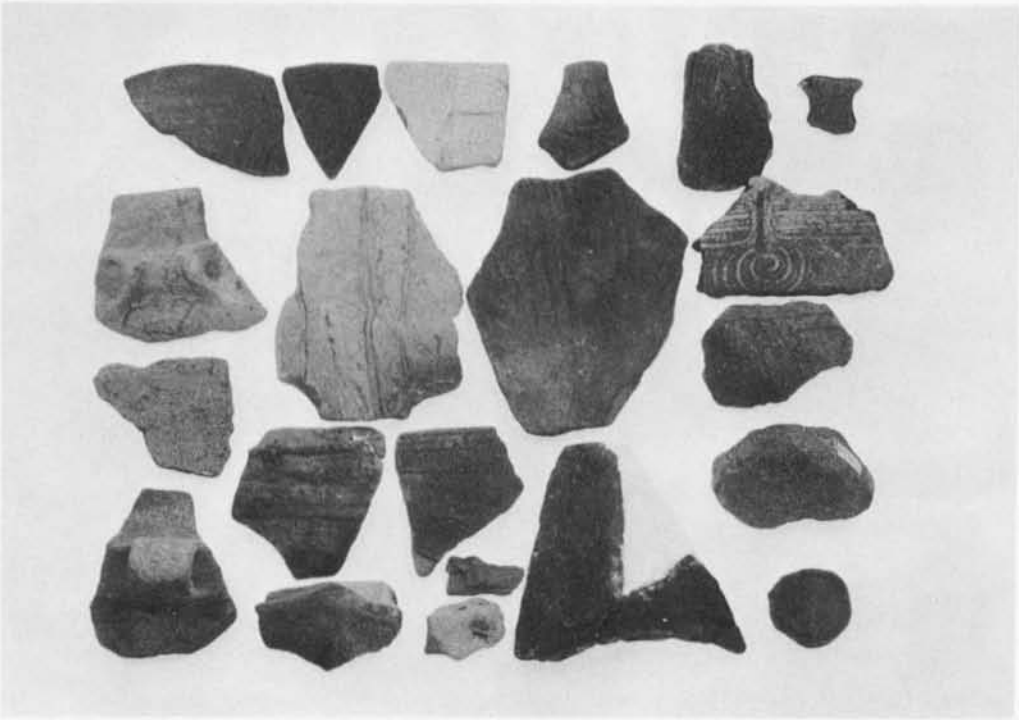
20．第１号溝状遺構木製鋤出土状態



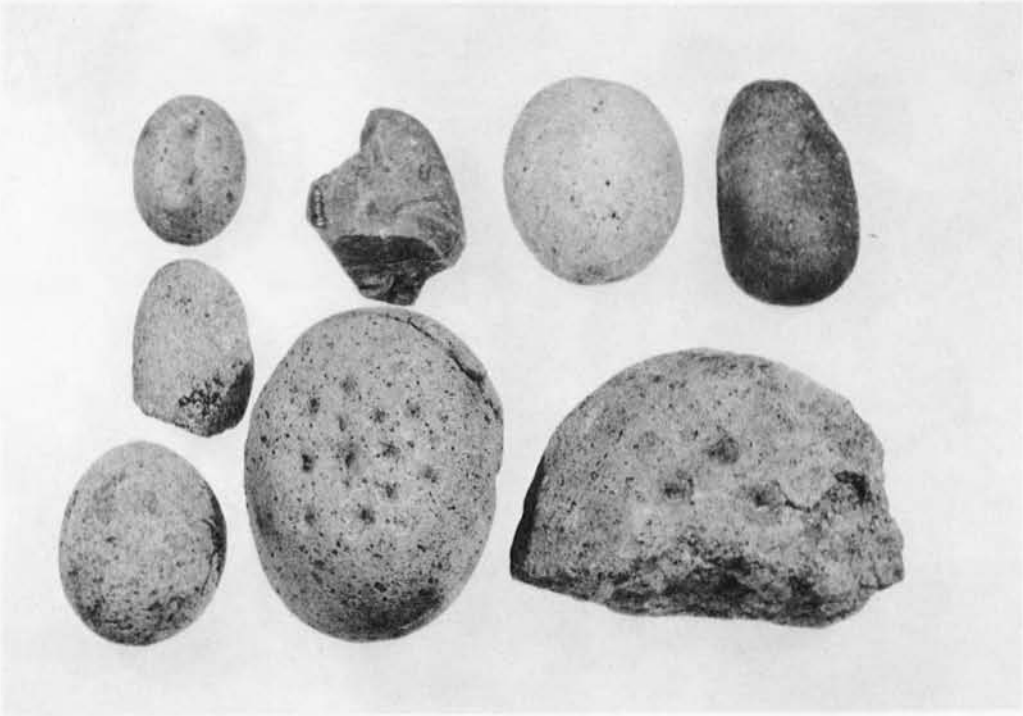


21．第１号川跡出土土器(1)

図版12

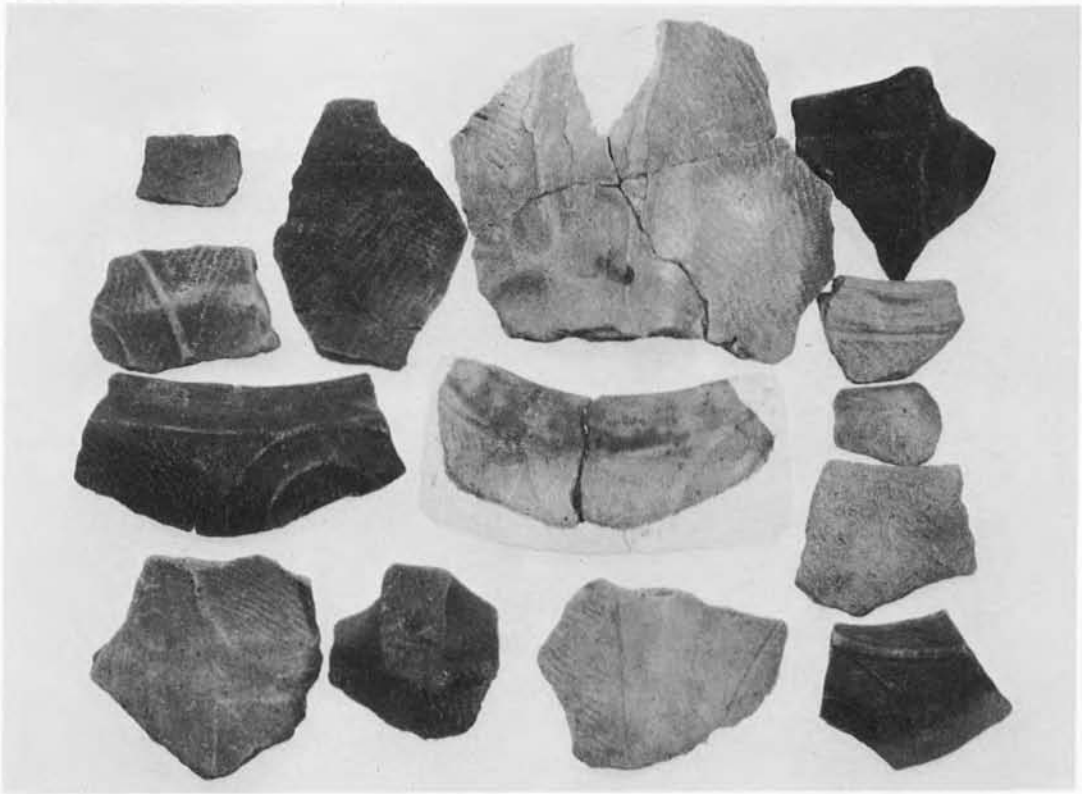


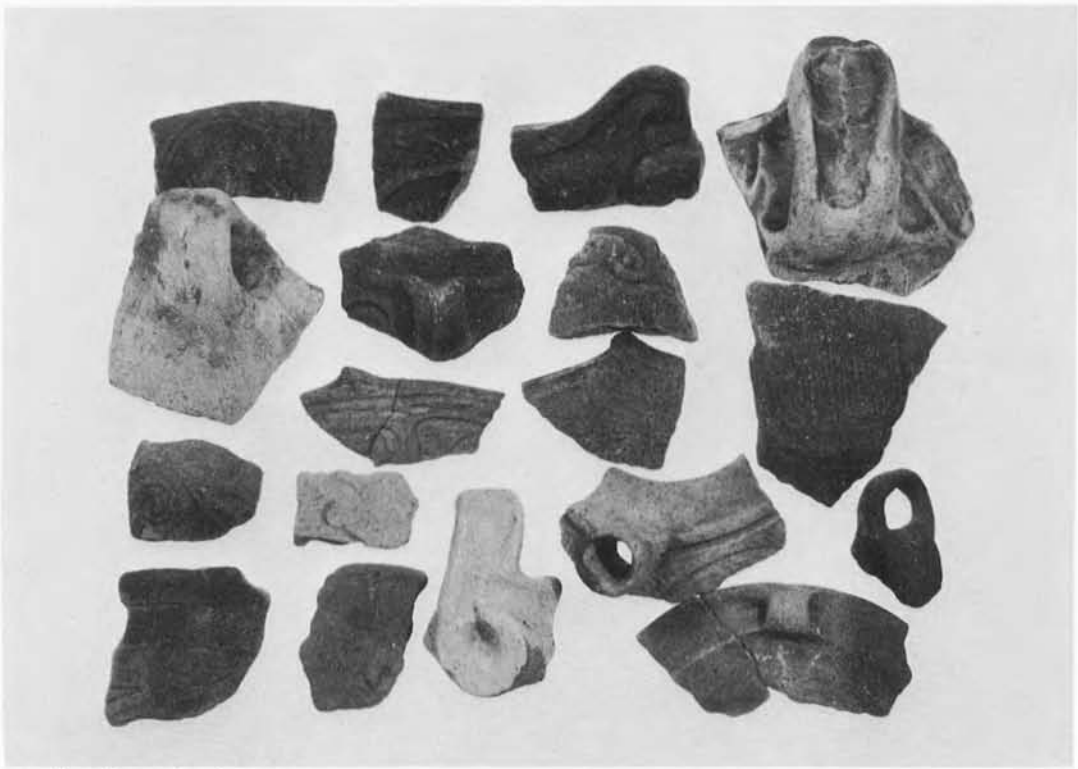
22．第１号川跡出土土器(2)



23．第１号川跡出土石器

図版14



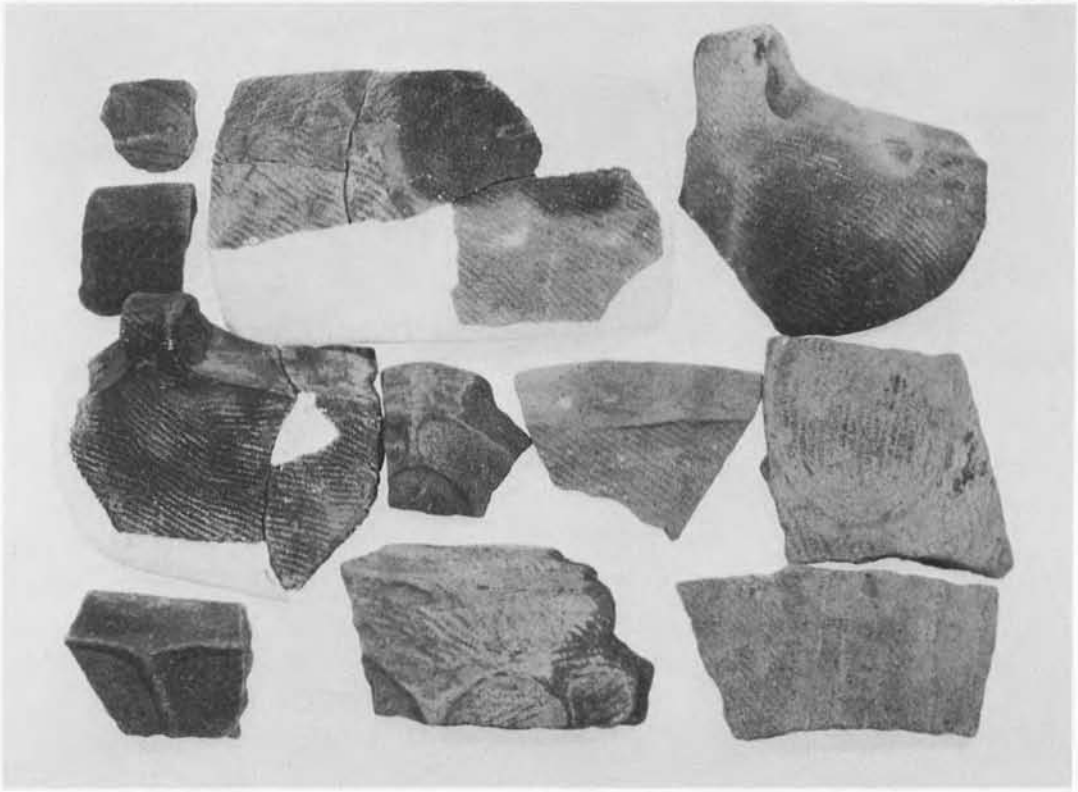


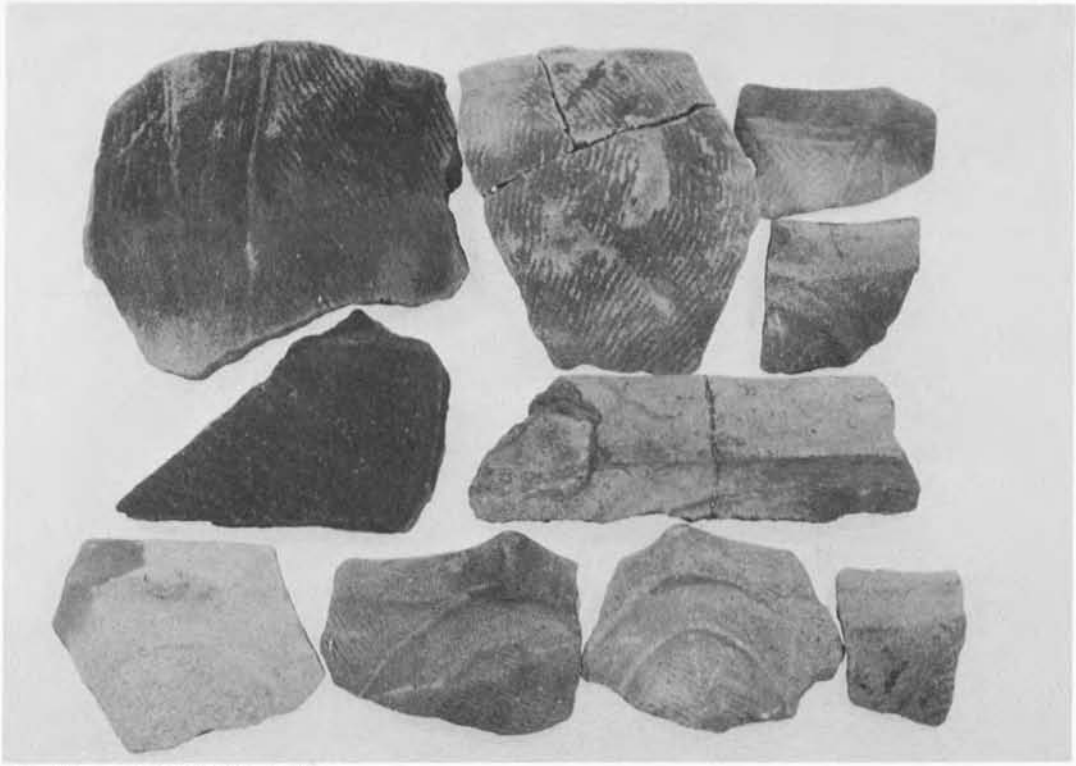
24．第３号川跡出土土器(1)

25．第３号川跡出土土器(2)

図版16

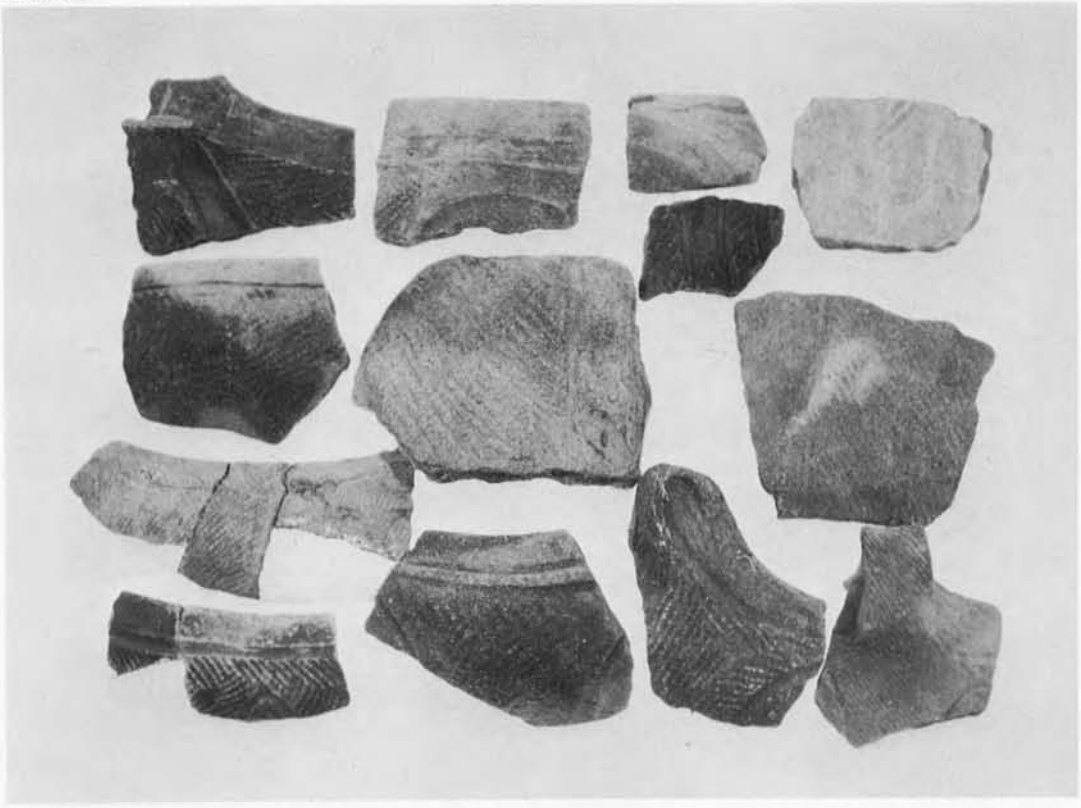
26．第３号川跡出土石器

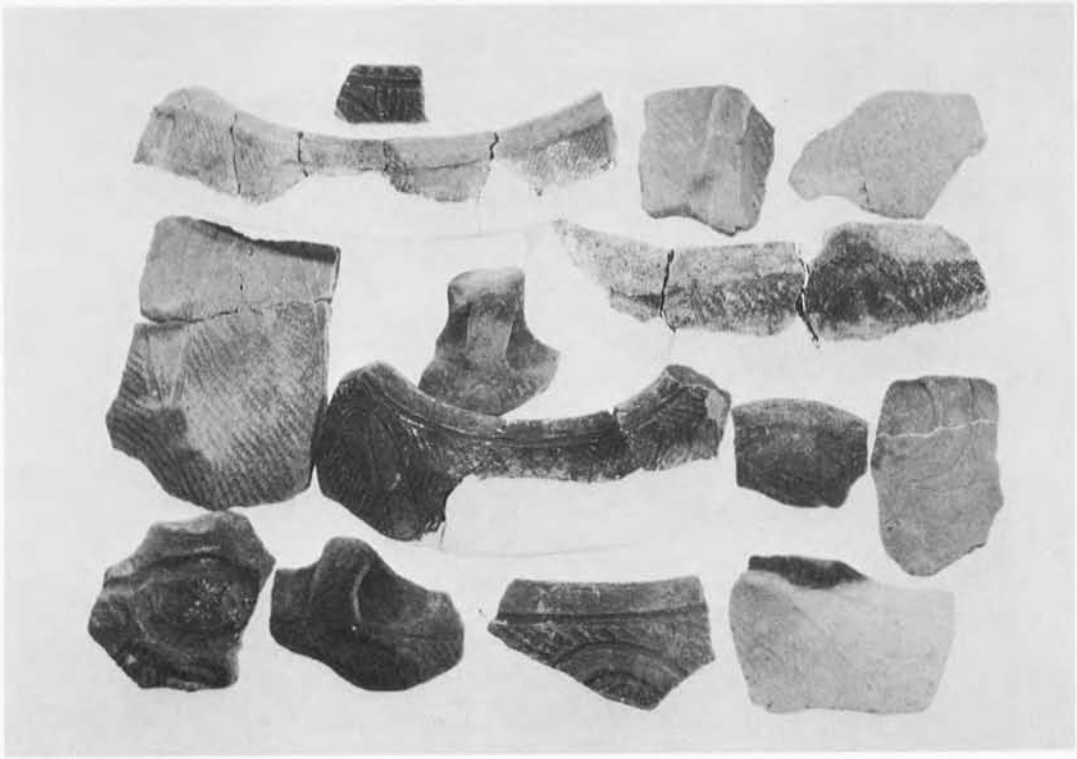




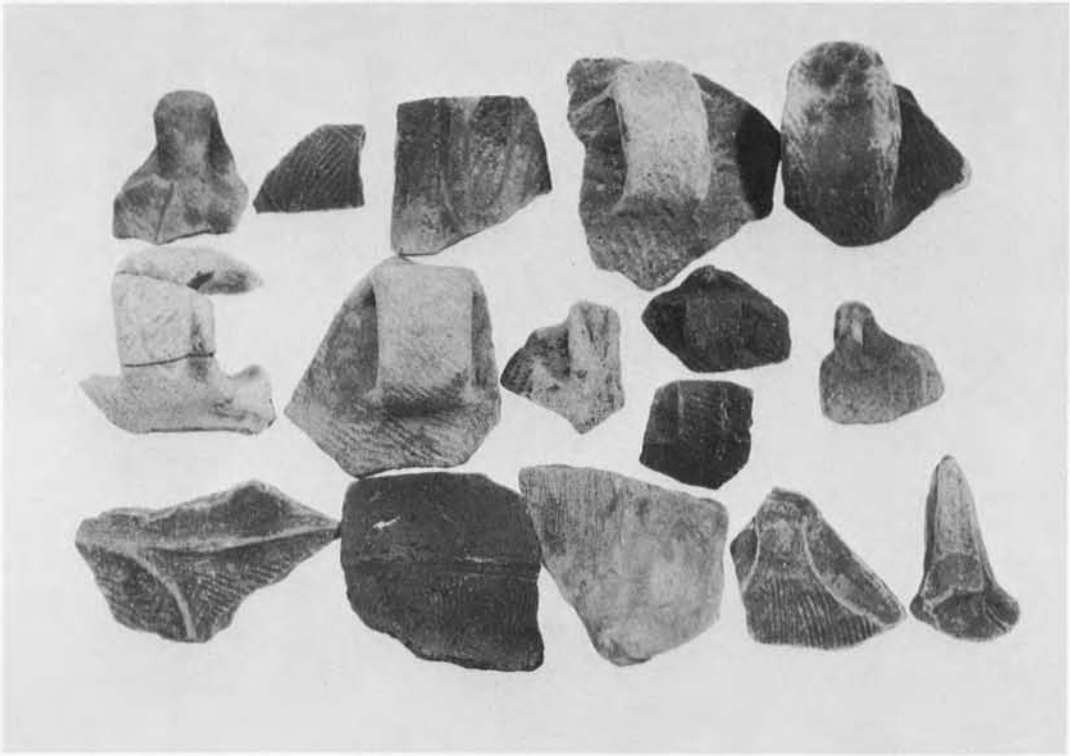
27．第１・３号川跡出土土器(1)

図版18



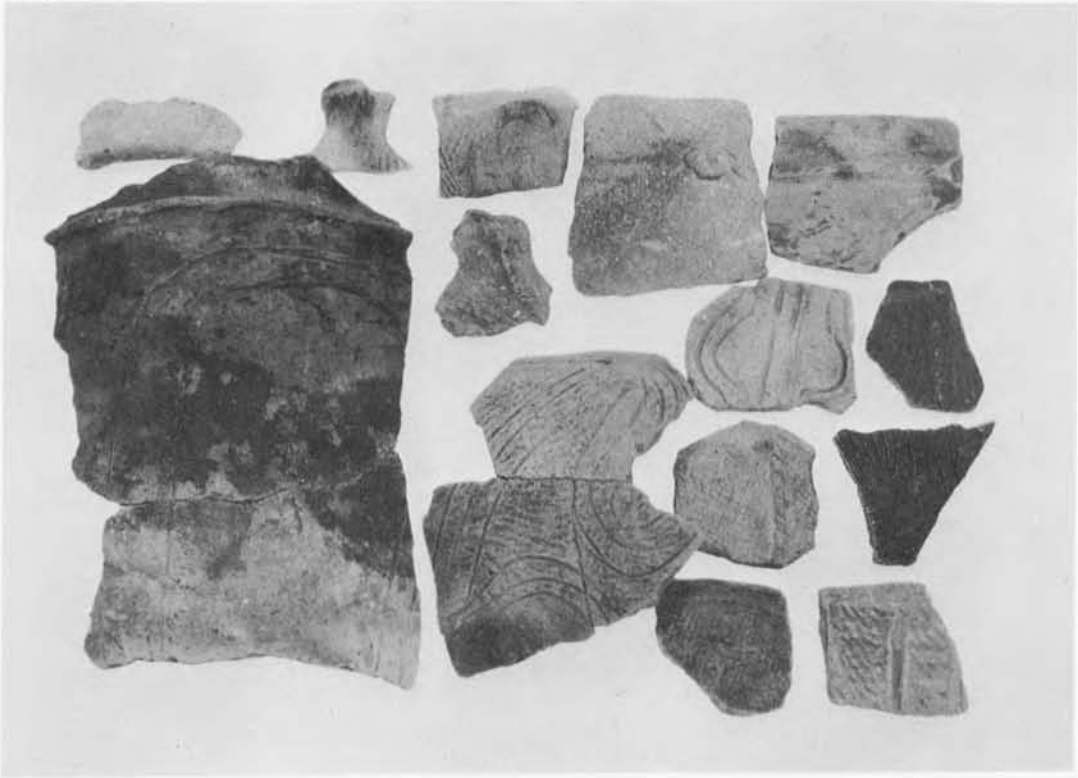


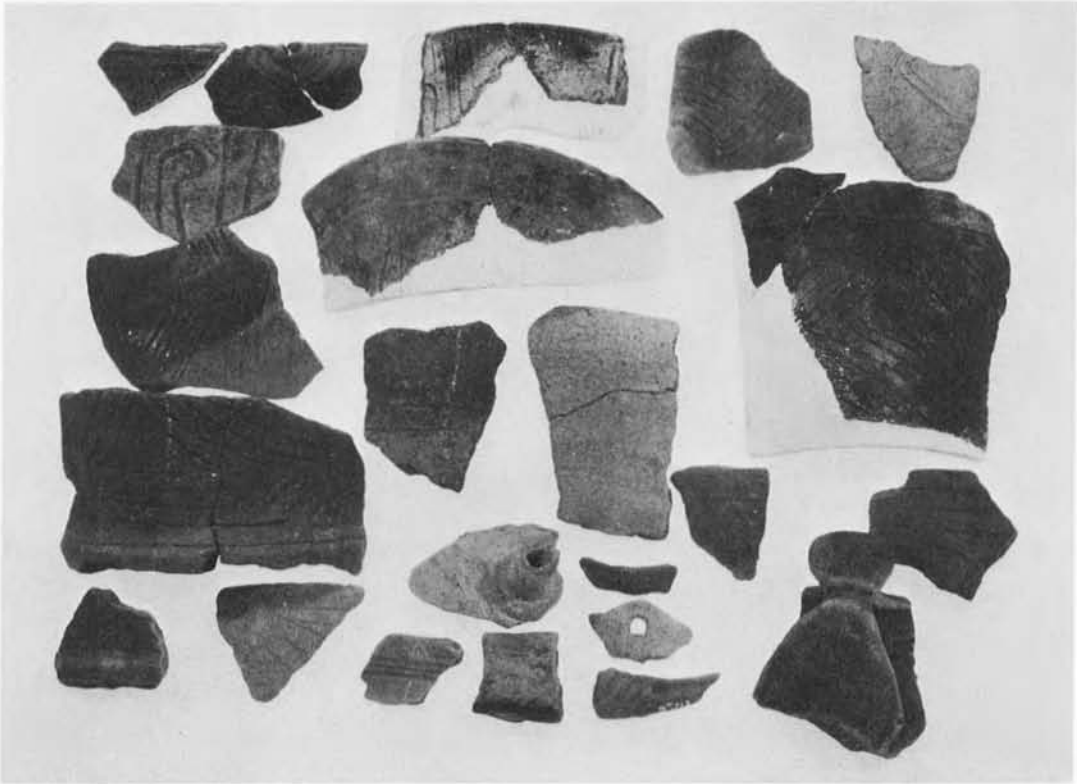
28．第１・３号川跡出土土器(2)



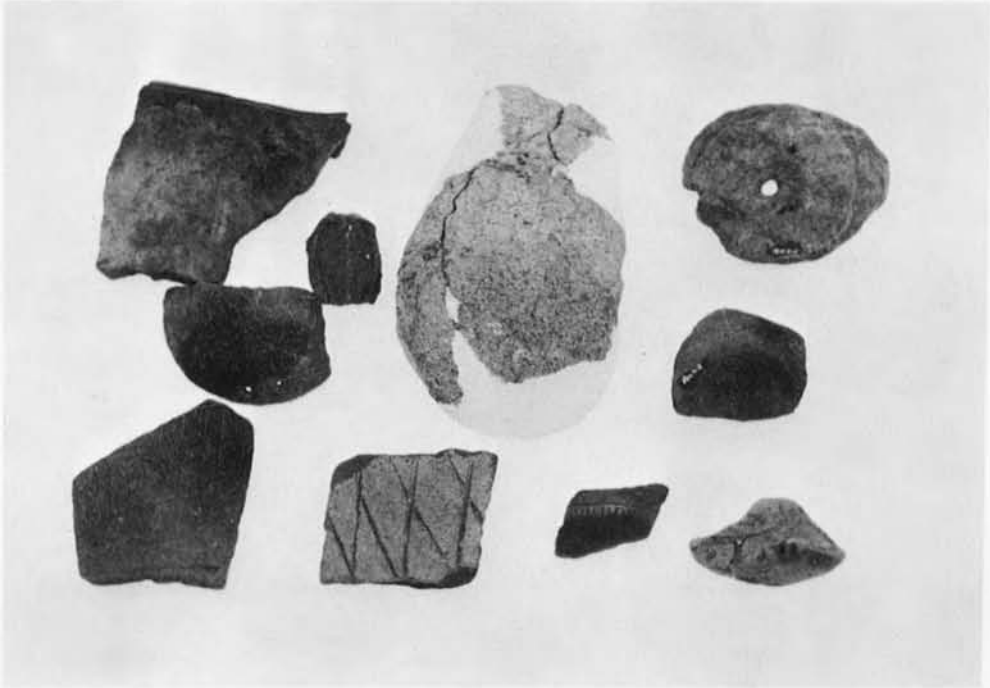
29．第１・３号川跡出土土器(3)

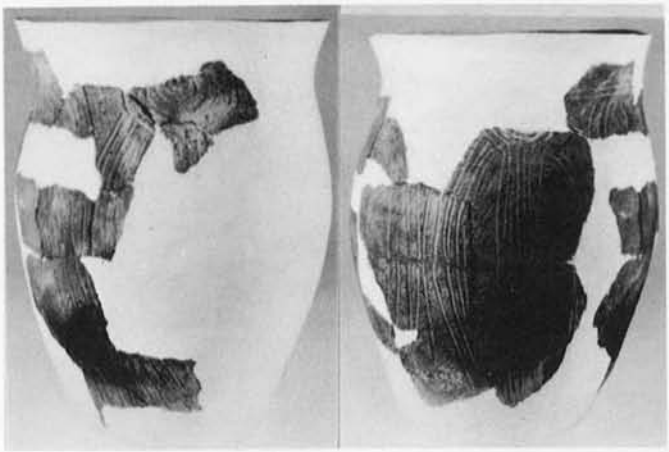
図版20





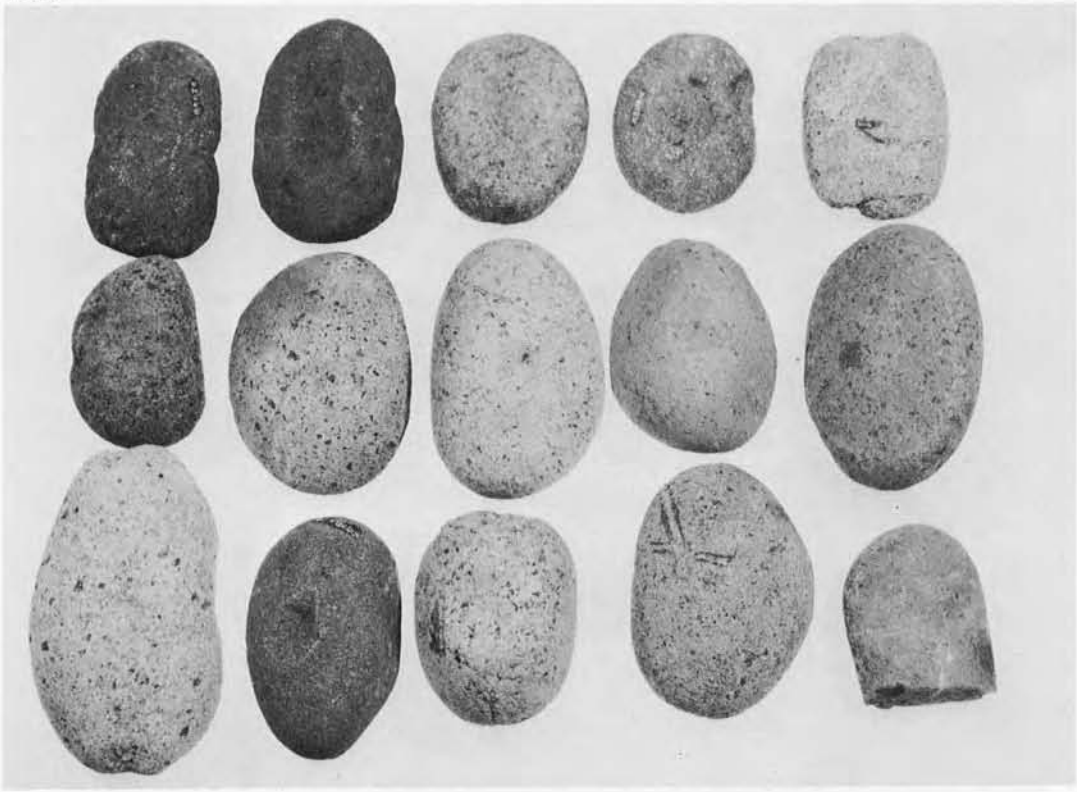
30．第１・３号川跡出土土器(4)

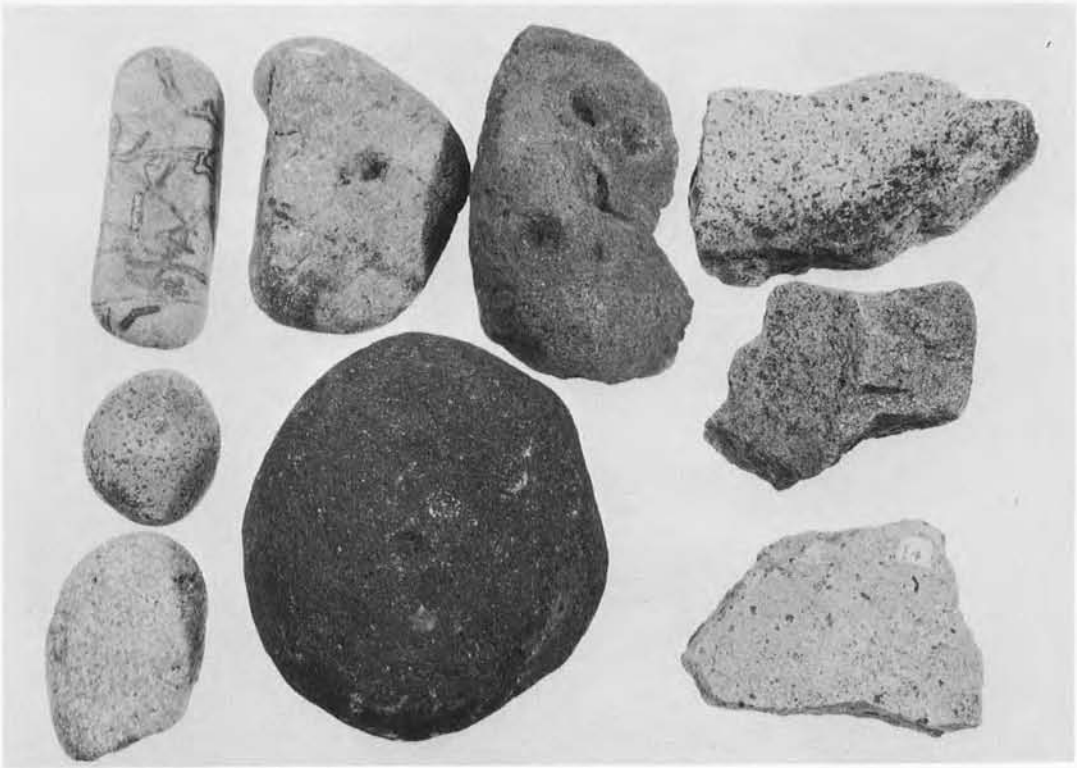




31．第１・３号川跡出土土器(5)

図版22

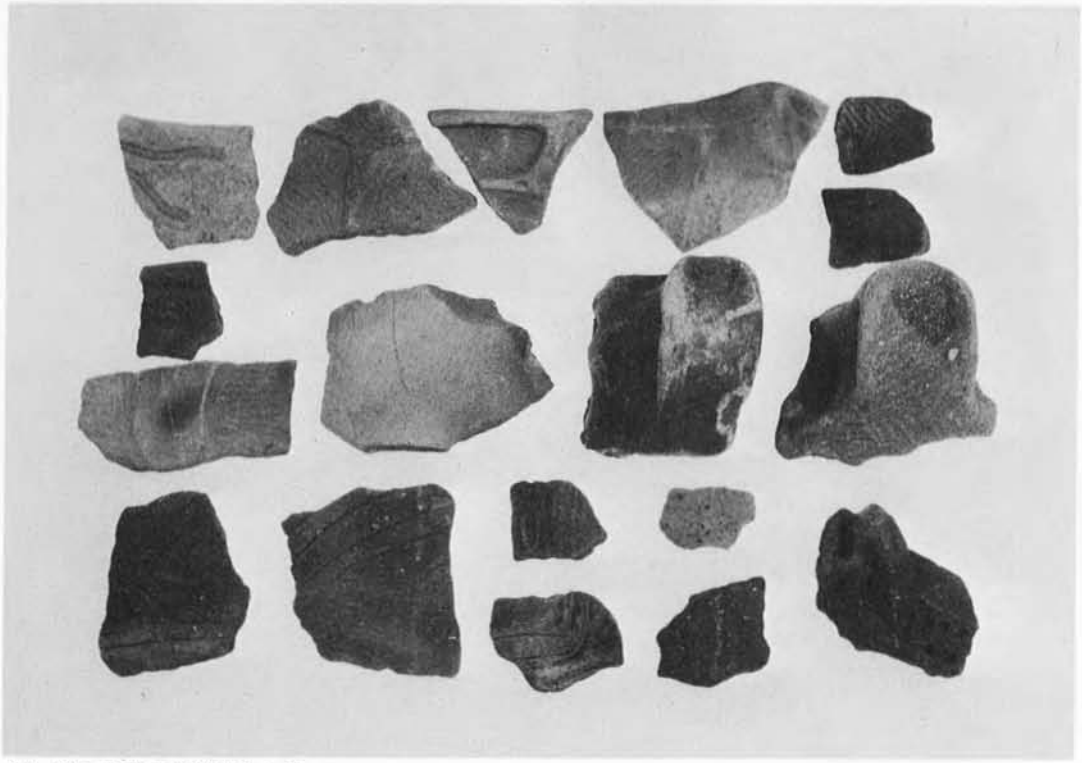




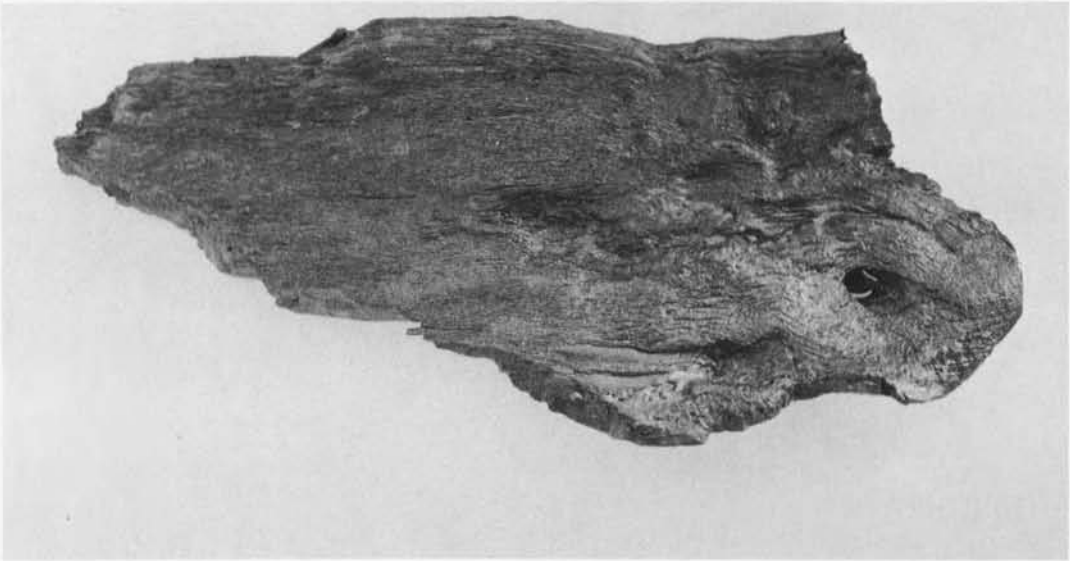
32. 第１・３号川跡出土石器(1)

33．第１・３号川跡出土石器(2)

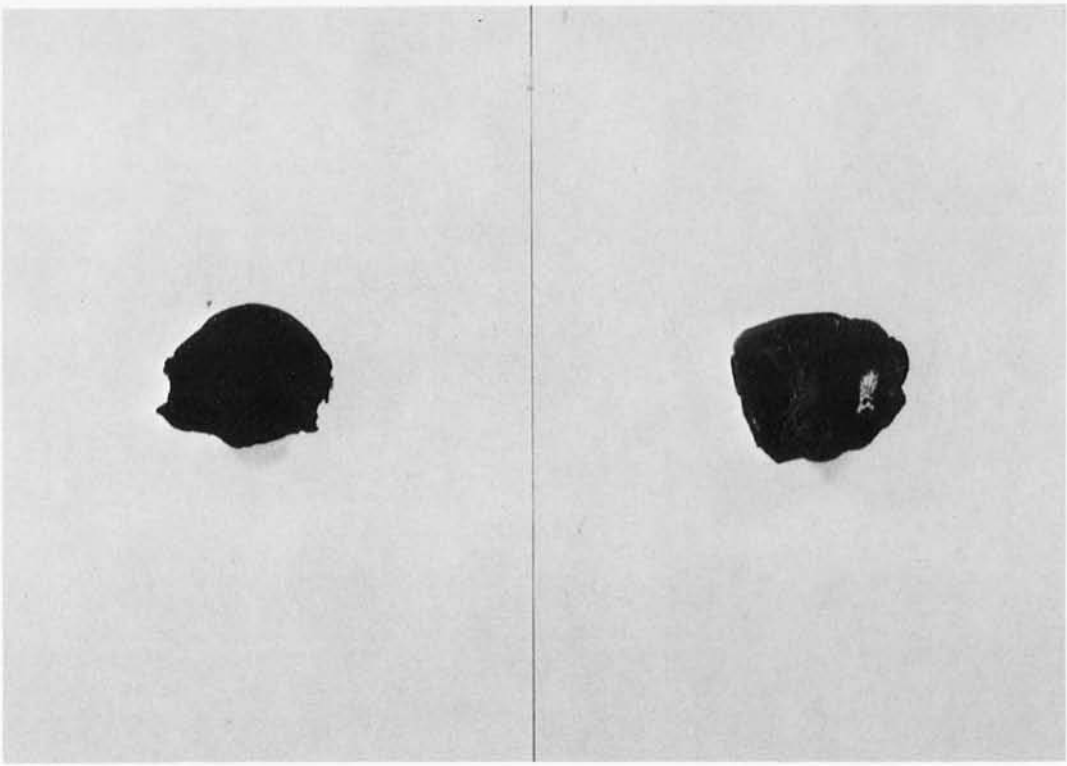
34．第１号土坑出土土器



35．第１号溝状遺構流入土器

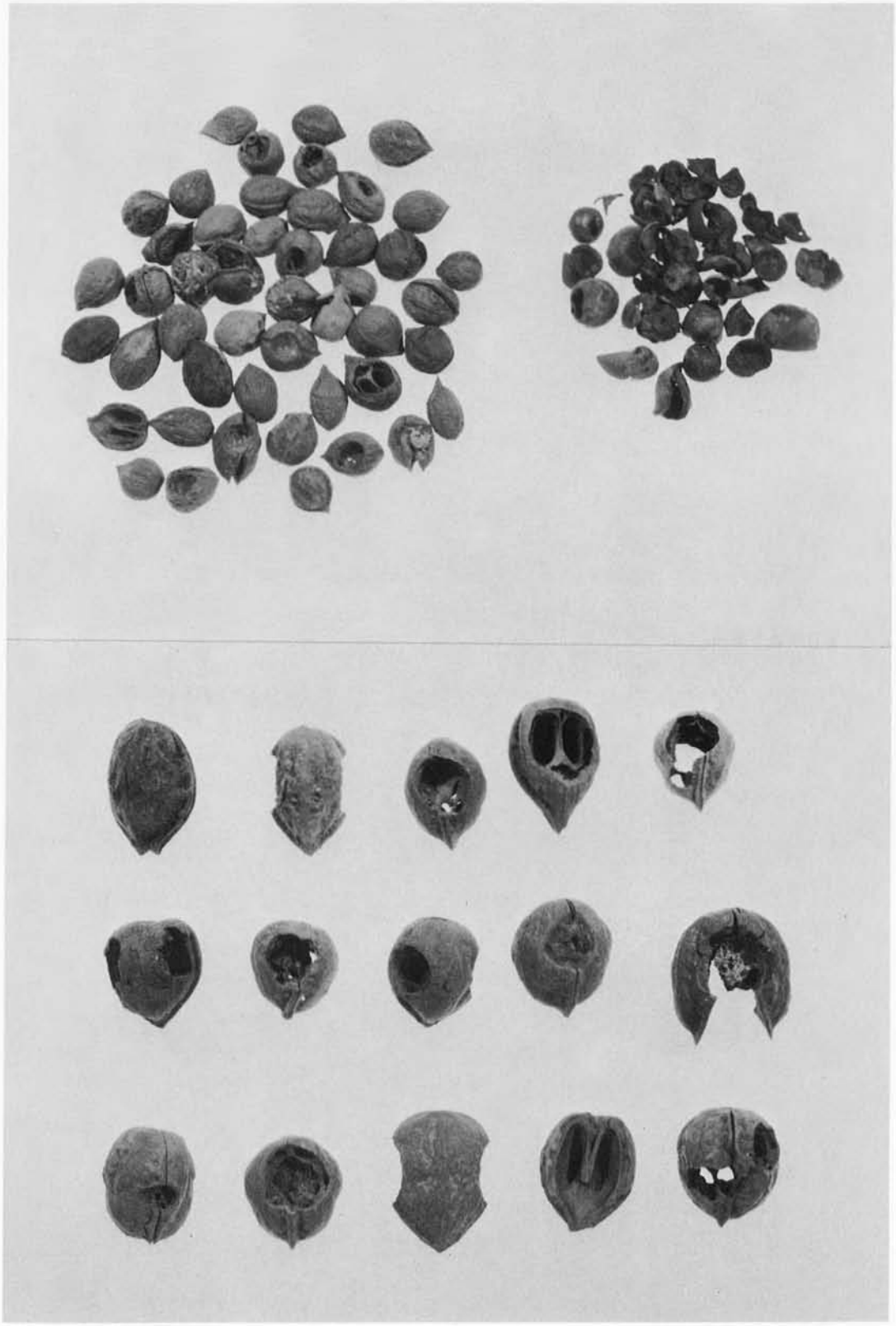


36．丸木舟状木製品



37．縄文時代川跡出土魚骨

図版26

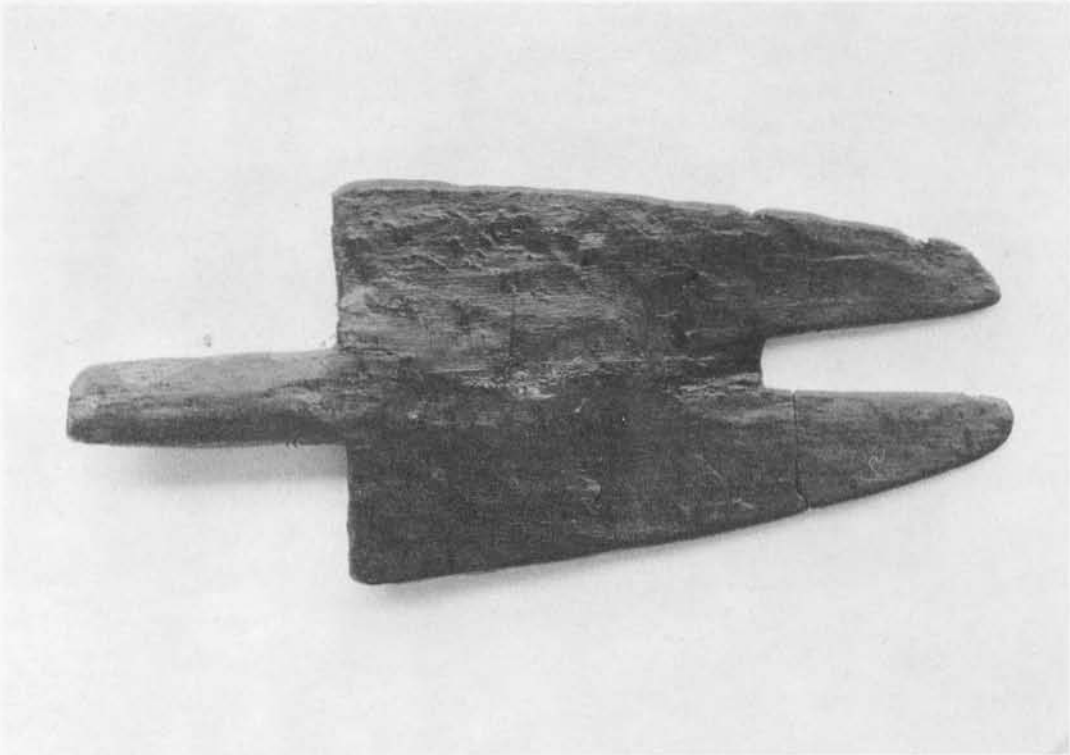


38．縄文時代川跡出土種子（上段左クルミ・右トチ）

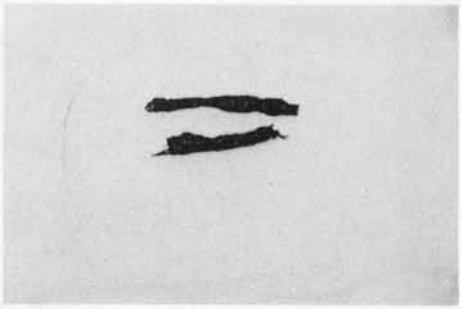
39．古墳時代木製品(1)

40．古墳時代木製品(2)

図版28



41．古墳時代木製品(3)



42．古墳時代出土稲穂

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第９集

深　谷　町　遺　跡

印刷　昭和60年３月９日
発行　昭和60年３月20日

発　行　深谷市教育委員会
印　刷　株式会社　鈴木印刷所